
眞匏祗'

湮織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眞匏祇

【Nコード】

N5247Y

【作者名】

涅槃

【あらすじ】

以前まで投稿していた眞匏祇の続編。

今回の舞台は地球！小さな星で大きな力の衝突！

護りたいものがあるからその両足で立つ。護りたいものがあるから強くなれる。

地球での仕事を終えて眞匏祇の世界へ戻るまでの話。

第一章　○●麻臨搜索編●○　第一話　地球に逃れた逃亡者達

地球についてからのこの数日、良い事と言えばホテルのカウンターの女性と仲良くなったことくらいではないだろうか。そんな事を考えながらいつものように帰ってくるのを待っていた。そしてドアのノック音が聞こえて勢いよく開ける、筈だが。今日は少しいつもと違うことが起こる。

いつものようにドアのノック音がして嬉しさで飛び上がった穂琥はドアを勢いよく開け放ち目の前に立つものを確認して一度ドアを閉める。

「・・・知らんぞ、こんなヤツ」

怪訝な表情をして穂琥は再びドアを開ける。今度はゆっくりと。やはりどう見ても知らない顔の男だった。首をかしげている穂琥にその男は少し困った笑みで尋ねたいことがあると申し出てきたので穂琥がそれを聞くことにする。

「眞匏祗、ですよね？」

男がそう言った瞬間、穂琥ははっとしてドアをボタンと閉めて部屋の奥へと走った。男は何食わぬ顔で部屋の中に入ってくる。

「逃げても構わないよ。だってここは最上階だ。逃げられない」

「あら？最上階なもの」

男の言葉に穂琥は返す。すると男は理解しかねた表情をしたが気にせずに穂琥に近寄ってくる。

男のことなどまるで無視するように慌てる様子もなく穂琥は窓を開けた。そしてその上の淵に手をかけて外へ身を放り出した。その行為に男は舌打ちをして走り出した。穂琥を捕まえるために。

放り出した身体は勢いと腕力で上に向かい屋上に着地する。それから辺りを見回してから追ってきた男のほうへと目を送る。

「そんなひ弱な力で俺に勝てると思っているのか？」

「え？私？無理よ！戦う力なんてもの！相手をするのは私じゃない。こいつ」

穂琥はさつと身体を翻した。するとそこには少年が着地していた。男としては辺りには一切気配がなかったためにその登場には至極驚いているようだった。

「はい、お願いします！薪」

「はいよ」

穂琥の言葉に薪が反応する。男は驚いた表情で薪を観察していた。一体何者かと尋ねてきたが薪はそれをかわした。己の正体を見ず知らずのものに簡単に明かすことなど出来ない。それだけではない。薪の身分をそう簡単には言うことが出来るわけがない。

薪は素早く移動する。一瞬にして男の足元に身を置き男のあごを捕らえて蹴り上げる。男はその痛みで声を漏らす。相手がただの人間であればこんな横暴な真似を薪はしない。でも相手は人間ではない。眞砲祇なのだから。屈んでいるその男に薪はさつと近寄ると男の額に手を当てる。

「じゃ、向こうで頑張れ」

薪の掌から眞稀が発せられる。その大ききときたら相変わらず目を釘付けにさせられる。しかし周囲には一切漏れていないのだから本当に大したものだ。

薪の眞稀によって男はその場からぱつと消えた。転送、といえば簡単だろう。地球から眞匏祇の世界へと返す行為。こうして地球にてこちらに敵意を向けて襲ってくるものは皆、眞匏祇の世界を追われた者たち。とはいっても決して薪が行った行為ではない。

薪は慙夸だ。眞匏祇の全土を支配する力を有した絶大なる存在。でもそれを薪はあまりいいようには思っていない。しかしこういう時にはそういう力を大いに使わせてもらっているわけだ。

というのも、この地球に存在する眞匏祇たちは先にも述べたが眞匏祇の地を追われた者、つまりは慙夸によって迫害を受けたことになる。慙夸によって追い出されたものは慙夸によって受け入れを受理される。薪が慙夸でなければ眞匏祇の世界へこのものたちを返すことが出来ないのだ。前代の慙夸、つまりは薪の父親が行ったことを今、返そうとしているということ。

男を転送してから薪は一息つくと穂琥に向き直って移動のことを伝えた。

「麻臨の情報が入った」

手短に薪は言うど部屋のほうにさっさと戻っていった。穂琥もその後続いた。移動先を聞いて穂琥は嬉しくてはしゃいだ。

「また皆と会えるんだね!？」

薪はため息混じりに笑った。

今度移動する先は前に穂琥や薪が通っていた学校の付近。また中間達と会えるんだとはしゃいでいる穂琥を鎮圧して薪はホテルを出る準備を整えるのだった。

ホテルを出て移動先に到着してから薪は泊まれそうところを探していたが、穂琥の目はまったく別のものを映し出してキラキラと輝いていた。

「薪!こつち!アレが見たい!」

「は!?!ちよ、待つ・・・」

「こつち!」

「うわっ」

穂琥に強制的に腕を引かれ声が漏れる薪だった。別にここに遊びに来たわけではないと訴える薪ではあったが穂琥の上だったテンションを抑えるには少し弱すぎたらしく、そのまま流される薪であった。

穂琥のゴリ押しで店に入った薪はため息をついて穂琥に付き合っていた。大抵女子という生き物が好むような場所に薪が飽きずにいられるわけもなく、半ば魂が抜けたように諦めてふらふらと穂琥の後を着いて行っていた。

「これ、どう!？」

突然穂琥が振り向いて自分の首にかかっているものを見せてきた。

「あーにあってます」

「なに、その棒読み！」

薪の反応に穂琥は少しむくれながら首にかけていたものを元の位置に戻す。さもどうでも良いと言いたげな薪に文句を言うべく振り返りその薪の肩越しに見覚えのある顔を見つけて固まった。

「・・・ん？どうした？」

その様子を悟った薪が穂琥に尋ねたので穂琥は後ろを示す。薪はそれに習って振り返る。

「し、薪！？」

後ろにいたそれは驚いた声を上げて駆け寄ってきた。

「あれ？籐下？」

久しぶりだと嬉しそうな表情を浮かべながら籐下が薪の前に歩み寄る。後ろに穂琥がいることに気がつくのにやりと笑う籐下だった。

「何だ？薪、穂琥ちゃんとデートですかい？」

「あるわけねえだろ」

嫌そうな軽蔑したような、そんな顔をしながら籐下に言い放ったその言葉に籐下は苦笑いを浮かべた。

「おい、籐下！先に行くなんてひど・・・あれ！？」

籐下を追いかけてきたもう一人が籐下と同じ様に薪と穂琥を見て驚く。

「獅場！薪と穂琥ちゃんだよ！久しぶりにこっちに帰ってきたみたいだ！」

「うおっほお！？そうだったのか！久しぶりだなあ〜！」

薪と穂琥が学校に通っていた時、同じクラスだった籐下と獅場。薪と籐下、獅場は久しぶりの再会を噛み締めていると、ふと気づいたように薪が穂琥の所在を確認した。

「あれ？」

すぐそこにいたはずの穂琥がないので辺りを見回して籐下が出口付近に既に移動済みだということを伝えると薪の表情が凍った。それに籐下も獅場もぞっとして笑みのまま固まってしまった。

「勝手に出歩くなって言つてあるはずだけども？」

「す、すみません！！！」

薪の叱責をみて籐下はふっと眉を寄せた。

旧友と出会つて穂琥のテンションも最高潮に近づき楽しそうに歩いているのを薪は呆れてみていた、が。突然表情を陰しくして足を止めたので籐下も獅場も足を止めて薪の様子を窺った。

「どうした？」

「大丈夫か？なんかあったのか？」

二人の質問に薪は答えなかった。その代わりその険しい表情のまま穂琥の腕を鷲掴みして駆け出してしまった。置いていかれた二人は呆然としながら顔を見合わせた。

腕を引っ張る薪に文句を言う穂琥を無視し続ける薪に流石の穂琥も抵抗を見せる。引く薪の手を振りほどいて額に力を籠める。

「なにをするの！二人がいちゃダメだっていうの！？」

「お前は一回、頭を改良しなさい！」

警戒の色を載せたまま薪が言う。穂琥はそれを言われて初めて薪が走り出した意味を考えた。そしてふっと自分に対する殺気に似た眞稀を感じ取ってぞっとした。人がいてはそれらに危害を及ぼす可能性があるから薪は走り出したのだ。

「人気がないところまで移動するぞ」

「う、うん！」

薪に言われて穂琥も全力を以って走り出した。

誰もいない寂れた公園で薪は足を止めた。穂琥は軽く息を上げて辺りを警戒した。

「出て来いよ」

挑発するような薪の言い方にどこからともなく笑い声が聞こえた。周囲に反響して響くその声はどこからしているのかわからなかった。

「姿を晒す気は無いですね」

丁寧な言葉とは裏腹にそれに籠められた感情はまるで嘲り。薪の表情が警戒の色をなくした。

「そうか。余分に眞稀を使ってオレに勝てると思うなよ」

薪の言葉に未だ姿を見せない眞飽祇は嘲笑う。しかし穂琥は内心で思うのだ。どんなに全力を出しても勝てる気がしないと。

そうこう考えている間に薪が穂琥の視界から消えた。別に驚くことじゃない。薪なら普通のことだ。しかし相手のほうはそうでもないらしく驚いた雰囲気を醸し出していた。姿が見えないと高を括っていたのが間違いだ。薪なら眞稀を感知してどこに隠れているかなどすぐにわかる。そんなわけで簡単に引きずり出して薪は男を蹴り上げる。

「オレをやるつもりで来るのなら別にそこまでするつもりは無いけれど、穂琥を狙っているって言うなら話は別だ。少し、本気を出させてもらおうよ」

地面に叩きつけられた男はうめき声を上げる。しかし別に薪に蹴り上げられたことであげたわけではない。むしろ蹴られたというのに痛みなどどこにも無かったための疑問の呻き声だ。

「まあ、傷付けやしないよ」

薪のその言葉にどうやら甘く見られていると怒りを覚えたらしくその男は薪を鋭くにらみつけた。

「わかった、いいでしょう。貴様の言ったとおり本気でくとしましよう」

「来い」

男の言葉に対して薪は身体を半身にして右手を前に出して構えを取った。その態度に男は怪訝そうな表情をした。

「先程までとは違うのがわからないのですか？」

姿を隠すために使っていた眞稀を解除して攻撃のほうに注ぐ事でその力を増大させる、のだろう。そういうことだとは思うが、穂琥には全くそれがわからなかった。きつとそれを露見したら殺されるかもしれない、薪に。そんな事を思っていると薪は男の言葉に答えて姿を変えろと言ひ、話を進めていた。姿を変えろ、といつても別に鬼のように形相が変わるといふわけではない。服装の転換といったほうがきつとわかりやすい。普段は地球に住んでいる人間と同じ、つまりは洋服を身につけているがこういう戦闘においては眞匏祇としての服装でなければ戦うにも戦いづらい。

そもそも服装の転換はただ単に動きやすいとか慣れているとかそんな小もないことではない。普段、地球にいるときは地球の服装に合わせるのはまあ、当然のことだろう。しかし、その地球での衣服の場合は制御が大幅に成されている状態になる。つまり、服装の転換をすることでその制限している力を解放するということだ。ちなみにこの服装の転換、つまりは力の解放を替装ていしょうと呼んでいる。そうやって替装によって眞匏祇の世界にいるときと同じ格好をすることで相手を熨す力を有するのだ。

そうして薪が替装を終えてふっと落ち着いたのを見て穂琥は自分の目を疑う。普段、眞匏祇の世界にいるときに着ている服装ではない。そのことを疑問に声を漏らすと薪が凄まじい勢いで睨んできて穂琥は苦笑いをして身を引くのだった。

男が勢いよく薪に刀を振り下ろした。薪はそれを後ろに飛び跳ねて避けると舌打ちをした。

「いきなり突っ込んでくるなよな」

「そんなに甘くは無い世界でしょう？それに貴様、替装したにも関わらず力に変化が無いではないか？もとより弱ったのですか？それなのにあんなに豪語するとは愚かですね」

男の言葉に薪は僅かに嘲るように笑った。その笑みに男は酷く怒りを覚えたようだったが薪の次の行動にその怒りも一気に冷めるのだった。

第二話 信頼を得た人間

替装して変わった格好には手首にリングが着いていた。それを薪は引き千切る様に取り。それをしてからの薪が放った眞稀に男は圧倒された。しかし穂琥にはその眞稀の強さがよくわからない。きつと普段から薪の眞稀に慣れているということと薪が男にしかその眞稀を放っていないことが原因しているのだろうけれど。きつとこれも薪にばれたらただではすまないので黙っていることにする穂琥だった。

男が軽く震えているのを見ながら薪がため息混じりに理解できていない男に説明をくれてやる。

「オレはね、諸事情によって替装しても直ぐに力が増大しないようにセツトされているんだよ。このリングによってね。だからコイツを外さないとほとんど意味が無いのさ」

引き千切ったリングを掌に載せて男に見せる。男は口惜しそうな顔をして黙っていた。そして薪が体制を変えて男へ突進する。その速さときたら穂琥には目で追うのがやっとだった。

「主の下へ帰らねば！」

男はそう叫ぶと地面を抉って薪の視界の邪魔をした。ブレーキをかけて薪は止まる。土埃が収まったとき、男の姿はなかった。

「あゝあ、逃がしちゃった。珍しいね？そんなミスするの」

穂琥が薪の元によって嫌味を籠めて言ってみたが思いの他自体は軽

くないことを穂琥は薪の表情から悟った。

「こうやって姿を消すときっていうのは眞稀を使う。だからそれなりの感知能力があれば追う事が不可能なわけではないんだよ」

「だったら追えば良いじゃない？」

「出来たら既に行っている」

薪の放った言葉。眞稀を完全に消されてしまっているせいでその後を追う事が出来ない事実。

「主、か……。気になるな」

薪がぼそりと言った。そんな薪に穂琥はふと疑問を覚える。薪は慥夸大。今更ながら慥夸大。現実世界に慥夸大より強い眞匏祇は存在しないはず。なのにその慥夸大である薪を凌いで眞稀を操るものがあるのだろうか。

「薪は……どのくらい力をセーブしたの？」

「あの男に対してか？追跡に対してか？ま、どちらにしるどちらも全力に近い感じでやったんだけどな」

穂琥はその薪の返答に少し不貞腐れた。そういうことが聞きたいんじゃない。

眞匏祇は人間とは比べ物にならないくらい強い。そんな事言われなくたってわかる。つまりそんな眞匏祇がこの世界で大暴れするわけにもいかず薪たちは力を強制的に抑えてここにある。その地球での根本的なセーブがどのくらいかと聞きたかったのだ。とはいえ、襲ってくる側がセーブしているかは知らないことだが。

「眞飽祇のところにいる時と今との違いを聞いたのか。なるほど。そうだなあ。考えたこと無いから知らないな。適当だからな、いつも。感覚でこのくらいってね。ま、あえて言うなら10分の1も無いんじゃないか？」

ケロッと言った薪のその言葉に穂琥は頬を吊り上げた。そんな嬉しそうな顔をした穂琥に薪は首を傾げるのだった。

兎に角、一度落ち着いたのでもしかしたらまだいるかもしれない。藤下と獅場の元へ帰ることにした。

戻ればそこにちゃんと待っている藤下がいた。どうやら獅場のほうは学校での宿題が山積みらしく仕方なく萎れて帰って行ったらしい。そんな事をまるで聞かずに穂琥は自分の世界でにやりと笑っていた。

確かに今回、敵を逃がしてしまっただがそれは相手が薪に対して恐怖し怯え、逃げ去ったのだ。普段の欠片も力を出すことの出来ない薪に。よかった、薪はやっぱ強いんだ。そんな事を思って笑っていた穂琥の耳に思いがけない言葉が飛び込んできて思わず現実世界に帰ってくるのだった。

「さて。話もしないとな。藤下、来い」

「ああ」

穂琥は耳を疑う。いや、待て待て。今後の話しとかもあるのだから人間である藤下を連れていては話に支障をきたすだろう。積もる話とかもあるだろうけれど今はそれ所では無いことを薪が一番よく知っている筈なのに。

疑問の表情を浮かべて薪にその疑問を言葉を使わずに何とか投げかけると薪はそれをキャッチしてあっさりとその回答を述べる。

「だって籐下は知っているから」

「・・・・・・へ？」

思いも寄らない薪の言葉に穂琥は硬直なんてものではなかった。

「あれ？薪、そのこと穂琥ちゃんに言っていなかったの？可哀想でしょ。オレね、穂琥ちゃんたちが『向こう』に行く前に薪から聞いたんだ」

少し困ったような表情を浮かべながら籐下が語った。薪が、あの薪が！ここまで人に対して信頼をしていることが意外に思えた。

薪の掛け声でもかく移動をすることにする。宿を探していて穂琥に阻害されていたことを思い出して薪はため息をついていた。しかし、ここは以前、薪と穂琥が住んでいた場所であって住まう場所が無いわけではなかった。無論、穂琥の家は残ってない。アパートのような所を借りていたわけだから既にそこは開いているはずもない。しかし、薪のほうは一軒家を持っていたし、何かあった時用にと売却はしないでそのまま取っておいてあるはずだった。よってその薪の家まで向うことになった。

当然のように薪の家はそこにあった。これでひとまず落ち着くことが出来るということで中に入ってひとまず休息、寛いで。一息つく籐下が少し怪訝な表情で薪に尋ねる。

「何をしに戻ってきたんだ？よほどの事がない限り戻らないって言

つていた気がしたんだけど？再会は嬉しいけどそれが気がかりでさ」
「眞皐祇の世界の・・・宝、かな。宝探しをしに来た」

薪の誤魔化すような言い方に籐下はむっとしたような顔になったがどこか納得したようだった。それにしても籐下相手に、普通に『眞皐祇』という単語を使ったので穂琥は目が遠くなった。

籐下の質問で何故眞皐祇たちが襲い掛かってくるかということは今更ながらに知った穂琥だった。

地球という小さな鳥籠の中で育った白鳥。その飛び方も駆け方も何も知らない。そんな白鳥が突然籠を飛び出して大空へと舞い上がる。手を引いてくれるものと一緒に。精一杯その翼を羽ばたかせて飛び続ける哀れな白鳥。美しく飛ぶ方法を知らない危うい白鳥は外敵に狙われてその命を危険に晒す羽目になる。一生懸命羽ばたくその翼の音は自らの位置を外敵へと知らせる。飛び方が危ういものに強いものはいない。しとめるのは簡単なこと。その美しき白い翼を紅く染めることは容易いことなのだ。

眞稀のコントロールがうまく出来ない穂琥はそうやって他の眞皐祇たちに自らの位置を知らせてしまう。この地球にもとより住まう者たちにとって新たな眞皐祇の来訪はただ単に己らの命を脅かす存在にしかかなりえない。故に、やられる前にやる。

「ま、そういうわけで穂琥はほっとけば簡単にくたばるから護ってやらねーといけないわけだ」

「なるほど・・・」

「でも私、白鳥か・・・きれいであゝ」

「いや、あくまで大きさの例えだからな。お前は頑張って飛べてもアヒル止まりだ」

「酷い！それ！」

文句を言いながら薪の頭をぽかぽか叩く穂琥を他所に薪は何事も無いかのように話を進める。

「そんなわけでこつちに来てから随分と忙しい思いをさせられてきたんだよね」

「そっか。穂琥ちゃんってそんなに大変な状態だったんだ。人間を危険に晒すわけにはいからさつき走ってどっか行っちゃったわけか？」

「おう、そうだよ。よくわかってんじゃん」

穂琥も薪も人間ある籐下が眞匏祇である穂琥よりも物事理解能力に長けているような気がしてならないと思うのであった。

そんな事を互いに思考していればそれを読みあつて穂琥が薪を殴りにかかる。そんな状態を見て籐下は過去の薪と穂琥を思い出す。過去、といつても半年も経っていないようなそんな位だが、薪の雰囲気の変化に少々驚いた。薪は実際もつと棘のある性格だったような気がするが今はその棘があまり感じられないような気がしていた籐下だった。

「何？」

籐下の視線に気づいて薪が尋ねる。籐下は少し悩んでから発言する。

「いや、まあ。その、なんとなく丸くなった気がして」

「そうか？んゝ。いや、元からこんなだけどなあ。表に出さなかっただけだと思うけど」

薪は神妙な表情で笑って答えた。薪の内心ではこうして感情を表に出すようになって来たのは眞匏祇の方でいろいろあったことを含め、儒楠の影響があるような気がしていた。

穂琥が突然空腹を訴えて冷蔵庫を漁る為に部屋を出て行った。その凶太さに籐下は苦笑いをした。離れる前はもつと慎ましやかな女性であつたような気がするのだけれど。籐下はそんな穂琥の背を見て薪との関係性に疑問を覚えた。

「穂琥ちゃんとき、薪って。学校にいたときはなんか突然妙に仲良さげにしていたし、薪も他の女の子に対する態度とはまったく別の態度を取っていたからてつきり付き合い始めたのかとか思っていたけど、違うな」

「なんだよ、突然。まあ、そうだろう。付き合っちゃいないしもとより誰とも付き合うつもりもねえし。ちゃんと考えてみればわかるって」

薪はさもどうでもよさそうに答えた。確かに薪はそういうことに疎いから当分そう言った感情を有することは無いんだろうなと呑気なことを思う籐下だったが、では何だ。この二人の関係は。

「一体何？同じ眞匏祇だからそんなに仲いいのか？」

「たかが同じ種族だからってここまで必死になつて護ろうとはしねえよ。そんなにオレは暇じゃない」

薪の言つた言葉の意味を籐下はまだわからない。薪の性格上、護ることが出来るものなら全てを全力を以って護るはず。それでも暇が無いからそんな事をしている場合ではないと言う薪の言葉の真意は簡単なこと。薪は慥誇だ。慥誇が誰構わず手を差し伸べるといふ行為は簡単な話ではない。数が多すぎてそれこそその手に差し伸べれ

ばいいのかわからなくなってしまう。しかし、薪とてそれを無視しているわけではない。慥夸になってもまだ未熟さが多くあるからなともいえないが、薪の慥夸としての最終目標は恨むことのない世界。そんな世界が本当にあるとしたらそこは神の世界か何か。そんな風に思っけれど極力それに近い世界を作ること。それが薪の目標、せめてもの償い。

話が反れたが、ともかく籐下は薪が慥夸であることまでは知らない。故に疑問を覚える場面は多々出てくることだろう。

「で？　どういう関係なんだ？」

「双子の妹だよ、あのバカは」

それを聞いて驚愕した籐下。

驚くのも無理は無い。そもそも学校に転入してきた穂琥は最初薪のことなど欠片も知らなかった。もし、兄妹であるというのならそのときに感動の再会をしてもおかしくない。

「オレらは眞匏祗だ。記憶の改ざんくらいできる。それにそうやって記憶を失ったどこにいるかもわからない妹を探すのが前回、地球に行ったオレの本当の目的」

そう語る薪の言葉を聞いて確かに納得できる節が多くある。妙に仲良くなりだしたのもきつとその記憶とやらが戻ったことが理由だと考えれば納得できるし、他の女の子に対する態度と異なった態度を取る薪にも合点がいく。なるほどなるほどと納得している籐下の頭を薪が突然驚掴みにして地面に叩きつけたので籐下は酷く驚いたが視界の隅に鋭く光る槍のようなものが見えたのでぞつとした。

薪が籐下の頭から手を離れたので頭を上げて振り返ると槍のようなものが壁に当たったらしく人一人包めるくらいの大穴を明けているのを目にした。

「悪いな、口で言うより早いと思った」

「い、いや・・・護ってくれてありがとう・・・」

よくわからないけれどそれだけは理解できたので謝礼の言葉を述べる。

薪は籐下の周りにドームのようなものを作るとその中に居れば多少はもつからと言って穂琥のほうへ走っていった。残された籐下はあまりの状況に驚きすぎて呼吸すら忘れてしまいそうだった。そしてそれと同時に眞匏祇という危険性を認識した。聞いただけでは全くわからなかったことだが、薪が全力をかけて穂琥を護ろうとする意味がなんとなくわかった気がした。一瞬でも気づくのが遅ければ籐下の頭はあの槍のようなものに粉碎されていた。そんな命のやり取り。少しも気を抜けない恐怖の世界。それを同じ年の少年と少女が身を置いている。目の前にいる。それがなんとも言えず・・・。

台所であたふたしている穂琥に駆け寄ってひとまず穂琥が無事であることを確認する。

「よかった。来い、退治しに行くぞ。籐下も居るから早いとこ片付けないとな」

「うん！」

穂琥は薪の背を追って駆け出した。

目の前に立つ男女。その風貌からしてどう考えても人間ではない。

「こんな愚図を潰すのにあいつは戸惑ったわけ？」

女が甲高い声を上げる。男は黙って目の前のものを見据える。

「こんなしょぼい結界しか作れないようなヤツにアイツはさすがに負けて帰ってきたって言うの？」

「触らないほうがいい」

目の前の男女が何であるせよ、会話していることを聞く限り、薪たちにとって敵であることを意識させられた籐下。そして男の忠告を他所に女は籐下の周りに張られているシールドに触れる。すると女は数メートル後ろに吹っ飛んだ。

「だから言っただろう。雫^{だと}杜がそこまで弱い奴ではない事位知っているだろう」

「っさいわね！私より弱ければ皆同じよ！それに比べて……。今回の彼は敵ながら惚れちゃいそうね」

女は頬に手を当ててうつとりとした表情を浮かべた。先程、吹っ飛んだときに出来た傷ももう癒えている。眞菖祇ならばこれが普通なのだろうか。その辺のことは全くわからない籐下はただ、今あるこの状況下で生きていられるかの方が重大であつた。

男女は籐下から目を離すとあらぬ方向に目を向けた。そうしている二人の会話で眞稀を隠していないとか、その方が抹殺しやすいとか言っているとなるとおそらく薪と穂琥のことを言っているのだと理解できた。

女はやたらと嬉しそうな顔をしながら男に行ってもいいのか訪ね

ていた。男のほうはそれを肯定していた。すると女はさらに嬉しうになり、にたつと気味の悪い笑みを浮かべるとその場からぱっと消えた。男は籐下のほうを見下ろして言った。

「運が良かったのだよ、君は。いや、悪かったのかな」

そういうと男はその場から消えた。籐下はただ黙して薪たちが帰ってくるのを待つことしか出来なかった。

第三話 影に隠れた存在

「追って来るな・・・」

走り続けてやっと止まったところで薪が言った。先程、家を襲撃してきた眞匏祇から人間を放すべく走り戦える場所まで移動して自分たちの存在はここにあると眞稀を放つ。それで向こうが此方に来てくれるなら文句は無い。文句が無いはずなのに。

「ダメなの？」

穂琥の疑問の声上がる。薪は小さく唸る。わかつてはいる。来てくれることに關してそれが狙いで誘っているのだから。ただ、相手が素直にその誘いの乗りすぎているような不安もない事もない。穂琥はいいほうに考えよう？と囁く。それに薪は頷く。

女がすつと舞い降りる。その後に男が降りる。感覚からしてこの二祇であっている。

「急ぎすぎだ、眞稀を無駄に使うな」
「だってえ。早く会いたいんだもの」

女はきやいきやいとはしゃいでいる。男のほうはため息をつく。

「雫杜が世話になったな」
「だと？・・・ああ、この間の男か？」
「名乗らなかつたの、あのバカ！」

女が急に話に参加する。

「私は誓茄^{せいな}、よろしくね！天才の眞匏祗さん」

「我が名は鼓斗^{こたう}」

「へえ」

薪は警戒したように相槌を打つ。特に誓茄の言った言葉のときの薪の表情には萎縮した穂琥だった。なんだか一瞬、怒ったような気がした。

「相手に名乗らせ己は名乗らぬか」

「・・・そっちが勝手に名乗ったんだろう？認めてもないどころの眞匏祗に名を言う筋合いは無いな」

「きやつ！いいわね！ますます気にいちゃった！」

薪が名前を伏せたのはきつとそういうことではない。いや、もちろんそう言ったことも含まれるのだろうけれど。眞匏祗の慥^{しやう}である以上、その名を明かしてはいけないのだろう。だからそれは同時に穂琥も同じことだった。

「さて。戦わないとならないのか？」

腰に手を当てて薪が呆れたように言った。鼓斗はそれを当然だと肯定する。理由を薪が問うと鼓斗の言葉を阻害して誓茄が割り込んだ。

「ちょっと！気に入った子とは話がしたいの！私に喋らせて！」

薪が力を抜くように肩を落として誓茄の話に耳を傾ける。しかし、誓茄は薪が求めた回答をくれるような話をしてはくれなかった。話すのはただ、眞稀をコントロールできるといふ薪の性能について語るだけ。

「理由が聞きたいんだ」

薪が誓茄の話の区切つて言うと言つと誓茄はそれをむつとする様子も見せずむしろ嬉しそうにせつかちね、と笑う。そんな誓茄は視界の中から消える。

何が起きたかは一瞬ではわからなかった。目の前で怒りを見せる薪の表情とさらに嬉しそうになった誓茄の表情が見えるだけ。

誓茄は穂琥に牙をむいた。穂琥を斬り殺そうとした。しかし、それを薪が許すわけもなく、見事に誓茄の刀を振り払う。

「凄い！替装しないで刀を出せるのね！私たちの中でも数少ないわく！」

突然穂琥に攻撃を仕掛けた理由はおそらく、薪に刀を抜かせるためと、叩かなければならない理由を穂琥が知る必要もなく、そもそも存在自体が必要ないと判断したからだろう。

誓茄はただひたすら薪のその強さに惚れ込んだらしく浮かれた声を出す。その声が穂琥の耳には耳障りで仕方なかった。

「さあて。その娘を私たちに預けてくれないかな？安心して、傷付けやしないわ。あなたに来てもらいたいただけなの、我らの主の下に」

「誓茄。それは早すぎだ。もっと情報を・・・」
「構わないわ！それくらいであの方の『シナリオ』は崩れたりしないわ」

誓茄と鼓斗が軽い言い争いを始めた。段階がまだ早いと訴える鼓斗に対して支障はないと豪語する誓茄。誓茄の場合は感情論で筋がない。よって鼓斗の言葉で誓茄は唇を噛むことになる。

「主の『シナリオ』を崩すなど我らには出来はしないが、奴には出来るぞ。その位の力を有している。お前がそれは一番わかっているのではないか？故に惚れたのだろう？」

押し黙る誓茄。鼓斗は警戒したような顔をいている。その様子をただ見ているだけの薪と穂琥。しかし、いい加減に薪の痺れも切れてきた。

「さて」

突然発せられた薪の言葉と眞稀。それに驚いた誓茄と鼓斗は息を呑むようにして薪のほうに目を動かした。

「話はその辺でいいか？そろそろ終いにしたいんだけど」

薪の言葉にかなりの警戒を抱いたらしい鼓斗は不服そうな表情をしつつも引くことを決めたようだった。しかし、それに喰らい付いたのは誓茄だった。

「面倒だな。お前らの言う主とやらがどんな奴かは知らんが。お前らが着くほどの眞匏祗だ、相当できるんだろう？そしてそんな主が作った『シナリオ』とやらがそう簡単に崩れるとはオレには思えない。お前ら二祗を今ここで倒したところできつと何の支障も出ないだろうとオレは思うわけだ」

薪の言葉に鼓斗も誓茄も硬直した。一度も会っていない主と呼ぶ者

の強さと力量を直感で理解し、それを口にする。

「今、引くというのなら追うつもりは無いから行け。ただし、一戦交える、はたまたこの女を連れて行こうというのならオレは申し訳ないが本気を出す」

薪の言い切った言葉に誓茄が、喰らい付こうとしたがそれを鼓斗が遮り引くことを要求する。しかし、鼓斗としてはすんなり引かせることが腑に落ちないようだった。

「家に友を閉じ込めているしな。それにお前たちみたいな奴との戦闘は極力避けたい。この地球が壊れてしまう」

鼓斗は納得いったように頷くと小さく笑ってから誓茄を宥めてその場から消えた。誓茄は薪を恨めしい目で見てから姿を消した。

やっとまともに会話が出来る。穂琥は薪に傍に駆け寄ってそっと薪の背に手を置く。

「昔、まだあの方の支配下にあつたとき、罪を犯したものは絶対殺された。それから逃れようとして地球に足を運んだ」

穂琥が尋ねる前に薪は語りだした。それが嬉しいような複雑なような穂琥だった。

さすがの慥夸といえど、さすがの巧伎といえど地球まで逃れた眞匏祇を追ってまで殺すつもりは無かつたらしい。何より面倒だった。地球に逃れたければ逃れればいいと巧伎は割り振っていた。

そもそも眞匏祇にとって人間に対しする負の感情は深い。人間を

毛嫌いし抹殺したいと願う程に。しかし流石の眞匏祇といえどこの地球に住まう人間全てを消し去る力を有しているわけではない。

もともと、慙夸なら別の話したが。

よって地球に逃れた眞匏祇は結局嫌う人間の元生活しなければ習いために苦痛であることに変わりは無かった。さらに眞匏祇の世界から人間の世に行くことは容易くできても戻ってくることは容易ではない。故に、わざわざその反乱分子を殺しに地球に赴く理由などなかった。

そして厄介なのがここから。殺されることを恐怖に思つて逃げてきた眞匏祇たちは大抵心弱く、この地球に足を踏み入れた眞匏祇を片っ端から消していこうとする。慙夸の追撃ではないかという不安から。だから不安定に発している穂琥の眞稀を感知すると襲ってくるのだ。さらに面倒なのは先程の連中だ。

決してそんな弱い存在には思えないのにも理由がある。ただ逃げることを選んだ先程の眞匏祇の話とは異なり、こちらの眞匏祇は慙夸に対する憎しみが強い。必ず噛み付くに戻るという意気込み。それがあるからこそ、普通の眞匏祇よりもはるかに強い力を有していることになる。慙夸に復習するために存在している集団。その一員が先程の誓茄と鼓斗、さらには雫杜ということだ。

そして問題なのは薪が慙夸であるかどうかを知っているか否か。鼓斗と誓茄は気づいていないことは事実。もし、慙夸と知っているならあんな口調、態度ではないはず。しかし、彼らが『主』と呼んでいたものがどうかは流石の薪とて理解は出来ない。

そんな話を家に帰りがてら穂琥にしていた薪だった。そんな家には途方にくれた籐下が待つていた。そんな籐下を包んでいたシールドを開放する。やっと身体を動かせるようになった籐下はうんと身

体を伸ばした。

「悪いな、籐下。無理させた」

「いや、そんな事ないよ。助かったよ」

「さて、籐下。とりあえず今日はもう帰れ」

「・・・わかった。無理するなよ、色々さ」

「おう」

籐下は少し薪の顔をのぞき見てから諦めたようにその瞳を伏せて帰って行った。

籐下を送った後に薪は気合を入れるようによしと声を掛けた。それに驚いた穂琥は薪を凝視する。

「少し移動するぞ。遠いから覚悟しろ」

薪にそういわれてぎょっとしたが移動術を使うといったので特に穂琥にすることは無いと悟る。なんたつて穂琥にはその技は使えないのだから。それにしてもどこに行くのかは見当も付かない。穂琥はそれでも薪の後を着いてく。不安なんて全く無いから。

第四話 慇懃と人間の繋がり

ふわっと浮いた気持ちの悪い感覚。これが移動術の特徴。全く別の場所へ移動できる技。気持ちの悪い浮遊感が終わってやっと地面に足が着く。そうして目の前に広がる広大な土地と屋敷。一体ここはどこだ？

「ここって・・・何!?」

「入ればわかるんじゃないか？」

薪はしれつとした顔をしてさっさと歩き始める。穂琥はそれに習うしか出来なくて薪の後を着いていく。

薪はその広大な土地にずかずかと入り込んでいく。中に入ると警察のような格好をしたものが鋭く睨んできた。しかし薪はそれすら気にする様子も無くどんどん進んでいくが、その警察のようなものが近寄ってきて問い詰める。

「君達！ここは君たちが入って良い様な場所ではないぞ！帰りなさい！」

荒れの滲むその声には怒りというより警戒だった。確かにこの場は他の場所に無いどこか神聖な気配を匂わせてはいるが、穂琥には一体ここがどこなのかは知らない。その警察のような男性は薪の腕を掴む。

「君！」

その声に流石に薪は反応を示してため息をついた。男性の目の前に

手帳のようなものを押し付ける。それを一瞬だけ如何わしい表情をした後、はつとした顔をしてから薪の顔とその手帳とを見比べた。それからいまだに不信感の残る顔のまま通ることを受諾した。

穂琥はその手帳に疑問はあまり持たなかった。薪は眞匏祇で、こは地球。人間の住まう場所。人間の世界に『まほう』なんて存在しない。故にそんな『何処にでも入ることが出来る券』などというものを簡単に入手できなくて当然ではあるが、眞匏祇である以上それらの『偽装』は簡単に出来る。が、薪の行動には疑問を覚えた。薪はあまりこういった無理強いするような行為はしない。よって、偽装するなんて如何わしい行為をするとはとても思えないからだ。

「ねえ、薪。さっきの手帳って何・・・？なんだか怪しい・・・」
「大したものじゃねえよ、オレら眞匏祇にしてみれば」

そう言つて薪は手帳を穂琥に渡してくれた。手帳といっても中身は紙があるわけではなく、何かの紋章のようなものが描かれているだけだった。どちらかという警察手帳のようにも思えた。紋章が違ふけれど。

進んでいくとそれはまあ、大きな屋敷が見える。薪は何のためらいも無くその中に入っていく。流石に穂琥も焦つて身を萎縮させた。中に入ると脇に小さな扉がある。その扉に入るとそこは人が2、3人入ることが出来るか出来ないか位の小さな空間だった。

「ここ、何？何をする場所なの？」
「空間移動をする場所だ」
「・・・へ？」

人間の造つた施設にそんなものが存在するわけも無い。しかし薪は

そこで移動術を行使して全く同じ場所へ移動する。

その扉を開けるとそこには美しい女性がいた。穂琥はその女性に一瞬見とれてその後、目を大きく見開いた。その女性を穂琥は知っている。そしてどんな女性かを知っている。故に驚いたのだ。そして彼女のほうもとても驚いているようだった。驚き具合では両者とも引け劣ることは無かった。そんな中に響いた張りのある声。

「急な訪問をお許しください」

薪の声を聞いて女性は驚いた表情から通常表情へと戻した。それから一体何をしに来たのかを尋ねる。その声は少しだけ震えていた。

「まずはこれ、証明書を」

薪は先程の警察のようなものに見せた手帳をその女性に見せる。女性は顔の奥で震えを見せた。しかし表には決してその様子を出さない。気丈な女性だと穂琥は感じた。それでも彼女の顔は蒼白になっていた。

「そ、それで今回は何用で・・・？」

彼女は礼儀正しく起立して薪に向う。薪も同じ様に起立して向う。硬くなっている女性に薪はそっと笑いかける。

「そんなに硬くならなくても。父上は少し異常でただけです。今回危害を加えるようなことはいたしません」

そっと話した薪の言葉に彼女は少しだけ安どの表情を見せた。

安堵した彼女とは裏腹に穂琥は衝撃を受けて仕方なかった。

彼女は間違うことなく人間だ。その彼女に薪は『父は』と語った。つまりは薪の父を知っていることになる。そして今の薪とは異なり、父、つまり巧伎が眞匏祇であることを隠して彼女と接したとはとても思えない。

「巧伎様は・・・？」

「・・・他界した。随分と前に。その報告を兼ねてここへ来させてもらいました。遅くなってしまったことをお詫びします」

「い、いいえ・・・」

彼女の瞳は揺れていた。

まさか人間とこんな関わりを持っていたというのか。驚きでしよ
うがない。巧伎がこの女性を殺さなかったことが少し意外にも思え
るほど、彼女の権力は相当強い、はずだ。慥を前にすればかすん
でしまうけれど、この地球にとっては相当な権力。

「あの、陛下。失礼致し・・・客人ですか・・・？」

部屋に入ってきた一人の男性。

名前を確か、貴船小夜きふねよと言った。この女性は何を隠そう、この地
球のトップ所有者、天皇陛下というわけになる。

入ってきた男性を小夜は何とか宥めて部屋から追い出した。薪は
申し訳ないと謝罪の言葉を述べるが小夜は必死でそれを否定する。

「いえ、貴方様が悪いわけではありませんので」

小夜の敬語に一瞬だけ薪は不機嫌そうな顔をしたが直ぐに戻した。もとより彼女は敬語を使用する立場の人間なのだから当然だ。相手が慥々であるうが何であるうが関係ないということを思い出す。

「それで。何用でしょう？」

最初よりは大分落ち着いたその声に薪は安心したような顔をしていた。

「麻臨という危険な宝玉が此方に来てしまつて。それを回収するのが今回この地球にお邪魔させていただ理由です」

小夜は麻臨と言う言葉を聞いて目を丸くした。別にその言葉を知らないわけでは無さそうだった。とすると、おそらく巧伎からの情報を与えられているのだろう。

「その回収作業をするので多少なりともこの地球の軸が揺らぐかもしれませんが、揺らいだぶんはしっかりと元に戻しますので」

小夜は納得したように美しく頷く。

それに反して穂琥はそろそろ我慢の限界に達していた。

「薪！一体何？！天皇陛下だよ！？この世界のトップだよ！？っていうか人間だよ？！何考えているの！？」

「何も考えていないお前には言われたくない台詞だな」

「酷い！」

突然話に乱入してきた穂琥に小夜は酷く驚いていた。まるで今までその存在に気づかなかったみたいに。震える声で穂琥が何であるの

かを尋ねてきた。

「私は穂琥です！ホク「スインス」トウウェルブ！薪の妹です！」

陽気に答える穂琥に少し面食らったように頷いていた。

「さて、お忙しいところ時間を頂いてしまつて申し訳なかった。ではまた来ます。その時は良い報告を持つて」

小夜はその言葉にはつとしたように深々と頭を下げた。そうして薪と穂琥はきたところから帰るのだった。

「薪様・・・、ですか。慥々もお変わりになれるのですね・・・。巧伎様と異なり素晴らしい方です・・・」

小夜は一人になった部屋でそう呟いた。

穂琥はひたすら薪に投げかける。人間ともそんなかわりがあるなんて知らなかった。しかも相手は天皇陛下ときたら驚きだ。しかし、薪はさらりと凄いことを言つてのける。

「ま、所詮天皇だしなあ。慥々なんかを前にしたらまだまだ小さい存在だよ」

本当に我が兄ながら一体何処までコイツは・・・。穂琥は小さくため息をつく。ここに来てより薪を遠く感じた穂琥だった。

そんな薪はこの皇居に危害が及ばないように普通には見えない特殊なシールドを張った。これでおそらく、相当の手誰が登場しない限りここに手を出すことは出来ないだろう。

皇居を出ると穂琥は鋭く肌を刺す殺気に似た眞稀を感じた。それを薪に伝えたと少しやわらかい笑みを向けてきた。

「そういうの、分かるようになったんだなあ」

「なんか腹立つ！それ所じゃないでしょ？！」

「はいはい」

妹のちょっとした成長を噛み締めながら薪は足に眞稀をためる。穂琥がその行為に疑問を感じている間に、薪はさつと穂琥を抱えて空へと飛び上がるのだった。無論、穂琥の大絶叫をおまけして。

第五話 新たな幕開け

今感知した眞稀は全部で4つ。つまり4祇いるということになる。

穂琥を連れて薪は敵の待つ場所へたどり着く。誓茄と他にも女が一祇と男が二祇いる。見覚えの無い顔ぶれだった。

「何用だ？」

薪の言葉に誓茄は嬉しそうに微笑んだ。

「何、こいつら。強いのか？」

誓茄の隣に立った女が嫌そうな声を上げた。誓茄はそれを聞くと自慢層にお気に入りだと鼻を鳴らした。そのやり取りを見て薪は肩を落とす。

「へえ！鼓斗と戦うのを拒否したっていうやつか？！」

その後ろにいた男が感嘆の声を上げる。さらにその後ろにいる男は此方を睨むようにして押し黙っている。

女の名前は圭けい、男の方は流貴るき。ずっと黙って言葉を発していない男が瞑べい。誓茄は相変わらず腕を組んでにやりと笑っているが、圭は戦闘態勢に移ったので薪は目をすっと細める。

「やるのか？」

「おい！？この数を前にしてやる気なのか？大したものだな！？」

薪の言葉に流貴が反応を示した。薪のその強気は圭に買われたが結局、やるのは薪であると圭は豪語した。

「つつても戦闘するつもりは無い。『シナリオ』とは異なるからな」

圭が額に力を入れて言う。相変わらず誓茄は信徒の一戦を交えたくてうずうずしているようでさすがの圭もその様子を不思議に思っただらしく、そんなに気に入ったのかと尋ねた。

「ええ！強いわよ〜！」

「・・・・・・。一戦、やりたいな」

圭の言葉。それに流貴は驚いたようにやるのかと聞いた。そうやって騒いでいる中に穂琥が少し怯えているのを薪は感じた。

穂琥の瞳に映る4祇の眞匏祇たち。そのうち、一つだけ特殊な存在を感じる。本来、眞匏祇は眞稀を完全に消して気配を消すことは出来ない。薪とて眞稀を最小限に抑えていて普通の眞匏祇にとってはまるで消えているように感じるだけのこと。桃眼で視れば眞稀を視る事は案外容易くできる。

しかし。たった一祇。根本的に眞稀を見ることができないものがある。そのものに対して酷く怯える穂琥。そして様子から察するに薪もそれに気づいているようにも思えた。

「あんだ、名は？」

低く、重たい声。まるでそれは鉛のように。その声が響いたとき、さっきまで騒いでいた誓茄や圭、流貴は押し黙った。

声を発したのは瞋。眞稀を見ることが出来ないもの。その瞋に名乗ることは出来ないと答える薪。すると瞋は薪を一度鋭く視てから視線を外した。

「名は？」

再び問う。薪はその瞋の言葉に何故か焦りを感じた。一体何故自分が焦ったのか理解することすら出来ないほど、妙に焦ってしまっていた。

「断ると、言っただが？」

「何故語らぬ？」

「・・・語れぬ理由があるからだ」

薪の言葉全てで瞋はまるで何もかもを見据えていそうな気がしてならなかった。

一方の、誓茹たちは正直驚きで言葉を失っていた。滅多に声を発しない瞋だが、今、目の前にいる少年に興味を持って話しかけていることが意外で仕方なかったのだ。普段から全く喋らず實際、声を聞いたのだってこの長いときの中で2、3度といっても過言ではない。そうだというのにここまで語っているとは驚く以外に無かった。

瞋は輕蔑するように薪を睨んだ。しかしその後、目を伏せて呟くように言う。

「エンドと同じ『氣』を感じたが。氣のせいかな」

薪はその言葉に全身に鳥肌が立った。自分の奥からこみ上げくるものは何だ。驚きか。いや、きつと違う。これは悲しみと憎しみ。そ

してそう感じた自分に怒りが沸く。

瞑はそのまま喋らなくなった。薪はそんな瞑を凝視する。しかし、瞑はもう言葉を発する気は無いようだった。

「あの、瞑、さん？」

穂琥が急に会話に参加した。薪は驚いて穂琥に振り返る。穂琥の瞳に残る眞稀を感知して僅かにでも開眼したことを知る。

「貴方、一体なんですか？『何』ですか？」

穂琥の質問に瞑は不機嫌そうに顔を歪めた。しかしやはり何も言わない。瞑の中で既にもう何も言う必要がないと判断したのだろう。

その異様な空気に気圧されていたのは何も薪だけではない。当然、瞑と共にここにいた他の3祇もダメージを受けているようで若干の狼狽した様子を見せていた。

「引いてもらえないか？」

薪の声に賛同するように流貴が声を張る。

「おし、ここは引こう！一度戻って体制を立て直そうじゃないか？！」

それに同意する誓茄と圭。無論、瞑も引くつもりのようにだった。少しだけ安堵する薪。しかし、瞑がふっと薪を睨む。薪はその目に一瞬だけ心臓を貫かれる感覚を覚えた。前にどこかでそれに似た何かを感じたことがあるような。

「あんたと遣り合う時を待っているよ」

先程までの話の中で一番重たいその声にぞつとする薪。本能が告げる。この男は交えてはいけない、何があっても、と。

そうして彼らは姿を消した。全身から力を抜いた薪は腰を下ろす。そしてどつと疲れた息を吐ききってから穂琥に投げかける。

「なんであんなこと聞いた？」

「ご、ゴメン……。でも気になって……。だって……。だって眞匏祇じゃないよ！アイツ、何！？だって！！」

「落ち着けて」

薪の宥めるような声に穂琥は黙る。穂琥のいつていることはおそらく事実だ。眞匏祇であるのに桃眼ですら眞稀を視る事ができない。それにあの異様な空気。普通の眞匏祇とはとても思えない。

「ねえ」

神妙な面持ちで穂琥が薪に呼びかける。薪は目だけを穂琥に向けて反応を示した。穂琥は少しだけ黙ってからそつと口を開いた。

「綺邑……。さんって、眞匏祇とは全く違う生き物だね？」

「？ 当たり前だろう」

穂琥の質問に疑問の表情を浮かべる薪。薪の返答を聞いてさらに押し黙る穂琥の様子を見て、薪ははつとした。

「お、おい……。まさ、か……」

「い、いや、わからないけど！」

僅かな可能性。しかしその可能性を否定することも出来ないことも事実。綺邑にそのことを尋ねてみても構わないかもしれないが、取り合ってくれるとはとても思えないのが現状。

瞑は死神かもしれない・・・

第六話 属する世界の違い

帰宅途中の出来事。薪がはたと足を止めた。そしてあらぬ方を見て怪訝な表情を浮かべている。それから穂琥の腕を掴んで着いて来いと走り出す。何が何だかわからないけれど諦めて着いていくことを選ぶ穂琥だった。

とある家の前で薪の足は一度止まった。そしてその家を凝視している。その様子を見ていることしか出来ない穂琥は怪訝な表情を浮かべる。そして薪はその家のインターフォンを押す。しかし、返答は無い。留守なのかと思った穂琥だったが、薪は何も気にしないかのように勝手に家の敷居をまたぎ、玄関の戸を開けてずかずかその中に入ってしまったので驚いたなんてものではなかった。

中には頬を濡らした女性がいた。その膝元には白い顔をした男性が横たわっている。見るからに既にその顔に生氣は無い。息を引き取った後だろう。

そんな女性にも気にしないように薪はきよろきよろと辺りを見回している。勝手に入ってきた男女にその女性は酷く驚いている様子だった。穂琥はそんな女性に平謝りして何とか薪から意図を聞きだそうとする。

「旦那、か。いつ逝ったんだ？」

薪の言葉に流石の穂琥も怒りが沸いた。大切な人を失った人間にそんな言葉をかけるなんて酷すぎる。しかし、よく見ると薪の目は女性を見ていない。むしろまったく別のところを見ている。それから怪訝な表情になる薪。

「居るんだらう？そこに。出てきても良いだらう。この男に何かあるのか？」

薪が突然喋りだす。穂琥もその女性もチンプンカンプンで硬直する。一体薪は何を言い始めたのだらう。穂琥でもわからないのだ、この女性にそれがわかるわけも無い。穂琥は半ば、薪の頭が壊れてしまったのではないかという不安に駆られた。

「出ないか……。この女性の記憶はオレが持つ。いいだらう？」
「ふん」

薪の言葉に呼応するように響いたその声に、女性は酷く驚いて反応する。誰も居ないはずなのに、声が無処からとも無くしたのだからその声を聞いた穂琥のほうは久しぶりに腹の底からぞっとしたものを感じた。怒りというか、なんというか。前回会った時と同じ様な感覚。儒楠が『嫉妬』と呼んだ感情だ。つまり。今声を発したのはあの『ヒト』だ。

「よう。久しぶり、でもねえか」

笑いながら薪は言った。

真っ黒いローブのような服。フードを深くかぶり容姿がはつきりと輪郭取ることが難しいそれは横たわる男性の脇に現れた。

「貴様の助力をする為に居るのでは無いぞ」

男か女か、わかりづらいその声音と口調だが列記とした女性。死神、綺邑。

「わかつているよ。さて、あなた、名前はなんていうの？ちなみにオレは薪。これは穂琥。ちょっと用事があってここまで来させてもらった」

薪の唐突の質問に、むしろ此方のほうが聞きたいことがたくさんあると言いたげにその女性は言いよどんだ。

「幸奈ゆきな、です。このヒトは翔時しやうじです」

幸奈と名乗った女性は震えた声でそういう。目の前の少年たちは一体ここに何をしに来たのだろうか、わかるわけもなく、また教えてくれる様子もなく。

薪は幸奈の名を聞いた後に綺邑に向き直る。

「で？綺邑よ。何故お前がここに？」

「これは私が扱う」

ぶつきら棒に冷たく言い放った綺邑だが薪は折れることなくそんな綺邑に尋ねる。だから、何故？と。綺邑は面倒くさそうな表情をしたが諦めたように語る。

「罪。しかし別に悪くは無かるう。救ってやろうとは思う」

綺邑の言葉に幸奈は震えた。言っていることはきつと理解し切れていないだろうけれど、何故、この翔時が死んでしまったのか経緯を考えると、最初に言った『罪』という言葉に引っかけかりを覚えたのだらう。幸奈は綺邑の言葉に聞き入るようにして耳を傾けた。

「が」

綺邑は言葉に否定的な接続詞をつける。薪もその接続詞を気にして首を傾げる。綺邑が助けると判断したのであれば、難なく救うことが出来るはず。否定する要素など無いはずだが。

「この男自体に生きる意志が無い」

薪はその言葉に差し当たって疑問に思うことは無かつたらしく黙する。しかし、穂琥と幸奈はその言葉に驚く。幸奈にいたっては薪や穂琥が何で、綺邑が何かを知らないから、余計に混乱しているのだろう。

「オレらは『眞匏祇』という種族だ。そしてその黒いのが『死神』といったところだろうかね」

幸奈はひたすら口をパクパクさせていた。現状を理解することが出来ていない。

「死神自体はなんとなく耳に覚えはあるだろう。ま、その覚えのもののイメージとは随分と異なったものだけだね。ともかくだ。オレも詳しいことまではよくわからないし、知るつもりもない。けど、この死神はあんたの旦那を生き返しても構わないと言っているんだよ」

薪の羅列する言葉に幸奈はさらに混乱する。しかし、生き返らせることが出来るということを知って幸奈ははっとした表情を見せた。

綺邑が誘うのは死者の魂。事と場合によってはその魂をもとある場所へ返すことが出来る。現に、薪もそれで命を救われているのだ

から。しかし、今戻そうとしている男、翔時の魂は元の器に戻ることを拒否した。過ちを犯したことによる罪悪感で元に戻るのもおこがましいと。

「オレも過去に過ちを犯した。そして死ぬはずだったところをこの死神に救われた。気持ちわかる。でも、死ぬことが罪をかぶることではない。罪を償うことではない」

薪の声に諭されるように幸奈は瞳を揺らした。

「生きて、やらねばならぬこともある」

「あなたは・・・一体、何？」

「此処には有らぬ存在、というかね」

薪はそつと言い募る。今までの薪とはどこか雰囲気が違う気がする。その言葉回しがどこかつかつかよく思う穂穂だった。

「あなた達は・・・一体・・・私にとって何ですか？幸ですか？不幸ですか？」

震える幸奈の声。それが求めるものは光か闇か。幸奈に期待に沿う事を言うつもりは無い。いや、いうことはできない。だから薪はありのままを伝える。

「オレ達がそれを決めることは出来ない。あんたが決めればいい。ただ、オレはあんたに幸福をもたらしたいとは思っているということとは伝えておく」

信じる信じないは別の話。薪たちは幸奈に味方するつもりでいる。しかしその『想い』が幸奈にとって幸福になるかは分からない。感

じ方など様々だから。

薪の言葉に幸奈はふっと肩の力を抜いた。そして潤んだ瞳で小さく呼応する。

「貴方たちを信じます」

第七話 明らかになった存在

綺邑が嫌そうな目で薪を睨む。幸奈の返答を聞いて話しが一時、完結したためにその場から消えようとした綺邑を薪が呼び止めたのが原因だ。

「貴様、この期に及んでまだ何か？」

冷たく重いその言葉に慣れていない幸奈はぞっとする。無論、穂琥もしたけれど。それでもめげない薪の神経はどれほど凶太いのだろう。

「まあ、いいじゃないか！一つ！聞きたいんだ。それ答えてくれたら行っていいから！」

薪の回答に綺邑は冷たく睨む。しかし、この沈黙は綺邑の肯定の仕方だ。薪は軽く謝礼を述べてから質問をぶつける。

「お前って一人か？」

「は？貴様、何を言っている？」

「いやな、死神はこの世に一つしかないだろう？二つも在る事が出来るのかな、ってさ」

薪の質問に綺邑は怪訝そうに眉を寄せた。

「瞑、って言うんだけどさ。知っているか？」

「いや。知らない」

瞑の質問であるなら穂琥も参戦したい。

あの違和感はまるで違う。眞鮑祇のような雰囲気を漂わせているというのに眞稀が全く見えることが出来ないあのへんな『生物』を。

そんな疑問と不安を綺邑にぶつける。ぶつけられている綺邑はひたすら黙っていた。此処まで黙する綺邑も相当珍しい。肯定というわけではなく、思考しているのだ。そんな思考する時間に綺邑はあまり時間をかけない。その思考している時間すら惜しい。故に思考することを止めて知らんと答えるのがいつもだ。

「知らんな」

長い沈黙の後に綺邑は答えた。

「聞いた限りでは記憶に無い。会って観ないとわからんが、会うつもりは無い」

言い切った綺邑の言葉に穂琥は怒鳴るように言い返したが薪がそれを制止する。

「なら会わなくてもいい。オレの記憶を少し見てくれないか？」

綺邑は一度面倒くさそうな顔をしたが仕方ないといった風で薪の傍により薪の額に綺邑の額を当てる。そして目を閉じる。そうして薪が綺邑へ眞稀を流し込めば、その眞稀の流れに乗って過去の記憶映像が相手へ届く。

映像を見終わった綺邑は薪から離れてさらに黙した。見覚えがあるのかないのか。知っているのか否か。綺邑は答えない。

「あの・・・」

弱々しい声が沈黙の中に響いた。それで気づいたがすっかり幸奈が居ることを忘れていた。

「瞑、というのですか？私も・・・その方を知っています」

幸奈のその台詞に全員が驚く。

翔時が息を引き取ったのは昨日の事。その日に起きた出来事。

幸奈は今にも消え朽ちてしまいそうな翔時の面倒をしきりに見ていた。

「迷惑かけてすまないな・・・」

「いいえ、いいのよ。ずっと二人でって、決めたじゃない」

うつろな目の翔時に必死に言葉を掛ける幸奈。翔時はただ過去を悔いていた。悪いことをしたのは地獄に落ちるのが定めなのだと。

「そんな事言わないで・・・。貴方は悪くないわ。いつかきつと救われる。いつか・・・」

「ああ・・・そうだといいなあ」

翔時のその声には諦めが混ざっている。きっと自分は救われない。幸せになっではいけないのだと。自分はどんなに不幸でもいい。だから目の前のこの女性にだけは幸せでいてほしいと願うしか出来なかった。

「失礼」

玄関のほうで声がする。幸奈は客だといって立ち上がった。

突然現れた男は瞑と名乗り、翔時の病を治せるかもしれないといってきた。それに歓喜した幸奈は瞑を中に入れた。

しかしどうにも胡散臭い。瞑はふふ、と笑って翔時の額に手を置いた。やったことといったらそれだけだ。立ったそれだけの行為で瞑はこれで帰ると言う。

何が何だかわからないまま幸奈はその瞑を見送ってしまった。そして戻ってきた時、翔時は息を引き取っていた。

穂琥はその話を聞いて震えた。普通の人間ならわからないかもしれないけれど、眞菖祇である穂琥にならわかる。額に手を当てたとき、確実に瞑は翔時の生気を吸い取った。ヒトの命を一体、何だと思っているのか！腹立たしくてたまらない！

「落ち着け、穂琥」

薪に言われてむっと黙る。そして薪はそのままひたすら黙っている
綺邑へ目を送る。

「おそらく・・・奴の名はゆっえい邑頼だろうな」
「知っているのか？」

綺邑はなんとも口惜しそうな顔をしていた。こんな風に表情を歪ませたところを始めてみた。

「死神だ。元な。今は違う。既にこの世には存在していないはずの

ものだ」

綺邑の語り方と雰囲気。そして元死神であるという綺邑の言った事実を踏まえて導き出るたった一つの答え。

「お前の・・・父親か？」

綺邑は小さく頷いた。肯定の仕方にそれを用いたことが無かったので薪も穂琥も少し面を食らった。まさか、一度朽ちたはずの死神が再びこの世に舞い戻るなどありえない。あつていいはずが無い。しかし、邑頼は綺邑の父。もとより凄まじい力を有していたことは事実。もしかしたらそうして今この世に存在することは造作も無いことだったのかもしれない。

「さて。記憶はオレが持つ約束だったな」

薪がパンと手を叩いて空気を割った。話に段落が着いたからだ。必要なことは全て聞いて今の薪にとって欲しい情報は大抵入った。よって此処に長居する必要は無い。

「此処であつたこと、全てをオレがもらう。つまりはあんたの記憶を消すって事だよ、幸奈」

幸奈は息を呑む。せつかく知り合えた彼らのことをすっかり忘れてしまうのは悲しくてたまらない。切なくて仕方ない。

「すまないね、約束があるんだよ。綺邑に出てきてもらうとき『記憶はオレが持つ』といつてしまったからね」

「私は見世物じゃない。たかが人間風情が私を記憶しておくなど痴がましいと知れ」

綺邑の発言に幸奈が震えた。その殺意にも似た感覚に幸奈は恐怖したのだ。そして、俯いて苦しそうに顔を歪めて、記憶を消し去ることを承諾した。消えてしまえば何も残らない。今ある不安も記憶さえなくなれば消えてしまうのだから。

「おい」

薪が記憶を消す作業に入ろうとしたとき綺邑が幸奈に声を掛けた。幸奈はきょとんとした表情をした。

「最後に聞きたい事がある。答え次第では其の俤にしても構わん」
「ほう？」

綺邑の言葉に反応したのは薪だった。そのことに綺邑はいささか不機嫌そうな顔をしたが気にせず話を進めた。

「まだ、話が残っている。瞑と名乗った男、何を手渡した？」

幸奈はその言葉で酷く驚いた顔をしていた。そしてその回答を幸奈は渋った。そのことに綺邑はふんと鼻を鳴らして面倒臭そうに薪を睨む。薪はそれを受けて肩を落としてから幸奈の肩に触れる。

「こういうことは言ってしまった方がいいよ。別に悪いようにはしないし。特にオレ達にはね。それに事と場合によっては記憶が飛ばずにすむのかもしれないし」

幸奈は悲痛な表情でしばらく考えてからわかったと承諾すると部屋の奥へ入っていった。それを見詰めて薪は少し警戒の色を強めた。

第八話 魂石と共鳴する意味

瞑は語る。誰にも言ってはならないと。そうして渡してきた小さな箱。ここに有らぬ者たちが来たときにそれを渡すようにと言った。そうして瞑は立ち去る。その立ち去る間際に振り向いてふいに笑って言った。

「礼だ、と伝えておいて欲しい」

幸奈はその箱を薪に手渡す。薪はそれを手にした直後、その中身を悟った。そつとあけるとやはり思ったとおりのものが入っている。しかし、形は想像とは全く異なるものだった。

「魂石、だな」

「そのようだな」

薪の言葉に綺邑が反応する。しかし、穂琥にしてみれば薪の持っている箱の中身が魂石であることがわからない。魂石とは本来、掌に乗るくらいの硝子玉のようなものだ。その美しさときたらそれに匹敵するものなど有りはしないほどに、命の輝きだ。

箱の中に入っていたものは色は完全にくすみ、不透明であったし形も球体ではなく歪な、星型のように凹凸のあるものではつきり言えば見るも無残な形であった。

「仲間の？」

穂琥がそつと尋ねる。しかし薪はそれを否定する。眞稀は今までに

会ったことのないものだ。そして魂石だと知ってから綺邑の拳動の変化に薪は疑問を覚える。そして一体綺邑が何を考えているのかを出来うる限り考える。そうして見つけた一つの可能性。

「幸奈が眞匏祇だとしても言いたいのか？」

「可能性が無い訳では無いな。共鳴している」

「なんだよ、共鳴って。確定じゃねえか」

綺邑の言葉に薪は鼻で笑うように返した。しかし綺邑はそれでも回答をはぐらかす様な言葉しか言わない。

「何だよ、それ。何なら試すか？」

「好きにしろ」

薪は幸奈に向き直る。そして幸奈が眞匏祇か否かを調べると言う。幸奈は混乱する。

「大人しく黙っていればそれで良いんだよ」

綺邑の言葉に幸奈は身を縮める。しかし、理解も出来ないこの状況でそんな事を言われる幸奈が可哀想過ぎて穂琥は綺邑に噛み付く。

「何それ！そんな言い方しなくてもいいじゃない！」

「煩い。少しは黙っていられないのか」

「んな！？」

綺邑の返しにイラッとする穂琥。今すぐにも殴りにかかりたい衝動に駆られたが、そこはなんとか抑えた。

「それに眞匏祇な訳あるの！？」

「それに関してはお前が一番わかるだろう」

返答した薪の言葉に穂琥は返すことが出来ない。確かに事実だ。自分はこの年近くなるまで自分が眞匏祗であることを知らなかった。正確には覚えていなかった。故に幸奈も、同じ事。さらに幸奈の場合、体内に魂石を宿しては居ない。だからこそ、体外に眞稀がもれ出ることが無かった。薪でも気づくことが出来ないほどに。

綺邑に急かされて薪は調査にかかる。

幸奈の前に立った薪はその幸奈の足元に陣を描き始めた。その光景はきつと幸奈にとっては信じられないことかもしれないけれど、今更それに驚くことも無いと幸奈は意外に冷静にそれを見ていた。

薪が描く陣。ペンなどの書き記すものを一切持つていない薪の指から発光色の橙が生み出されている。眞稀より発せられたもので描いているので、それなりに眞稀を有している者でなければ陣を書き上げる前に眞稀が尽きて失神してしまう。

「さて。これで準備はオツケイ」

書き上げた薪は陣から出て陣の手前に諸手をつく。そしてその陣へ眞稀を流し込む。

陣は橙の色をより深めて輝いた。それを見て薪はにやりと笑って立ち上がった。その際に陣も消え去った。

「決まりだな」

薪は腰に手を当てて綺邑のほうへ目をやる。綺邑は不機嫌そうに鼻

を鳴らすだけだった。

「えと・・・？」

「あの・・・」

穂琥と幸奈の声が重なる。薪はそれを聞いてそちらに目をやる。一瞬、穂琥を軽く睨んでから幸奈のほうに目を移す。

「陣が無色に変化すればそれは眞稀を有していないということ人間。橙がより強まればオレとその陣の中央に立っているものの眞稀が共鳴したということであり一層橙に輝く、つまり眞匏祇だということ。つまり、あんたもオレらと同じ、眞匏祇ということ」

幸奈は呼吸を少し荒げて不安そうな顔をしている。それも当然だろう。

薪に睨まれて萎縮したが、知らないものは知らないのだから仕方がないだろうと内心で文句を言った穂琥だったが、それを悟った薪がまた睨んできたので今度は本当に萎縮することにした。眞匏祇の事を知らなさ過ぎると自覚する穂琥だった。

「帰る」

綺邑が無造作にそう言って姿を消した。幸奈はそれに一瞬びくつとしたけれど、薪が姿を現すことが出来るのだから消す事だってできるさと、乾いた笑いを立てたので幸奈はひとまず納得することにした。

「さて、幸奈さんさ」

「・・・は、はい・・・？」

薪は幸奈に向き直る。

第九話 自覚の無い眞菀祇との出会い

先程であつた二人の子ども。摩訶不思議でいまだに信じられないその存在にどこか頼ろうと思つてしまふのは何の心理か。兎に角。そんな二人についていけばきつと何か道が開けるかもしれないと思つてここまでついてきたが、一体この二人の口論はいつまで続くのだろうか。幸奈はただ、そこにたつて二人を見ているだけだつた。

「だあかあらあ！」

「仕方ないだろう！仮にも女だろう！」

「仮つて何よ！仮つて！立派な女です！」

「仮だろう！お前の何処が女だ！」

「立派な女性じゃない！！！」

最初の論議から大分外れた話になっている。感情論で言い争いをしているのが原因だろうと、幸奈はそれを見ている。

そもそもこんな口論になつたのも今から30分前の事。口論の優勢に立っている男の子とそれに必死に喰らいつく女の子。男の子が薪、女の子が穂琥。そして幸奈の三人は寢床について話を始めたはずだったが気づいたら口論になっていた。穂琥と幸奈はホテルを借りてそこに行けと薪が言う。しかし、穂琥の言い分は薪の家に行くという。

「寝るところだつてねえだろう！」

「あるもん！二個！」

「二個じゃ足りないだろう！？」

「足りるもん！私達は布団！薪は屋根！」

「オレは外か！」

この二人は口論をしているのか漫才をしているのかわからなくなってきた幸奈だった。そしてそんな二人を見て少しおかしくなってしまうた。

「ぶふ・・・」

うつかり声に出てしまつてそれが理由で二人の口論という名の漫才はを終焉を迎えた。

「あ・・・ゴホン・・・。済ません。コイツと一緒にホテルに泊まつてください。ホテル代などは気になさらないで結構ですので」

薪はそう言つて穂琥を差し出す。そんな彼の態度に幸奈は疑問を覚えていた。幸奈が年上ならば敬語を使うことになんら疑問を感じることは無いのだが、この少年は先ほどまではそう言つた態度は一切無く、突然こんな態度を示した。そんな不思議な少年に混乱を抱いたままだ。

「では、オレは情報を集めに行きますので、失礼します」

薪はそう言つて姿を消す。幸奈は呆然と彼の背中を目で追つてから足元で不貞腐れている少女に手を差し伸べる。

「あ、どうも。ありがとうございます、幸奈さん!」

かわいらしい笑顔で幸奈の手を取る。この少女は会つたときから態度が変わっていない。なら、特別なのはあの少年か。

「仲、いいですね」

「え？そう見えます？あんなので？」

「ええ。とても。素敵なご兄妹だと思うわ」

穂琥は一瞬、驚いた。薪と穂琥の関係で兄妹だと言ってきたのは幸奈が初めてだ。そのことを幸奈に伝えたとやわらかい笑みを見せた。

「大人が見れば恋人には見えないわ。とても仲良しには見えるけどね。貴女がとても彼の事を慕っているということも」

「え・・・そ、そんな事までわかつちゃうんですかあゝ？照れちゃうなあ・・・」

穂琥は頭をかく。大切な兄。大好きな兄。だからずっと一緒に居られる。不安なんて何も無くて。

穂琥と幸奈は薪に言われたとおりホテルに入る。部屋に入ってゆっくりとくつろぐ。そうしてゆったりとしていまだに信じられない中に身を投じているのだと考えると実感がわかない幸奈だった。そもそも、一緒に来るようにと薪に言われたからここにいますが、一体何故一緒に行くべきだったのか、説明を受けていない幸奈は少し不安ではあつたけれど、この穂琥という少女然り、何故か幸奈も薪という少年を信じてしまふ、信じさせる力を持っているように思えた。とにかく。今は何もわからない。きつと彼はそれを説明してくれるはず。それを信じて幸奈は休むことに決めるのだった。

翌朝、いつ帰ってきたかわからない薪に起こされて不機嫌に答える穂琥。

「なあにい？」

「幸奈さんは？」

「奥」

「そうか」

穂琥の指差した扉を見て薪は肩を落とした。

支度が出来たらしい幸奈が部屋から出てきた。そしてそんな幸奈に薪は少し考えてから尋ねる。

「ねえ、幸奈さんさあ。ま、あの時は記憶を消すつもりだったし、そのまんまでいったけど。敬語ってオレ、嫌いなんですねぇ。でもやっぱり人間だし、目上には敬語かな？って思ったけど。やっぱり嫌いなもんは嫌いだ。だから、いいですかね？普通に」

本当に年上というものをかなぐり捨てたその発言に幸奈もだが穂琥も驚く。ここまでぶっちゃけて言い切ることの出来る薪が凄いとすら思う。

「構いませんよ・・・」

幸奈としてはきつと理解できたこと。薪の態度の変調に。

「それで、幸奈さんさ」

「幸奈、で結構です」

「そう。じゃあ幸奈さ」

幸奈に言われたとはいえ、簡単に敬称を剥奪させたよ、コイツ・・・と思う穂琥だった。

「はつきり言つてあんたは危険な状態にあるんだよ」

暝、邑頼が一体何を思つて幸奈に魂石を与えたのかわからない。主と称してそれに付き従っているあのもの達がそのことで動き出さな

ければいいのだが。とにかく色々と危険が生じるということ。

「だから日常生活ではオレが絶対に護る。それは約束する」

強く放たれたその言葉にどれだけの深い意味が籠められているのかは、会ったばかりの幸奈にはきつとわからないだろう。それでもいいのだ。ただ、今のこの薪の言葉さえ、信じてくれるのなら。

幸奈にはとりあえず宝探し、という題目でここへきたということにした。まあ、あながち間違いいではない。麻臨は眞菖祇たちにとって宝玉に等しいのだから。

そうして薪と穂琥は移動をすると幸奈に伝う。幸奈は不安そうな顔をしながらも連れて行って欲しいと願い出る。薪はそれをまるで言ってくる予想していたかのように即断で許可を出す。薪が術を行使する。妙な浮遊感に襲われるのだった。

第十話 出会いと別れとその向こうにあるもの

気がついたらそこは地面。全く見知らぬ土地へ一瞬で移動してきた。眞匏祇とは本当に摩訶不思議なものだと幸奈は実感する。

薪は警戒心を強めた表情をする。それが一体何を示すのか。簡単なことだ。奴らがこの場に現れる。それだけの事。

「あらあ？もうきたの？」

誓茄が声を発する。

「そちらから呼んでおいてそちらが遅れるとはいいい度胸だな」

薪の言葉に誓茄はもたえる。これじゃ話にならないと薪は肩を落とす。すると後から圭と、新顔の男が現れた。

「始めてみるな」

「名乗るほどのものでは」

「伏せるか？」

「滅相も無い。必要が無いということですよ」

「名を与える価値が無いと？」

「考えすぎであります」

礼儀正しく見えるその男に薪は不吉な予感を感じた。

彼らは主からの伝達があるといってきた。薪は仕方なくそれを大人しく聞く。その伝達はこうだった。

―貴方を我が元まで案内申し立てる。気が向いたのなら足を運んで頂きたい。宜しく申し上げます、スウエラ様

薪はそれを聞いて険しい表情になった。誓茄は嬉しそうに『スウエラ』という名前なのかと尋ねてきたので薪はそれを否定した。すると少し残念そうな顔をしていた。

「以上で御座います。よろしければ我が主の下まで」

男はそう言つて姿を消した。それに習つて誓茄と圭も姿を消した。

一体何がしたいのか理解できないけれど、穂琥としては何故幸奈に突っ込んでこなかったのか疑問に思えた。それを薪に尋ねようと思つたが穂琥はその寸前で思いとどまつた。薪の様子が明らかにおかしい。

「どうしたの？」

「奴は知っている・・・」

薪の言葉に首を傾げる穂琥。

スウエラ、というのは昔、まだ巧伎が存命だった頃、巧伎がとある集落を訪れたときに仮名として使つた名前だ。わざわざ偽名まで使つてその集落に入つた目的など、最早言うまでもない。あえて言うなら、巧伎がその集落を出た時その集落は壊滅していた、とだけ言つておこつ。

ともかく。そうしてスウエラという名前を知っているということ、あの集落の生き残りで此方が慫慂、乃至はその息子だということが既にわかっているということになる。その上で、我が元まで

来いと言ったと言う事は、あの、『主』という眞砲祇は此方を叩き潰す算段が出来たということになるだろう。長きに渡った復習の炎を叩きつけるために。

そうして考えている間に奇妙な気配を感じて薪は剣を構える。

現れたのは瞑。ただひたすら此方を睨む。その目はおそらく幸奈を見ている。

「何しに来た？」

薪の質問に瞑は答えない。本当に無口で何を考えているのかさっぱりわからない。その後には圭がついてきた。瞑の目は一度圭を遅いといわんばかりに鋭く睨むと圭は軽く萎縮した。

「ゴメン……。その女は始末しろって」

圭がそういう。幸奈はひとつ小さな声を漏らす。

「護りながら戦えるか、スウェーラよ」

瞑のその言葉を聞いて薪は一瞬ぞつとした。前にも似たような感覚を得たことがある。死の淵に立ったあの感覚。確実に瞑は死の気配を纏っている。直感的にそう思った薪だった。そしてその危険性から薪は一瞬で替装する。

「始末など、させるか！！」

いきなり薪が巨大な刀を取り出して振り回したので穂琥は驚いたが、よく見たら振ったその先に瞑がいた。一瞬で瞑は薪の前まで来てい

た。それに反応したから薪は刀を振るっただろう。その勢いで瞑が吹っ飛んだ。

「大した餓鬼だ」

言葉を発する。それだけでどこかダメージを受けてしまいそうな程だった。これが歴代の中で特有といわれ最強と謳われていた死神の重みなのだろうか。これがあの綺邑の親なのかと考えると正直ぞっとする。

圭が幸奈めがけて刀を振るう。それに穂琥は気づき、何とかして圭の刀を弾き返す。薪と瞑が視界の隅で戦っている。ならば、穂琥だって幸奈を護る何かをしたい。あまりなれない刀を手に持ち圭に向う。

「お前、慣れていないな。実戦したことあるのか？」

「い、一度だけ・・・」

「ふうん」

圭は興味もなさそうに声を出して再び襲い掛かる。

あちこちで激しい攻防が続く。一体何を考えているのだろうか。わからない。つい昨日、出会っただけの自分のために命を張って戦う少年と少女の行動の意味がわからない。どうして？

「どうして私なんかのために・・・」

震えた手を握って幸奈は小さな声を漏らす。こんな風に自分のために誰かが傷つくのは見たくない。見ていられない。でもどうしたらいいのかさっぱりわからない。

声。懐かしい声が聞こえる。

―生き抜けばいい・・・

はつとした。ずっと傍に居た大切な人の声。一体どうしてその声が聞こえたのかわからないけれど、幸奈はその声に耳を傾けた。かすれて消えてしまいそうな声だから周囲の音で簡単に聞き逃してしまいうそだった。

―生きて生きて・・・幸せになればいい

愛しい人。この世で最も愛した人。

「翔時・・・？」

聞こえた声の主。紛れもなく翔時のものだ。幸奈は震える。

―いつかきつと救われる、そう言ったのはキミだよ・・・？大丈夫。俺はずっと一緒に居るから・・・

幸奈は地面に膝を着いて泣いた。暖かい声。それが何故するのかなんて幸奈にはわからない。それでも、その声の暖かさに嬉しくて涙が止まらない。そして今、必死で戦ってくれている彼らのためにも、しっかりと意思を持たなければいけないのだとを感じる。もう聞こえなくなった翔時の声を耳に残しながら幸奈はそつと立ち上がった。

薪は先程から違和感があって仕方なかった。滅多に喋らないと聞いているが、目の前のこの男、瞋は先程からずつと口元がにやけている。まるで何かを楽しんでいるかのように。嘲笑っているかのよ

うに。

「何がおかしい？」

薪の問いにやはり瞑は答えない。しかし、瞑は薪の質問とは全く関係のないことを口にした。その口元は酷く歪んだ笑みだった。

「礼、とだけ言っておこうかね」

「は・・・？何を・・・」

瞑の攻撃を受けつつ攻撃しながらの会話のため、まともな会話はしていない。一方的な投げかけになっているその言葉のやり取りの中で薪はその瞑の言葉の意味を理解できなかった。そうして、この時の言葉の意味を知るのは今からずっと先の事。

膨大な眞稀が膨れ上がって破裂したのはそれから間もなくだった。それはあまりに突然で流石に薪もその眞稀の破裂に対応できなかった。軽くその場から飛ばされて数メートル先に着地した。しかし、瞑や圭を見るともつと吹っ飛んでいるところからこの眞稀の原点が何であるか悟った。

「幸奈・・・！？」

薪は眞稀の風圧を抑えながら急いで幸奈の元に駆け寄る。幸奈の近くには穂琥が居るはずだ。近くで眞稀の圧力を感じてしまっただけから敵意がなくても危ないかもしれない。それに幸奈はコントロールが出来るとはとても思えない。

風圧の中心には震える幸奈が居た。その傍に穂琥が居る。まるで台風のように中心部だけ何も無い、静寂とした空間だった。そ

ここに穂琥は呆然と立っていた。

「し、薪・・・！幸奈さんが・・・！！」

「ああ、正直驚いた。幸奈！もう大丈夫だから！落ち着いて・・・」
「し、しん・・・くん・・・」

幸奈は震えた声で呼応する。

「もう、平気だから。落ち着いて。ゆっくりと・・・そう、力を緩めて」

薪の呼吸に合わせて幸奈はゆっくりと眞稀を下げいく。今まで一度たりとも眞稀を使用した事がない者がいきなりこんなに大きな眞稀を爆発させてしまつては死に至る事だつてありうる。薪は自分の眞稀と同調させながらゆっくりと幸奈の眞稀を下げていく。

やつとの事で収まつた眞稀は先ほどの大きさなどまるで無かつた様に静寂と化し消え去つた。そして当の幸奈は氣を失つてしまつていた。

「やつてくれるね！」

圭が叫び声を上げる。薪が鋭くそちらを睨む。後ろでゆっくりと立ち上がった瞑を見て薪は眉を寄せる。全くだ。戦つているときからわかつていた。あの瞑は全く本気で戦つていない。それで居て薪と拮抗して剣を交えた。元が死神であるのならそれは理解できるが、何が理解できないかつて、『主』と呼ばれるものに付き従っているということ。

「いつまで時間をかけているんだ？」

突然空気を割るようにして声を張ったのは鼓斗だった。圭が口惜しそうに状況を説明して少し不機嫌そうに顔をしかめた。

「瞑。お前が居ながら何でこんな事態になった？」

「・・・・・・・・」

「応える気など無いか」

呆れたように鼓斗は瞑から薪へと目を移す。それから強烈な眞稀が迸る。穂琥はそれに軽く気圧されたが薪は微動だになかった。あの程度の眞稀では気圧されるわけがないのだ。なんたってあの巧伎の眞稀を幼少期に何度も受け続けているのだから。それよりも慣れない死神の力のほうが今の薪にとっては堪える。

「ひとまず、その女を始末させてもらう」

鼓斗は素早く刀を用意すると薪に飛び掛る。

「へえ。幸奈をやるって言っているのにオレに突っ込んでくるのか？」

鼓斗の刀を簡単に受け流しながら薪が飄々と言う。鼓斗は面倒くさそうな表情を浮かべながらもふんと鼻を鳴らして言う。

「よく言うな。結局、お前を鎮圧しなければあの女に手など届かないだろう」

「へえ。わかっているねえ」

薪のその余裕の態度が気に入らないのか、鼓斗はさらに刀を振り回す。しかし、それを意図も簡単に受け流すので鼓斗はさらに手に力

を籠めていた。

ドン。鼓斗が勢いよく前のめりに倒れたのは薪が切りかかるうとしたところだった。薪は驚いて刀を止めた。鼓斗が素早く起き上がって怒号を上げた。

「瞑！何をしやがる！！事と場合によってはお前でもただでは済まんぞ！」

「黙れ、餓鬼風情が」

放ったその言葉に鼓斗だけでなく薪も竦む。

「そんな荒れた力で『スウエラ』が斬れるか」

低く重たいその声は耳を解して心臓を貫く。無駄に意気が上がってしまうほどの重圧に薪は齒噛みする。

「さて。二対一か。キツイなあ……」

「居るだろう？そこに、眞匏祇が」

薪の言葉に鼓斗が笑いながら言う。穂琥を指差して。

「残念だがあいつは戦闘要員じゃないんでね。相当なことが無い限り先頭にはださねえよ」

薪の言葉に鼓斗はにやりと笑う。それから躊躇無く穂琥へ斬りかかる。薪は穂琥と鼓斗の合間に入って刀を受け止める。その直後、薪の右脇腹に激痛が走った。鼓斗を勢いで投げ飛ばしその激痛の原因を弾き飛ばす。

目の前で一体何が起きたのか、一瞬過ぎてわからない。鼓斗が来たかと思ったら薪が来て、薪が来たかと思ったら瞑が来て。それから目の前には誰も居なくなつた。

「薪！？平気！？」

「大丈夫だ、とりあえずここは引くぞ！」

「あ、う、うん！」

「させるわけ無いだろう！？」

鼓斗が鋭く刀を振り上げる。薪はそれを上手いこと避けて穂琥のほうへ走る。穂琥と自分との間に瞑が滑り込む。あまりに突然の乱入に勢いが止まらず瞑の懷に突っ込んでしまった。

本当に短い時間だったはずが酷く長い時間に感じられた。そつと頭の後ろに手が回されて瞑が薪の耳元に口を近づけて小さく囁く。その言葉を聞いて薪は仰天する。そうして瞑は薪を地面に叩きつける。

その時間は現実にしてみればきつと一秒も無かつたかもしれない。それでも薪にとっては何十秒にも、何分にも感じていた。そして瞑の言つたその言葉の意味を理解できずに地面に叩きつけられても混乱が解けず、直ぐに動くことを忘れた。

「幸奈さん！！」

穂琥の叫び声で薪ははつとして飛び上がつて幸奈の倒れていたほうを見る。そこで目に映つたものに薪は全身の力が抜けた。

幸奈の身体を見事に貫通する瞑の刀。幸奈は全く以って微動だにしない。瞑はそのまま幸奈を投げるように地面に叩きつけると踵を

返して数歩歩いて姿を消した。幸奈を仕留めたことで圭も鼓斗も満足したらしく、同じ様に姿を消した。

すぐさま傍に駆け寄った穂琥は幸奈を抱きしめて何度も名前を呼んだ。何度も。それでも幸奈はぐったりとして動く気配を見せない。

「幸奈さん！幸奈さん！！お願いです！目を開けてください！！幸奈さんってば！」

叫ぶ穂琥の手から薪は幸奈を奪い取る。そして様子を確認していた。穂琥はただ、幸奈が真っ青な顔をしてぐったりしているのでそれが怖くて涙が止まらなかった。確実に匂う死の気配。それだけで穂琥は目の前が真っ暗になってしまっていた。それに反して薪は意外に冷静に幸奈の状態を見ている。

「何しているのよ！！何とか早く治療しないと！死んじやうよ！薪！」

「・・・いや、するだけ無駄だ」

「何言っているの！？諦めないでよ！？まだ息はあるんでしょう？！」

「・・・」

穂琥の言葉に薪は答えない。ただ、刺された部分に手を当てているだけ。眞稀も何も練らずに。

「薪！あんたがそんな簡単に命を諦めるような奴だっと思わなかったよ！私がやるから！」

「いや、いいんだ。本当に」

「何が！」

「幸奈は死なない」

「だからっ・・・え？」

薪の言葉に穂琥は思考が急停止した。横たえてある幸奈の腹部、つまり瞤に刺されたところに左手を添えてただ黙ってみている。穂琥はそんな薪に不安な目を送った。そうして薪の状態を少し確認してはたと気づく。左手で幸奈の腹部を抑えているのはわかる。では、右手は？膝を立てているために右手がどうなっているのか見えない。それでも穂琥は何故かそれに嫌な予感しなくて薪に尋ねる。

「薪・・・？右手、どうしたの？」

「え？別に。怪我はしていないぞ」

「そう・・・なの？」

薪の言葉にきつと偽りは無い。それでも穂琥の不安は消えない。何か嫌な予感がする。それがどんどん膨らんでいくのはきつと直感と呼べるものなのだろう。

「薪、右手・・・見せて」

「何だよ。別に怪我なんてしていないって言っているじゃないか」「見せて」

穂琥は無理やり薪の腕を引つ張った。思いの他、薪の腕は簡単に前に出てきた。そして出てきた薪の手を見て驚いて思わずその手を離してしまった。

「ま、真っ赤じゃん・・・？！掌が・・・血まみれだよ？！」

「別に怪我じゃないって・・・」

掌を見せて薪が言う。確かにその掌に怪我の類は見えない。しかし、穂琥は一瞬でそれが何であるか理解した。

「薪！わき腹！！」

幸奈を跨いで薪の右に腰を下ろす。明らかに薪は嫌そうな顔をしていたが抵抗することは無かった。

「あぁっ・・・！？何これ？！」

薪の右脇腹は酷いまでに挟られていた。先ほど。穂琥の目のまで一瞬にて行われた刀の交差の中で瞑によって引き裂かれた部分だった。

「酷いよ、これ！？何とかして治さないと！」

「いや、今はいい。それより幸奈を運ぼう」

「え？！そんな事言っている場合じゃ・・・」

「それこそ、そんな事言っている場合じゃない。オレはまだ平気だが、このままだと確実に幸奈は死ぬ。いいのか、それでも」

薪の脅すような強い目に穂琥は無言で首を振った。それしか出来なかった。よしと言って薪は幸奈をおぶって立ち上がった。

第十一話 認められた者

幸奈を抱えたまま薪は家の中に入る。そんな薪を見て穂琥は不安を隠せずにいた。あの薪が、酷い汗を掻いている。それはでも、当然のことだ。わき腹が酷く抉られ、その状況で自分と大差ない女性を抱えてここまで運んできたのだから。途中、穂琥が代わると言っていたが、編に刺激を与えてしまえば死んでしまうからと交代を許さなかった。

幸奈を下ろしてから薪はため息をついて穂琥に向う。

「さて。ここにくればひとまず眞稀が保護をしてくれるから直ぐに死ぬようなことは無い。そこで、穂琥。悪いけど脇腹の治療を頼めるかな」

「あ、当たり前じゃない！」

穂琥は急いで袖をまくって薪の服を捲り上げる。その現状に絶句する。今までに見たことのない刀傷。まるで何かに食いちぎられたような酷い荒れ方。それだけじゃない。酷いところでは軽い壊死が始まっている。本来だったら死んでいてもおかしくない。

「大丈夫か？」

傷の状態を見て絶句した穂琥に心配そうに声を掛けた薪に穂琥は逆に怒号を上げる。

「それはこっちの台詞！何考えているの！？こんなので・・・！！普通、死ぬって！？」

「ま。オレ普通じゃないし。向こうもね」

「え？」

薪の言った言葉が理解できなくなったけれど、それがどういいうことか聞いている暇があったらさっさと治療をするべきだ。

穂琥はすつと深呼吸する。まず、薪の状態の確認。

血は薪自身が自分の眞稀で止めているから支障は無い。しかし、そのぶん体力を消耗していくことになるので早く何とかしなくてはいけない。そんな眞稀で無理に止血をしていることもあり、眞稀の流れの状態もありよくない。こういった怪我に効く治療は確か、城の書庫で見た記憶がある。それが今、有効かはわからない。未だかつて例を見ないものだから。それでもそれを試さなければ薪の腹部はどんどん壊死してしまふ。眞匏祇にとつて壊死とはイコール、消失ではない。上手いこと治癒することが出来れば再生だつて容易なことだ。

「薪……。その、結構辛いかもしれないけど……。その……」
「いいよ。全てお前に任せる。穂琥が最善だと思うことをすればいい」

言い淀んだ穂琥に薪はそつと言う。その言葉の優しさが嬉しくて。そして何より、任せるといった薪からの信頼がたまらなく嬉しかった。それに何より、心配などする必要すらなかった。だって……。

――相手は薪だもの

穂琥は意識を集中させてから眞稀を手に籠める。そしてそつとそれを薪の患部に当てる。本来ならばここで耐え難い激痛が走り、呻き声の一つでも上げるものだが部屋の中はいたって静かだった。

今回、穂琥が行った治療には傷の具合によって変わるが、比較的時間のかかるものだった。まして、今の薪のように重症の傷に当たっては普通よりも時間がかかった。故に数分間の治療となる。本来ならば、数十秒で終わるものだが。

「は、はい・・・お、終わった・・・」

過度な集中と大きな眞稀を一気に消費するということで穂琥はどつと疲れて後ろに倒れた。

「大丈夫か？それにしてもまあ、任せるとは言っただが的確な治療だったなあ。やっぱり見る目はあるな」

「えへへ・・・。一応ね・・・少しは勉強したんだよ」

―薪の役に少しでも立てるなら・・・

穂琥はへらへらと照れ笑いしながら起き上がった。

「平気？辛くなかった？」

「何で？」

「だって・・・この術、相当辛いつて・・・でも薪は呻き声一つ上げないでむしろ涼しい顔していたから」

「ああ、本来だったら苦渋の表情をしたかったけど頑張っている穂琥の意識の妨げになるからな、抑えた」

薪はそれを簡単そうに言っただけで穂琥は驚く。そしてやっぱりこういうところでも薪には適わないと実感する。

「でも、次からはいいよ。痛いときは痛いって言って」

「おう、わかった」

さてと、そう言って薪は立ち上がって幸奈の元に腰を下ろす。

「ゆ、幸奈さん・・・平気なの・・・？こんな重症をそのまま長いこと放置するなんて・・・」

「支障は無いさ。これは時間の問題じゃないから」

「え？」

「まあ、気にするな。とにかく幸奈は平気だ。そんなわけでお前はとりあえずその返り血やら泥やらシャワーで落として来い。その間にオレが何とかしておくから」

「え・・・あ・・・はい・・・」

薪に言われるままシャワーに入る。一体、幸奈はどうなってしまったのか、穂琥にはさっぱりわからない。それでも薪が大丈夫だといったのだからきっと大丈夫なのだろう。

しつこい土埃や泥に悪戦苦闘してやっと落としきり、風呂場から出て着替えを済ませる。髪を乾かしている間にふと気配を感じて振り向いて驚いた。

「き、綺邑さん！？」

「聞きたい事が有る」

短く端的に綺邑は言い放つ。何かと穂琥が聞くと綺邑は瞑について尋ねてきた。何故、瞑を眞匏祗ではないと判断したのか。

「まだ、完全なわけじゃないけど・・・桃眼で見た時眞稀が全く無かったから・・・」

それと言ってからふと思った。薪の眞稀もきつと視る事ができないと。

「ほう。それだけか？」

綺邑の続いての質問。穂琥はそれに少し戸惑った。応えるべきか否か。

「それだけなら良い」

綺邑はそう言って立ち去ろうとした。穂琥は違うと否定の言葉を述べて綺邑の足を止めた。

「もう一つ・・・雰囲気・・・似ていたの・・・貴女に・・・」

穂琥の言った言葉は脱衣所の部屋に木霊した。綺邑は冷たく見下ろしてくる。その目が薪より冷たいいったらありやしない。

綺邑はその鋭い目をふつと伏せてからそうかとだけ言って姿を消した。穂琥は呆然としながらその様子を見ていた。それから思い立ったように髪を乾かし始めた。

部屋のほうで何かの破壊音が聞こえたのは髪が乾いた頃だった。まだ全快していない薪に敵襲なんて来たら溜まったものではない。穂琥は慌てて脱衣所を飛び出してその足を止めた。

「ごめんって！悪かったって！本当に！！うわっ！？」

薪の叫び声が聞こえる。穂琥はただ固まっていた。

見れば。敵でもなんでもない。でも味方とも言にくい。それが薪にありとあらゆる足技を繰り出している。

「うわっほっつい?! ちょっつ?! マジ止めて?! ごめんって! 何度も謝っているじゃん?! うわああ!」

薪が押されているその映像を見て穂琥は長い目でその様子を見ていた。綺邑が回し蹴りやら踵落としやらひねり蹴りやらとにかく攻撃しまくっている。それを避ける薪の表情は最早必死。見ていて哀れと思うほどに。その薪の見事な圧され具合を見て綺邑が強いということとを改めて実感したような穂琥だった。

呑気に見ていたのはそれまでで家のあちこちが破壊されていくのを見て、さらに薪の必死さ具合を見て気づく。いや、敵じゃないにしても感知していない薪にあればどの動きをさせては傷口が開いてまた大変なことになってしまう。

「止めて!」

綺邑と薪の間に入って諸手を広げる。寸でのところで綺邑の蹴りは止まる。あと数ミリ遅かったら穂琥に当たっていただろう。そしてその圧力を感じて穂琥は一瞬だけめまいを覚えたほどだった。

「薪は今、完全じゃないの!」

そう言っただけ綺邑を睨んだ、睨んだ穂琥の目は一瞬にして迷いに変わる。綺邑のあまりに鋭い目が穂琥の心を折りにかかる。しかし穂琥はここでは折れていけないと必死になって綺邑に抗議する。

「ふん」

興味がつせたように綺邑は踵を返したので穂琥はほっとして座り込んだ。

「悪いな、穂琥。でもまあ、大丈夫だよ。避けなきゃそりや当たるけど、綺邑だって本気じゃないんだし。それに傷の方だってそこまです無理にはさせてないよ」

笑いながら言う薪に軽くイラつき覚えながらも仕方なくため息をつく。

「じゃあ、幸奈を頼んだよ」
「・・・」

綺邑の返事はない。いつの間にか綺邑は幸奈を抱えていた。抱える、といっても別に担ぐとか抱きかかえるとかそう言ったわけではなく、宙に幸奈がひとりでに浮いているように見えるだけだが。そうして綺邑はすつと姿を消してしまうのだった。

幸奈が大丈夫なのか尋ねると薪は小さく笑いながら何とかなると応えたので今度は薪の傷のほうを確かめることにした。

「大丈夫だって。そもそも綺邑をあんなふうに怒らせたのはオレ自身だしな」

薪はどこか可笑しそうに笑って立ち上がった。

「いやね。あいつにしては随分と珍しい事をしたからそれについて言い過ぎたら怒られた」

まるで子どもみたいに薪がいうので穂琥はどこか拍子抜けした。

「っていうか、薪がそんな風に突っ込むくらい綺邑さんが珍しいことしたの？」

穂琥の質問に薪は少し悩んだ表情を浮かべた。なんだ、それは。私には言いたくないことが、と穂琥は内心で腹が立っていた。

「ま、いいだろう！言ったら言ったで言ってしまったんだからいいだろう！」

薪は何か納得したように頷いてから穂琥の様子を窺った。

「え？私の怪我・・・？そういえば圭と戦ったときに随分と怪我したのに・・・今治っているや・・・」

「治してくれたんだよね、綺邑が」

薪はどこか楽しそうに言った。綺邑が自分の怪我を治してくれたことに驚きを感じていた。いや、それよりも死者を誘うことを生業としている死神が人を、眞匏祇を癒すことが出来るのだろうか？

「ま、アイツも『特殊』だからな」

薪自身もそう言った事までは流石にわからないようだった。

「まあ、そんなわけだ。じゃ、少し休養を取ったらやりますか」「何を？」

「桃眼の完全な扱い方、といっておこうかな。オレだってそれに関しては詳しいわけじゃないけど、やらないよりはましだろう」「わかった」

薪は穂琥の全快しだい、直ぐにやるといつてきたので穂琥は首をか
しげた。傷なら綺邑が治してくれた。だったら平気ではないかと。
しかし薪はそれを否定した。綺邑が治したのは表面的な傷だけ。ま
だ、内側、つまり眞稀のほうの回復は出来ていない。眞匏祗は体内、
体外全て眞稀にて修復する。そしてその眞稀が枯渴したときは傷の
直りが遅くなる。さらには疲労度も溜まる一方だ。そこで綺邑が傷
を治してくれたおかげで傷のほうに眞稀を回さなくてすむので眞稀
の回復だけを待てば通常の状態に戻る事が出来るということ。

では薪は？薪は綺邑に治してもらったのだろうか。

「いや、オレは治してもらってないよ。オレは嫌われているからな
」。穂琥は綺邑に気に入られてんだよ。だからそれについて突っ込
んだらさつきみたいに蹴り殺されそうになったんだけど」

薪の言葉に意外性を感じながらも穂琥は納得せざるを得なかった。

薪は軽く手を上げて部屋で休むといって穂琥に背を向けた。あち
こちが破損した家を治しながら薪は二階へと上がっていった。

第十二話 開眼を目覚めさせて

薪の笑う声が聞こえる。

「何言ってるんだよ。穂琥は穂琥だろう？もう強いんだし、自分でもかできるだろう？オレは忙しいし、もう自分の命は自分で護ればいいさ」

目の前の薪はそうやって笑う。にこやかにとっても晴れた笑顔で。それとは反対に穂琥は悲痛の表情を浮かべる。どんどん歩き去っていく薪に手を伸ばして。

― 待つて。お願いだから待つて。見捨てないで、薪。お願い、薪・・薪。

「薪！！」

「！？」

大声を出して飛び起きた穂琥はしばらく呆然としていた。目の前に酷く驚いた薪の顔があった。穂琥は思わず薪に抱きついた。

「は！？ちよつと！？穂琥？！」

驚いた薪は何とかして穂琥を引き剥がす。

「もう朝だし、魘されていたみたいだから起こしてみようとしたんだけど起きる気配なかったから諦めようとしたら飛び起きてきたら驚いたよ」

「あ、ゴメン……。夢だ……」

「オレの名前を絶叫に近い形で呼ぶ夢ってどんなだよ……」

いつものように呆れたような口調で言ったがどうやら今回はそんな呑気な話ではないらしく、穂琥が尋常ではないほど落ち込んだので薪は少し焦った。

「薪は……さ」

穂琥が低いトーンで言う。

「私のこと……見捨てる？」

突拍子も無い穂琥の質問。いつもの薪だったら「は？」と応えたかもしれないけれど今の穂琥を相手にそんな反応、するわけも無かった。穂琥の傍まで歩み寄って穂琥の前に膝を落として穂琥と目線の高さを同じにした。

「あるわけないだろう、そんな事」

「お前を見捨てるなんてオレの命を捨てるより有り得ない。何があってもお前を見捨てるようなことはしない。大丈夫、安心しろ」

優しくそつと、頭を撫でながら薪が言ってくれた。それが嬉しくて穂琥はそつと頷いた。

薪はそんな穂琥を確認して立ち上がると俯いている穂琥には見えない、見せないようにして微笑む。穂琥を大切に思う家族として優しく暖かな笑みを浮かべるのだった。

「落ち着いたら降りて来い。朝飯食って落ち着いたら特訓だから」
「うん……。……。特訓なんん!?」

「当たり前だろ」

朝餉の支度をしながら薪が言う。穂琥は必死でそれに食いつく。完全ではない以上、しなくてはいけないということはわかるけれど、桃眼というものは療蔚の技だ。これからの戦いに必要性は存在しない、と穂琥は思っただった。

「なんだ、お前。桃眼が『治すだけ』とでも言いたいのか？」

「え？違っの？」

「違うね。医療、療蔚の術であることに代わりはないけど。でも考えても見ろよ？」

薪の例え話に穂琥は絶句した。

とある一つの病院で起きたと仮定する酷い事件。あくまで過程であり事実ではない。

一人のドクターがいた。そのドクターが抱える患者は一日に30人を見るとする。その30人は健康診断で来ただけのいたって健康な人であったとする。そしてそのドクターがその患者全員に嘘の診断を渡す。

『癌になっています』

すると患者はどうする？

『それを治す手立てはありませんか？』

ドクターが応える。

『有りますよ。この薬を毎日飲んでください』

手渡した薬を嬉しそうにもらっていく患者たち。それはドクターが今までに勝ち取ってきた信頼の証。そうして薬を持ち帰った患者たちはその日のうちに全員死んでしまった。原因は癌の特効薬としてもらった薬。その薬は特効薬でもなんでもなくてただの毒薬。それを飲めば瞬時に死に至る。

「な？医者の方って結構怖いんだぜ？」

「いや！あんたのその思考のほう怖い！！」

苦情を言う穂琥に涼しい顔をして受け流す薪。要するに、『医療』というのは『ミス』というだけで人を死に追いやり殺してしまう。それほど恐ろしいものがある。

血が詰まってしまった病にかかったらそれを治すために血が流れやすいように真稀を送ってやるとする。しかしだ。血が詰まっていないで健常なその血管にその流れやすい処置を行えばその血流は急激なものとなってきつと死に至るかもしれない。

真稀の領域になってくれば神経経路を自在に操る事だって桃眼であれば容易くなってくるだろう。そんな神経経路を切断してしまえばどんなに強情なものでもたつことすらできなくなってしまう。そうして立てなくなってしまった相手は最早翼を& amp;#25445;がれて地を這う虫けら同然。後は真稀を流し込んで血液の

流れ逆流させたり、そもそも臓器器官の経路を断ち切ってしまえば直に魂石だって割れて・・・

「だあああ！！わかった！！わかった！！もういい！わかったから！頑張つて習得しますから！！！」

薪の言葉を遮つて穂琥は耳を塞いで叫ぶ。薪はわかればよろしいといてさっさと食器を片付ける。

「とはいっても今のは例えだぞ？」

「わかつてるわい！それを本気でやれって言つたら私は薪と家族の縁を切るわ！！」

「まあ、そうわめくな。さて、移動するぞ」

薪は穂琥を椅子から強制的に立ち上がらせるとそそくさと歩き始める。仕方なく穂琥はその後に続くのだった。

眞菟祇の世界と違って地球という世界は酷く狭い。そして柔らかく脆い。そんなところで本気の修行が出来るわけも無く。そこで薪はい空間を作り出したのでした。

「薪つて本当に何でもできるのね・・・」

「そんなわけ無いだろう。儒楠だって出来るさ。上級クラスになればこれくらい出来る」

薪は簡単そうに言つて扉を開く。その先は驚愕するほどの広さ。地面は土。岩場のようにゴツゴツとした場所がたくさんある。もし人がいれば簡単に隠れる場所を作ることができそうだった。

「ここで修行を・・・え、でもどうやってするの？薪にぶつける

わけには行かないでしょう？」

「当たり前だろう。いくらオレでも死ぬよ」

薪は呆れたように笑った。薪が幼少期に造ったオリジナルの修行法。それを今の自分なりに改良したものを穂琥にやってみるという。

「つまりお前は実験台だ。頑張れ」

「え……」

薪のあっさりとした言葉に返すことも出来ずに穂琥は固まる。誰にも試したことのない薪だけの習得方。故に、他のものでもそれが使えるかは疑問なところだった。

見えない敵を討つ為にはどうしたらいいか。一つは薪のような感知能力の高いものが周囲を警戒しながら相手を見つける。ただ、これでは常に気配を感知し続けなければならないために集中力を相当要する。それに相手が極度に眞稀を抑えてしまえば見つけることはまず出来ない。そこで、桃眼。桃眼は『目』の力。故に『見る』力。隠れ潜んだ相手を視覚的に捉えることが出来る。

「簡単に言えばサーモグラフィか？」

「ほう……」

薪の例えに納得する穂琥。

「ま、ひとまずは眞稀の感覚になれていこう。はい、開眼」

「は、はい……」

薪に言われるままに開眼する。ぼわつとした煙のような靄のような、そんな世界が目の前に広がる。

「少し曇っているなあ……。さて、どうするか」

どうやら今の薪の発言からこの霧がかかっている状態は通常の状態ではないらしいことが把握できた。

「もう少し眞稀を上げて……。そうそう、その辺でストップ。維持して……」

薪のアドバイスを受けながら桃眼の修行に入った穂琥だった。

何とか目が大分桃眼の眞稀に慣れ始めた頃、薪が次の段階へ移行することを伝えた。

「今からダミー人形を2体作るからそれを時間内に潰せ。制限時間は20分」

「え？20分？！そんなに？！たった2体なのに？」

「言ったな、『たった』と。よし、頑張れ」

薪が手を上げて穂琥を応援する。その態度に妙な焦りを覚えた穂琥はちなみに時間内にもし潰すことができなかったらと尋ねると薪はこれまたさわやかな笑顔で答えた。

「罰ゲーム」

薪の語尾に『が付いただけではなく、ウインクまでしている以上、時間内に潰せなかったらきつと穂琥が潰される。穂琥は普通じゃないほど力を入れてダミー搜索の用意をした。

条件は二つ。一つ。時間内に2体のダミーを見つけて潰すこと。

二つ、その場から一步も動かないこと。これだけ守れば後は何をしても好きにしていいたいと言うこと。薪のスタートの合図でいつの間に隠したか知れないダミーを捜すこととなった。

「うわっ。見つけにくそう・・・」

ダミー自体に宿る眞稀は薪の組み込んだ眞稀で薪、そのもの。だから見つけることは結構簡単かと思っていたがそうもいかない。隠れるのがうまいわけだし、そもそも陰に隠れて見えないわけだから桃眼の力を引き出さなければきっと見つけることは出来ない。

そんな折に、視界の隅に妙な気配を感じた。

「アレは・・・？」

「お、見つけたか」

「いや、わからないけど・・・」

薪に言われて眞稀を放つ。するとダミーが小さく爆発した。あと一体ということで必死になって探す穂琥。しかし何処をどう見てもそれらしいかげない。本当に隠しているのだろうか。

目が急激に痛み始める。少しだが涙も出てきそうだった。それでも穂琥は目を凝らす。ぐっと力を入れて揺らぐ気配を察知する。きつとそれは薪の隠したもう一体のダミー。穂琥は目がつぶれそうなほど痛いのを我慢して眞稀を放ってダミーを破壊する。その途端、穂琥は膝の力が抜けて前に倒れた。

「おっと」

薪がそれを受け止めて静かに座らせる。

「限界だな。慣れない開眼を続ければ身体に支障をきたしてしまう。少し休憩だな」

穂琥は小さくはいとだけ答えて近くにある岩に背を預けてはつとずる。

―薪ってこんなに優しいか？！

そんな疑問が浮かんでから薪を凝視したために薪から冷たい視線が帰ってきた。それを軽く避けながら穂琥は必死で考えた。薪は一体何を考えているのだろうか。こんなにやさしいのは何か裏でもあるのだろうか？そう考えたところで所詮は穂琥の頭。薪とは違う。わかるわけも無く。体は休んだが、結局のところ頭が休まない状態で休憩時間は終わってしまうのだった。

第十三話 修行に関しての千思万考

眞稀を練ることに集中できずに薪にどやされる。休憩をやっているんだからしつかりしろと薪に叱責を食らう。

薪の次の指令は先ほど同じダミー潰し。ただし今回は2体ではなく5体。穂琥は一瞬だけ文句を言ったが完全にスルーされたため諦める。

一体目は案外すんなり壊すことに成功した。ただ、あちこちに漂うのは薪の眞稀。何処にあのダミーがいるのかはよくわかりにくいよって、これだと思っても一般の眞匏祇の可能性も秘めている。しかし、ここにいるのはダミーとそれ以外の眞稀。

「おりゃ！」

とりあえずだから勘で眞稀を放つ。見事に二体目のダミーを破壊する。しかし、それをカウントした薪からキツイ一言が。

「次勘で打つたらオレがお前を打つぞ」

「は、はい・・・申し訳御座いません・・・」

謝罪を全力でして意識を集中させる穂琥だった。

残り時間あと半分を宣告されて穂琥はかなり焦った。まだ、二体しか破壊できていない。あと三体もいるというのに。

「ダメだ！このままじゃ大変だ！殺される！薪に！確実にやられる！！！」

穂琥は自分に妙な暗示をかけるように頭の中でそう呟く。これをもし薪が聞くことが出来たらきつと呆れるだろう。

―オレは鬼か

急激に穂琥の集中力と眞稀が上がったので薪は首をかしげた。ここまで穂琥が眞稀を上げることが出来るのだろうか。

何とか集中して三体目のダミーを破壊する。それからさらにダミーらしきものを発見して穂琥は眞稀を放った。すると見事にダミーが破壊されるのを確認した。よしっ、とガッツポーズを決めようとした瞬間、後頭部に激痛が走った。

「ぬふぁ!？」

「勘で打つなと言っただろうが」

薪の見事なとび蹴りを喰らった穂琥だった。

「す、すいません・・・」

言葉に出したり表情に出したりしていないのに薪は何故勘で打ったとわかるんでしょかね、そんな疑問を抱きながらも穂琥は最後の一体を探すことに専念した。

「はい、残り二分」

やる気があまり感じられない薪の言葉にむっとしながらも穂琥は必死で集中力を高める。

ある程度のめぼしをつけてそのダミーがいそうな場所を凝視しているというのに全く見つけることができないのは一体何故だろうか。穂琥は必死に考える。相手は知らない真稀じゃない。薪の真稀だ。感知しやすいはずなのに。そんな事を考えているとちらりと視界の隅で空間の動きを見た。

穂琥は合点がいった。どうりで目星をつけて見つけることが出来ないわけだ。相手は移動をしていたのだ。それがわかれば簡単な話だ。その移動して出来た空間のゆがみを感じてそれを追えば絶対に捉えることが出来るのだから。今まで気づかなかったことが不思議なくらいに。

「はい、残り2秒。ギリギリだったな」

ダミーを破壊してから薪が言ったので穂琥はがっくりと腰を落とした。

「ま、よく出来たよ。ご苦労さん。次はもっとレベル高いから頑張れよ。つてなわけで休憩な」

「え・・・あ・・・はい」

薪のその甘い言葉の裏には一体何が隠されているのだろうか。一瞬、儒楠が化けているのかと思ったが桃眼が療蔚の技である以上、儒楠が教えることなどできるわけが無い。裏の読めない薪の優しい行動がどこか怖いような・・・。

「で？何？」

「え？」

突然薪が尋ねてきたので穂琥は呆然とした表情を浮かべた。岩に腰

を下ろして頼杖を付いている薪の表情はどこか面倒くささを感じさせた。

「さっきから睨むような、食い入るような。よくわからんけど」

「あ……いや……ちょっと気になって」

穂琥は少し俯きながら応える。薪に今まで思っていたことを言うのもどこか申し訳ないような気もした。せつかく優しく接してくれているのにそんな事を言っては酷いではないか。

「馬鹿の癖に頭が休まない状況を作るな。集中力が大事なんだからさ」

その薪の一言にぷっーんと来た穂琥は何処が優しいだ、絶対に嘘だ！と頭の中で怒号を上げながら薪に抗議をスタートする。

「うるさいな！馬鹿って！どーせ私は薪みたいにちよおつと違うこととして相手を陥れるようなマネできませんものねえ」

「……？何を言ってるんだ？」

「修行って言ったら薪、全然優しくないじゃん！それなのに今回優しいからさ！なんか調子狂っちゃって頑張んなきゃーみたいにしてさあ？」

罵倒の如く言い切った穂琥の言葉に薪は案外ぽかんとした表情をしていた。あまりのその表情に穂琥は何、と尋ねると薪は突然何かが破裂したように笑い出した。

「っふ、アハハハハ！くく……ふふ……アハハハハ！」

途中で笑いをこらえようとしているのは見て取れたがどうにも耐え

ることが出来ないように噴出してしまっていた。突然そんな風に薪が笑い出したので驚いて穂琥は目を丸くした。薪がこんなに笑っているのを見た事がない。

「何、お前・・・ずっとそれを考えていたの？」

薪の笑いを堪えたその質問に無言のまま頷くと薪はさらに噴出して笑い始める。

「ブフツ・・・！！くくく・・・ぐふつ・・・フフフ・・・アハハハ！！」

あまりに薪が笑うので穂琥はだんだん赤面してきた。薪がこんなにも取り乱して笑うところなんて見た事ない！何だよ、これ！レアだな、これ！ムービーにでも撮っておくか！そんな風に思いながらも穂琥は目の前の薪の状態にただ恥じらいを感じながら不貞腐れた表情をするので精一杯だった。

「いや、ゴメン・・・くくふ・・・ふふ・・・は・・・。ククク・・・！！」

落ち着こうとしているのか笑おうとしているのかわからない。くどいようだけでもう一度。こんな薪見た事無い。

「さて、次行こうか」

「ちょおお！？質問！！私の質問は？！」

あまりにさらつと薪が次に行くことを言い始めたので穂琥は薪に勢いよく突っ込む。

「どーでも、いいし。そんな事」

薪の表情にはまだ笑いが残っている状態でそんな事を言う。いつもの薪ではないと穂琥は猛抗議をする。薪は仕方無さそうになんとなくだ、そんな風にやっているだけだ、と応えた。

「いや、答えじゃないからね！？それ！」

穂琥の言葉に薪はまだまだ笑みの残った顔で馬鹿だから、と付け足す。ぷつんと切れる穂琥の頭の中の何かの糸。

「なんじゃいそらああ！？偽もんだ！偽もんだ！！薪はこんなじゃないしい！偽ー！本物どこだー！」

「いや、ここにいるし」

「嘘だー！偽だ！そんな笑わないもん！！」

穂琥のその言葉に薪はまた噴出して笑い始める。本当に一体薪に何があったのか知りたい穂琥だった。

「くつくつく……。本当に馬鹿な」

薪はまだ笑い続ける。一体何のツボにはまってしまったのだろう。

「休憩だつて簡単にくれるじゃん！」

「当たり前だろう？今までのとは全く違うんだから。くく……。桃眼だぜ？休憩もなしにやったらお前、死ぬぞ。それでもいいんならいつも通りやるけど」

「いや、すいません……。」

「はい、次やるよ」

なんとなく薪には誤魔化された様な気もしたけれど仕方なく穂琥は集中することに決めた。

次のステップは今まで薪の眞稀だけだったのを一般の眞稀を含めた中から薪の眞稀のみを探して打つこと。制限時間は10分。

「ま、もし間違えた場合は・・・」

「言われなくてもわかります・・・」

「よろしい」

そんな会話をしてからスタートの合図。穂琥は一気に開眼する。するとその目に映ったのは信じられない数の眞稀たち。これほどの眞稀を薪は一体どうやって集めたのか疑問だが、それはさておき、所謂この状況は街中と同じことだ。この中からの確に相手を探し出さなければならぬということ。今までと違ってあちこちで眞稀が動いているせいで空間のゆがみだけを探せばいいなんてものではない。歪み放題だから。

―苦戦しているな・・・。穂琥ならできると思っただけだなあ

薪は穂琥をみてそんな事を思っていた。全然わからないと途方にくれ始めてしまったので薪は仕方なくヒントを与える。

「一つ！いくら桃眼といえど、観ようとするな。感じ取れ」

「え？あ、はい」

穂琥としては思わぬ薪からのヒントに戸惑う。しかし、それを何とか素直に受け止めたところで見ようとしなくて感じ取るにしても全くわからない。

「ふたつつ。桃眼に頼り切るな」

「え？あ、自分の感覚も・・・？」

「そういうこと」

腕を組んで立つ薪の姿を軽く見てから穂琥は首を傾げる。一体何故こんなに優しくしてくれるのだろうか。それほど桃眼という技が凄いのだろうか。

とにかく、今はそんな薪の不可解な親切を真に受けてしつかりと集中することにした。ふと思ったが、自分の間隔も頼りにしろと言うことは決して『観る』だけが桃眼の力ではないということかと思いついた。感じ取れといった薪の言葉を理解して穂琥はその瞳を閉じる。そうしてふと視界の隅にうごめく光の束を垣間見る。そこでようやく気づく。観ようとするとダメなんだ。相手は隠れ潜んでしまっているのだから『観よう』としても観られるわけもなかったのだ。

「この感覚は薪の眞稀だ！」

穂琥は急いで眞稀を放って見事にダミーを破壊した。それと同時に大きなため息をついて膝を突いて息を切らせる。そして発っている薪に残りの時間を尋ねる。

「いや、気にしなくていいよ」

薪はそう言ってにこりと笑う。きっと時間内に収まったのだろう。穂琥はほっとして地面に大の字に倒れる。

安心したような穂琥の表情を横目で見ながら薪は時間を確認する。

「ま、初めてだし多少の時間オーバーは許してやるか

そんな事を思いながら小さく笑う。

「上出来、かな」

「え？私上出来！？」

思わず出た声に穂琥が鋭く反応したのでとりあえずそれを肯定した。それを聞いた穂琥がひたすら嬉しそうに騒いでいるので薪はだんだんバカらしく思えてきた。

「図に乗るな」

「いでっ・・・」

軽く穂琥の頭を叩いて穂琥を鎮圧した薪だった。

第十四話 目の前の大きな壁

次の目標は身体のどこに魂石があるのかを探し出すこと。その魂石を、破壊するにしろ治すにしろ何処に在るかわからなくては施しようが無いからだ。

「え？魂石の位置？みんな同じじゃないの？」

穂琥の言葉に薪は頭を抱える。そしてさも可哀想な子を見る目で見つめた薪だった。魂石は個々の自由に場所を決めて個々で守っている。薪の場合は右の脇腹辺りらしい。穂琥は自分で何処にあるかわからないが、それを薪に言うともた叱責を喰らいそうだったので黙っていることにした。

「とりあえずは魂石の破壊をしよう。とはいっても魂石を破壊するなんてとんでもないことはできないからオレが擬似的に魂石を眞稀で作るからそれを壊すように」

「はい」

持っていた眞稀を薪はほいっと上に放り投げた。そしてぱっと消えたその眞稀を見ながら軽く薪は言った。

「隠したから探して壊せ。制限時間１０分」

「え？！１０分！？それ短・・・」

「はい、スタート」

「ふえええん！」

文句を言う時間も無く穂琥はそれを探すことに宣する。

多少の時間はかかったが、そこそこ簡単に見つけることが出来た。よって次は体内にある魂石を探すこと。この広い空間から見つけることが出来たのだからきつと簡単だろうと高をくくっていた穂琥は正直心が折れた。この小さな『身体』という媒体にはその魂石と調整した眞稀が流れている。よって見つけることが全く出来ない。あちこちに似たような塊が滞留している。全く困ったものだ。

薪は穂琥の様子を見ながらどうするべきか悩んでいた。ここまで長い時間桃眼を使っているいいものかわからない。薪は無論戦鎖であつたからこんな長い間使っていたらへばるどころか下手したら失明、あるいは死ぬかもしれない。けれど相手はあの紫火の血を濃く継いだ穂琥で療蔚だ。悩む。

「痛い！」

急に穂琥が目を押さえて座り込んでしまった。薪は慌てて穂琥に駆け寄った。

「大丈夫か！？」

「う、うん・・・なんとか・・・ごめんなさい・・・」

「・・・。いい、謝るな。閉眼できるか？」

「う・・・」

穂琥は辛そうに目を瞑っている。薪はそんな穂琥の目にそつと手を当てる。そして強制的に穂琥の目を閉じさせる。そしてふらついている穂琥を抱えて平らな座れる場所へ移動する。

「ごめんなさい・・・」

「謝るなって。無理をさせたのはオレだ。謝るのはオレの方だ、悪かった」

「そんなの・・・」

薪のその言葉に穂琥は続ける言葉が出なかった。休憩しようといった薪の言葉に頷くだけだった。

「オレは用があるから何かあつたら声を掛けろな」

「え、あ、うん。用って？」

「オレだって修行くらいしないとな」

薪はそう言つて穂琥から少し離れたところに腰を下ろした。それからピクリとも動かなくなってしまった。果たしてその何処が修行なのかわからないが穂琥はただその様子を見ていた。

穂琥はそつと開眼する。そして魂石の入っている『身体』へ目をやる。やはりどう見ても何も無い。痕跡らしきものを発見することは全く出来ない。ため息をつく穂琥はそつと閉眼しようとして辺りが暗くなったことに気づいた。暗いとかそういう問題ではない。視界が無くなった。桃眼の無理のし過ぎで視界の線を切ってしまったのかと焦ったが、突如、目の前に巨大な見たこともない大きな白い扉が表れた。

「な、な・・・何これ!？」

仰天する穂琥だが辺りを見回してもそれしかない。この暗闇の中でその扉は白く光って浮き上がって見えた。穂琥にとってそれは扉というより何処までも続く壁に見えた。

ふと、その扉の麓に人影を見つけた。

「あの・・・?」

蹲ってまるで眠っているようだった。全身を布で包み顔すらその布で見えない。しかしその姿は印象的だった。その布の上から鎖で巻かれ拘束されていた。とても小さな小柄な身体に。

「あの・・・よろしいでしょうか？」

穂琥の言葉にその身体がもぞつと動く。そして顔も上げずにそれは声を発した。

「随分と可愛らしいお嬢さんだねえ」

声からして老婆のようだった。しゃがれた声で喋るのも辛いのではないかと思えるくらいの声だった。

「ふうん。以前来た者より頭の出来が違いそうだなあ」

「んな！？私の頭が悪いとでも言いたいのかー！」のかー！」のかー！」

広いこの空間で穂琥の声は木霊した。その老婆は顔が見えないからなんとも言いがたいが明らかに驚いた様子を見せ、その後、さも面白そうに笑った。

「くくく・・・。我が言った『出来が違う』とはそういう意味ではないさ」

小さく微笑するその声は聞いた感じではそうでもないが何処と無く穂琥はこの老婆の心が本当に笑っているように感じた。

「我は門番。この門の番をしている」

老婆はそう言った。扉だと思っていたコレは何かを繋ぐための門だったらしい。

第十五話 大きな門の向こうにあるもの

こんなに大きな門、見たことない。

目の前のそれを見て穂琥にはそれしかいえなかった。しゃがれた声で老婆、門番は不気味に笑う。

「ふっふっ。以前来た者もそのようなことを言っておったなあ」
「以前、さつきもそう仰っていましたがここには他にも人がいらっしやっているんですか？」

穂琥の問いに門番は肩を揺らしてくっくつと笑った。ここに来るものは皆『人』とは言わない。穂琥はそれを聞いてはっとして頭を抱えた。また薪に怒られる。

—こんなに大きな門は他に存在しないだろう

門番が急にそんな事を言った。穂琥が首を傾げると門番は前回ここに来たものがそう言ったと伝えた。

「ここは何なのですか？」

「門、さ」

それはわかるのだけれど。知りたいのは何の砦となっているのかということ。

「果て無き力を手に入れんとする者、この門を潜るが良い。さすればその果て無き力を授けよう」

門番の声が不気味に響く。過去にこの門の前に来たものの数は忘れた。しかし潜っていった者の数ならしかと記憶している。

「わずかに2祇だ」

その数に穂琥は身を引く。数多くの眞匏祇がここを訪れたことはわかった。しかし通ることができたのはその数。ならば・・・。

「私には無理ね」

穂琥は視線をとして静かに笑う。

「弱いからか？護って貰っておるだけだからか？そんなものは関係などありはしないさ」

門番の声が強く響いた。

「皆一様にして持っておらんかっただけのこと。とある、大切な『あるもの』が」

門番は低く声を唸らせる。

「ぬしにはあるか？」

「ある・・・もの？」

それが何か穂琥には知れない。以前来たものは少し悩んだ後に自信ありげにそれを自分は持っていると言って潜って行ったそうだ。

自分が持っているあるものに、自分で気づくことが出来たとき、この門を開けることが出来るという。穂琥は悩んだ。おそらく今の自分にそれは無い。いや、あるのかもしれないけれどそれが何であるかを知ることが出来ない。ならばここを無理に通ろうとする意味は無い。では、穂琥のすべき事は一つだ。

「門番様。お願いします。ここから出してください。今の状況ではいくら考えても私には無理です。ですから一度出してください。そしてその答えがわかったとき、再びここにお招きください」

「くつくくつ。面白いなあ。良いだろう、招いてやろう。ただし我を呼ぶぬしの声がこの耳に届けばな」

「きつと届かせてみせます」

門番は鼻を鳴らすように笑う。そして目を閉じることを促す。穂琥はそつと目を閉じた。その時脳裏にふつと何かが過ぎって行ったような気がしたが急に周囲の感覚が変わって体が急に揺さぶられたので驚いて目を開けた。

「穂琥！」

目の前には今までに見たこともないくらい真つ青な顔をした薪の顔があつたのでそれに驚いた。

「薪……？」

「穂琥……？大丈夫か？　あまり心配かけさせんなよ……」

心底ほつとしたように薪は穂琥から離れた。

「薪、顔真つ青だよ？大丈夫？」

「はあ……誰のせいだと思ってんだよ……。急に眞稀すら感じなくなっただけ驚いてお前を見たらまるで死んでいるみたいだったから……。焦ったよ……」

薪の心底心配している顔を見てなんとなく可笑しくなってしまったことを恥じながら穂琥は大丈夫だということと心配をかけた謝罪と礼を述べた。肩を落としてため息をつく薪の顔色が大分元に戻ったので安心した。

ともかく、身体の状態はともいいうことで修行に戻ることにした。薪は少し心配そうだったけれど大丈夫だということに負けて修行に移った。

事もあるうか、あれほど出来なかった魂石探しを意図も簡単にやってのけてしまった。その様子に薪は物凄く驚いていた。穂琥自身も驚く。先ほどあった『出来事』が原因だろうか。

次のステップも案外簡単にできてしまい、薪が不思議がっているけれど何より驚いているのは穂琥自身のため薪のほうもどうしたものか悩んでいるようだった。けれどもできたことに変わりは無いわけだ次のステップへと移行する。

今度はついに攻撃に移る。身体に何らかの支障をきたす技。ただし致命傷を与えてしまっただけで死んでしまうのである程度動けなくなる程度のものである。

さっきまでとは打って変わってまるつきりできなくなってしまう穂琥。力を入れすぎると壊してしまうのでそれをしないために力を抑えるけれどそれでは何もできないので少し力を入れるとそのダメージは簡単に壊れてしまった。

「ん……。ゴメン、薪。少し休憩していい……。？」
「いいよ」

予想外にすんなり休憩許可が出たので少し拍子抜け。しかしやって
いる技が技だし、先ほど穂琥が目を激痛で傷めているので薪もあま
り酷使させられないのだろう。

第十五話 大きな門の向こうにあるもの

こんなに大きな門、見たことない。

目の前のそれを見て穂琥にはそれしかいえなかった。しゃがれた声で老婆、門番は不気味に笑う。

「ふっふっ。以前来た者もそのようなことを言っておったなあ」
「以前、さつきもそう仰っていましたけどここには他にも人がいらつしゃっているんですか？」

穂琥の問いに門番は肩を揺らしてくっくつと笑った。ここに来るものは皆『人』とは言わない。穂琥はそれを聞いてはつとして頭を抱えた。また薪に怒られる。

——こんなに大きな門は他に存在しないだろう

門番が急にそんな事を言った。穂琥が首を傾げると門番は前回ここに来たものがそう言ったと伝えた。

「ここは何なのですか？」

「門、さ」

それはわかるのだけれど。知りたいのは何の砦となっているのかということ。

「果て無き力を手に入れんとする者、この門を潜るが良い。さすればその果て無き力を授けよう」

門番の声が不気味に響く。過去にこの門の前に来たものの数は忘れた。しかし潜っていた者の数ならしかと記憶している。

「わずかに2祇だ」

その数に穂琥は身を引く。数多くの眞匏祇がここを訪れたことはわかった。しかし通ることができたのはその数。ならば……。

「私には無理ね」

穂琥は視線をとして静かに笑う。

「弱いからか？護って貰っておるだけだからか？そんなものは関係などありはしないさ」

門番の声が強く響いた。

「皆一様にして持っておらんかっただけのこと。とある、大切な『あるもの』が」

門番は低く声を唸らせる。

「ぬしにはあるか？」

「ある……もの？」

それが何か穂琥には知れない。以前来たものは少し悩んだ後に自信ありげにそれを自分は持っていると言って潜って行ったそうだ。

自分が持っているあるものに、自分で気づくことが出来たとき、この門を開けることが出来るという。穂琥は悩んだ。おそらく今の

自分にそれは無い。いや、あるのかもしれないけれどそれが何であるかを知ることが出来ない。ならばここを無理に通ろうとする意味は無い。では、穂琥のすべき事は一つだ。

「門番様。お願いします。ここから出してください。今の状況ではいくら考えても私には無理です。ですから一度出してください。そしてその答えがわかったとき、再びここにお招きください」

「くつくくつ。面白いなあ。良いだろう、招いてやろう。ただし我を呼ぶぬしの声がこの耳に届けばな」

「きつと届かせてみます」

門番は鼻を鳴らすように笑う。そして目を閉じることを促す。穂琥はそつと目を閉じた。その時脳裏にふつと何かが過ぎて行ったような気がしたが急に周囲の感覚が変わって体が急に揺さぶられたので驚いて目を開けた。

「穂琥！」

目の前には今までに見たこともないくらい真っ青な顔をした薪の顔があつたのでそれに驚いた。

「薪・・・？」

「穂琥・・・？大丈夫か？　あまり心配かけさせんなよ・・・」

心底ほつとしたように薪は穂琥から離れた。

「薪、顔真っ青だよ？大丈夫？」

「はあ・・・。誰のせいだと思ってんだよ・・・。急に眞稀すら感じなくなつたから驚いてお前を見たらまるで死んでいるみたいだったから・・・焦つたよ・・・」

薪の心底心配している顔を見てなんとなく可笑しくなってしまったことを恥じながら穂琥は大丈夫だということと心配をかけた謝罪と礼を述べた。肩を落としてため息をつく薪の顔色が大分元に戻ったので安心した。

ともかく、身体の状態はともいいと言うことで修行に戻ることにした。薪は少し心配そうだったけれど大丈夫だということに負けて修行に移った。

事もあるうか、あれほど出来なかった魂石探しを意図も簡単にやってのけてしまった。その様子に薪は物凄く驚いていた。穂琥自身も驚く。先ほどあった『出来事』が原因だろうか。

次のステップも案外簡単にできてしまい、薪が不思議がっているけれど何より驚いているのは穂琥自身のため薪のほうもどうしたものが悩んでいるようだった。けれどもできたことに変わりは無いわけで次のステップへと移行する。

今度はついに攻撃に移る。身体に何らかの支障をきたす技。ただし致命傷を与えてしまつては死んでしまうのである程度動けなくなる程度のものである。

さっきまでとは打って変わってまるつきりできなくなつてしまった穂琥。力を入れすぎると壊してしまうのでそれをしていないために力を抑えるけれどそれでは何もできないので少し力を入れるとそのダメージは簡単に壊れてしまつた。

「ん……。ゴメン、薪。少し休憩していい……。？」
「いいよ」

予想外にすんなり休憩許可が出たので少し拍子抜け。しかしやって
いる技が技だし、先ほど穂琥が目を激痛で傷めているので薪もあま
り酷使させられないのだろう。

第十六話 桃眼の持ち主

「桃眼って凄い技・・・？」

ずっと聞きたいことがあるのを堪えていついに堪えきれずに休憩している薪に尋ねる。薪はそんな穂琥の唐突の質問に首をかしげた。しかし薪は軽くそれを流す。

「まあね」

押し黙る薪と穂琥。どちらかという黙っているのは穂琥のほう。薪はただ休息をしているだけだから。

「桃眼って何祇持っているの・・・？」

「は？」

突然の質問に薪は無愛想に答える。

「一祇は薪。もう一祇はお母様。他には・・・？」

「何を訊わからんこと言っているのやら。桃眼を持っているものが何祇いるかなんて分かるわけ無いだろう？」

「え？」

「そこまで慥夸は暇じゃねえよ。桃眼を開眼した奴の数なんて一々数えてられねえって。過去に亡くなっていった歴代の慥夸妃たちだつて桃眼は使えていたんだから」

「え・・・？そうなの？」

「あ？当たり前だろう？慥夸の嫁だぞ？その位の力使えなくてどうする」

薪の呆れたような回答に穂琥は俯いた。てつきり穂琥は先ほどの門番の護っていた門がその桃眼への道かと思っていた。あの門を潜れば桃眼を使えるようになるのかと置いていたけれど。でも、そういうわけではないということが今わかった。ではあの門は何だろう。わからない。

「私なんかが桃眼を仕えるようになるかな・・・」

自信の欠片も無いその台詞に薪はふっと穂琥を見据える。穂琥はその薪の瞳に飲み込まれてしまいそうでさつと目を外した。

「できるさ」

沈黙の後に薪がそう言った。

「どうしてそんな風にいえるの？まともに技だって使えないのに・・・、鈍いし」

「鈍いのは性質だ、関係ない」

否定はしないのね。

「オレの妹だしな。それに・・・」

薪は言葉を切る。穂琥はその続きを待ったけれど薪はその続きを言わずになんでもないと区切ってしまった。

「とにかく出来る」

薪はやはりそうやって言い切った。そこまで言い切ることの出来る薪の力がどこか羨ましい。

「最初から出来る奴なんて居ないさ。できたらつまらないだろう」

「薪はつまらないの？」

「オレが最初から何でも出来るみたいな言い回しは止める」

薪とて苦勞してここまで来ている。戦鎖でありながら療蔚の技が使えるのは確かに才能かもしれない。それでもその技を使うためにどれほどの苦勞をしてきた事か、穂琥にはわからないのだから。

「出来ないから苦勞して頑張つてそれを手に入れるんだろう？お前は何のために今、頑張つてんだ？」

「え？」

「オレはこう見えても結構お前の意見を尊重しているつもりだぜ？桃眼の力を使いこなせるようになりたいと切に願ったのは穂琥だろう？」

薪に言つた記憶はあまり無い。それでも確かに桃眼の力がちゃんと使えるようになりたいとは願った。それを薪は汲み取ってくれたのだろうとは思えない。

「何のために今、桃眼の修行をしているんだよ。そこまではオレもわからないけど、付き合つてやつてんだ。しゃきつとしろ」

「・・・うん。ありがとう。なんかすつきりした」

そうだ。自分のやりたいことのために力を得たいんだ。『果て無き力』が本当に凄いものだというのなら得たい。あの門を潜りたい。『あるもの』が自分の中にあれば。いや、そもそも穂琥はもしかしたらその『あるもの』が主体となつて力を得ようとしているのではないだろうか。

わからないなりに穂琥は考える。それでも今はそれを放って置いて修行に専念する。

疲れ果てて修行部屋から出てきたら外はもう闇に覆われていた。流石にこんな長い時間やっていたら大変だろうと薪は肩を落とす。ともかく、今日はもう終わりでまた明日にしようという事になった。

どっかりとベッドに飛び込んだのは随分後だった。疲れて何も考えることが出来ない。このまま眠ってしまいそうだ。

—あるもの・・・

ふつと頭を掠めた何か。穂琥ははつと目を見開いた。そうだ。持っているのではないか？自分が求めるものこそ、その『あるもの』かもしれない。弱い。自分はなんて弱い存在。それでも思うことくらい、してもいいと思ってここまで来ているのだから。穂琥は見開いた目をゆっくりと閉じて心の底から叫ぶ。

—再びあの門の前へお連れください

第十七話 内に秘めた心（前編）

身体がぐつと回転して強制的に立たされたような感覚になる。そうして目を開けると巨大なあの門がある。

「よく来られたね、お嬢さん」

門番の低い声が鳴り渡る。

「連れて来て下さったのは貴女でしょう」

「くつくくつ。力なくては来る事は出来んよ。して？」

「はい。ここは大いなる力の持ち主が通ることの出来る門」

「大いなる……。なるほど、確かに。その力とは？」

門番が低く唸る。穂琥はその門番をしつかりと目に移してから巨大な門へと目を移す。そしてまるでその門に語りかけるように話し始めた。

「全力を掛けて護りたいものがある。それはいつも強くて私の前に居て。飄々としていてまるで霞のようにつかめなくて。それでもそれは霞。吹けば飛んでしまう事だつてある。そんなときは私だつてそれを護りたい。護る力が欲しい。敵を倒す力なんて要らない。仲間を、大切なヤツを、護りたい。私は誰かを護れるそんな力が欲しい！」

穂琥の声に門が呼応する。

「桃眼の力、ワタクシにお与えください」

声が木霊する。この暗闇の中で。その木霊に反応するようにぼつと輝いていた白い門が急に強い光を放った。穂琥はそつと手を前にかざす。そして門に触れるでもなくそつとその手を前に押し出す。すると門がゆっくりと開いていった。

「そんな事・・・」

門番が震える。触れることなく門を開ける。そんな事があるのだろうか。いや、現に目の前でそれが起きているのだから。この娘の『想い』がそれほどまでに強かったということだろう。

穂琥はそつと門のほうへ歩いていく。そして門番の前まで来て足を止める。

「門番様。一つ、聞きたいことがあるのです」

「何を・・・？」

「貴女様のお名前を伺いたいです」

門番は肩をぶるつと震わせた。

「お前らは不思議な生き物よ。いや、しかし。ぬしがそれを聞いたところで何になる」

「貴女様はただの門番では在りませんか？ なんとなくわかるのです。だからどうか、名をお教えてください」

そんなに長い時間を過ごしたというわけでも無いにも関わらず一体何故そこまで深く心に触れることが出来る。いや、きっと時間ではないからだろう。心が触れ合えば時間なんてきつと関係ないのかもしれない。

「いかんよ。いけないのだよ。我はここに在らねばならぬのだから」

門番は酷く低い声で唸っていた。そのしゃがれた声を出すのもしかしたら一苦勞なのかもしれない。その身体に巻きついた鎖がその身を締め付けいためているのかもしれない。

「ぬしは結局何もわかっていない。我が何であつてどうしてここに在るのか」

「・・・いいえ、少しならわかる気がします。貴女様は・・・」
「ゆけ。門が閉まるその前に」

門番は穂琥の言葉をがむしゃらに切つてそう言い放った。穂琥はその哀れな門番の姿を目に映してからふつと俯いた。

「また来ます」

「来られぬよ。門を潜つたものは二度とここには来られまい」

穂琥はそんな門番の言葉をまるで無視するようににこやかに笑つて足を踏み出した。

「勝手にするがよい」

門番の声が耳の奥で聞こえた。そして穂琥は光り輝く門の向こうへと消えていくのだった。

閉門されまた静かな闇が広がったとき、門番はやつと身体に入っていた力に気づきその力を抜いた。

「来られぬよ。戻つてなど来られぬというのに。あの兄妹はどうしていつもそう、期待させるのだらう」

嘲笑するように門番は声を立てた。そしてまた深い孤独と闇に沈んでいくのだった。

第十八話 内に秘めた心（後編）

暗闇の中を歩く音が聞こえる。珍しいこともあるものだ。こうも続けてここへたどり着くものがあるうとは。

そんな事を思っていると、聞きおぼえのある声が聞こえた。

「また来ますって言いましたでしょう？ 門番様」

にこやかに笑う少女の顔。酷く驚いた。

「以前ここに来た者も同じ事を言っておったよ。また来ると。しかし、来る事は無かった。来られなんだ。それが普通なのだよ」

「その話、私にしてみれば少し意外に思えます。それでもきつと何か事情があつたのですよ。私に來られて彼に來られないわけ無い」

穗琥の言い切った言葉を聞いて門番は苦笑した。

「以前、誰がここに着たのか知っておるのか？」

「勘、ですが。私の兄です」

「そうか。まあ、合っておるよ」

門番は苦しげに笑う。そんな姿を見て穗琥は門番の今おかれている状況を心苦しく思っていた。

「こんな所に貴女は在っていい存在ではないと思うのです。間違っていますでしょう？」

「さてね。小娘に何がわかるというのだ？」

門番はまるで穂琥を脅すように呻く。しかし穂琥はそんな言葉すらもしつかりと受け止める。

「先ほどは失礼致しました。門番様に名乗らせようとしてしまつてそれは『禁忌』でしたね」

穂琥のその言葉に門番は酷く反応した。最早、この少女に自分の存在を隠す必要が無いということを悟らせた。

「貴女様のお名前、すこのしやうじやう簾堵乃槽耀、ですね？」
「知つておつたのか・・・」

彼女の唸るような低い声が穂琥の耳に届く。それに応えようとしたが、それよりも早く穂琥の言葉に反応するように門番の身体に巻きついてた鎖が光を帯びて碎け散る。それと同時に覆いかぶさっていた布も緑色の美しい炎に焼かれ消え去る。

そうして現れたのは目も疑う妖麗な美しい姿。紅蓮の様に燃ゆる紅き衣に、海のような深い藍の髪が地面に付きそうなほど長く煌いていた。すっと開けたその瞳は衣と似たしかしそれはまた異なつた強く輝く緋。あかそれに反して真っ白いその肌は今にも透けてしまいそうなほどだった。そんな白い肌を隠すことのない素足がこの真っ暗な空間に降り立つ。

「正直言つと知りませんでした。それでも門を潜るとき、誰かが教えてくれたような気がしたのです。簾堵乃槽耀様、れんないしん簾乃神様。貴女様は禁忌を犯した古き神、ですね」

「ああ・・・いかにも」

姿だけでなく声も美しい。透き通つた曇りの無い美しい声を轟かせ

る。

「礼を、しなければならなくなったなあ」

「いいえ。構いません。私などがこの様な出過ぎた真似をしてしまい、申し訳ありません」

彼女は美しく微笑む。緋い目が煌き穂琥に向う。穂琥はその目にうつかり飲み込まれてしまいそうだった。

「いや、良いわ。時期も丁度よい。さあ、ぬしも帰るがよい」
「はい」

帰り間際に兄に渡して欲しいと簾乃神から封を渡されそれをしっかりと懐にしまつて穂琥は目を閉じるのだった。

気がついたらベッドから落ちていた。それは身体が痛いわけだ。何とか身体を起こすと窓辺の椅子に腰を下ろした薪がいた。しかし、さつきとは打って変わって落ち着いた表情をして此方を見据えていた。

「お帰り」

静かにそう言った薪にただいまと返す穂琥。とても穏やかで落ちついた目をしているので穂琥は少し安心した。先程みたいに青ざめさせてしまったのは穂琥としても申し訳ない気持ちになる。

薪は立ち上がって穂琥の前で座った。目線が丁度同じ位置になった。そして穂琥の頬をそつと包むようにして触れると穏やかなその目を穂琥にしっかりと合わせた。

「気を失っていたのはこれが原因だったんだな。正式な開眼、おめでとう」

「気づいたの・・・？」

「そらね。あの門を潜ればそのものからはそれなりに眞稀が放出されることになるからね」

穂琥からあふれ出す眞稀を外に漏れないように必死に抑えてくれていたことに感謝する穂琥だった。

ベッドに戻ろうと立ち上がったとき、懐に違和感を覚えてそこに触れる。

「あ」

穂琥の漏らした声に部屋を出ようとしていた薪が足を止めた。

「どうした？」

「封を、もらったの」

「封？」

穂琥は懐からその封を取り出して薪に渡した。そしてその内容を確認した瞬間、薪の顔から血の気が一気に引いた。明らかに動揺して目が泳いでいる薪のその姿があまりにも珍しいことなので穂琥まで動揺してきた。

「なんて事を・・・」

やっともらした一言がそれだったので穂琥は肩を竦めた。もしかしたら先ほどの門番の件、やってはいけない事だったのかもしれない。

「何をして・・・帰ってきたんだ？」

薪の震える言葉に驚きながら穂琥はとりあえず自分のした事を説明する。

「ええつと・・・。門番様を解放・・・？してきて・・・」

「そういうことを聞いているんじゃないよ。簾乃神を開放したのはわかる。だけどそれだけでこんな言葉をもらえるなんて思えない・・・！」

薪の口から当然のように簾乃神の名前が出たので少し疑問に思ったが自分にわかったくらいだから薪だって知っていてもおかしくはないのだろうと思うことにした穂琥だった。

動揺する薪の声がいつもより荒れているので怒っているのかと不安に駆られるがそういうわけではないらしいと解釈する穂琥。そして薪に門前で起きたことを事細かに説明するように求められ、出来る限り正確にあつた出来事を伝える。

話を聞いた薪は顔を緊張でこわばらせていた。自分がそんなにもいけないことをしてしまったのかと不安に駆られた。

「いや、触れずに・・・か。オレも母上もさすがに門には触れたし踏ん張りもしたんだが・・・」

薪に言葉を聞いて穂琥は絶句した。そんな事は・・・！それではまるで・・・。

「やっぱり穂琥は・・・凄いな」

「え・・・・・・・・・・？」

あまりに自然に出過ぎた薪のその言葉に嘘も偽りも嘲りも嫌味も無い。ただ純粹にそう思った薪の言葉に、穂琥は言葉を詰まらせた。薪が自分のことをそんな風に言ってくれたことなど、一度も無かったから。

第十九話 神の犯した路

初めてだ。薪がここまで「凄い」と言い切ったのは。それがあまりにありえ無すぎていつものようにはしゃいで喜ぶことすら出来なかった。

薪はふつと息を吐く。それからあの簾乃神が何故、『禁忌を犯した古き神』といわれるのかを話してくれた。

その昔。人や眞匏祗なんていう小さなものの寿命では考えられないくらい昔の話。友の裏切りで神界を追われた哀れな神がいた。その神が簾乃神、簾堵乃槽耀であつた。そしてその裏切った友の名がけいとうよかいきょう京董夜繪鏡、けいきょうしん京鏡神だつた。

神々の都合など、一眞匏祗の薪には全くわからない。それに神界でもそれは非常に露見したくない汚れた歴史。故にあまり知られていないことではあるので詳しいことまで知っているわけではない。

その京鏡神が何らかの理由にて神々を裏切る行為を働いた。しかし、京鏡神は簾乃神にその濡れ衣を着せた。

「そんな！？そんなこと！神のする事じゃない！」

「神といえど万能なわけではない。そういうことなんだよ」

薪はどこか寂しそうにそう応えた。その表情が何処と無く悲しくて穂瓊はそれ以上の言葉を続けることが出来なかった。

しかし、簾乃神は京鏡神の濡れ衣を自ら着た。友と思っていた者の裏切りに酷く心を痛めたが、それでも大切に思ってたがあまり、簾

乃神はその濡れ衣を着ることを選んでしまった。そのせいで簾乃神は有りもしない罪を科せられ担う羽目となった。

「通称、『認可の門』と呼ばれる桃眼の最終段階にて使用される門。その番人をやらされたのさ」

元は神と崇められた崇高たる存在があんな暗く孤独に苛まれる屈辱の空間でこの長いこと押し込められていた。あんな惨めな悲惨な姿で。孤独と闇が支配するその空間で一体どれだけの時間を過ごしてきたことか。生まれたばかりの薪や穂琥には想像も付かない。

「でも……。そういう情報を薪が知っているという事は神々だつてそれを知らない訳ないでしょう？何故簾乃神様を開放しなかったの？」

「いい質問だな。オレはこの情報を特別なルートから入手した。だからおそらく眞匏祇の世界でこの話を知っているのはオレと穂琥だけだ」

薪の言った特別ルートが気になった穂琥だった。

「今更、罪を犯した神は京鏡神でした。簾乃神と間違えました、ごめんなさい。なんてそんな軽いことがいえるほどこの世界は甘くない。神の世界も、オレら眞匏祇の世界も」

そして何より、本当に罪を犯した京鏡神はいまだに姿を消したまま。つまり、眞匏祇の世界に伝うにも証拠が無い。本当に京鏡神がやったのかどうか、定かでない以上、神々の勝手な判断と思われるも仕方無いこと。

「それじゃあ、簾乃神様はどうなるの？罪を投げ出して逃げたとか

にはならないの?！」

「それなんだよ。オレと母上が認可の門を潜ったときに簾乃神様を解放しなかったのはそれに繋がっている」

確かに、穂琥に出来たのだから薪に、ましてや母、紫火が出来ないわけがない。

穂琥が認可の門を潜ったあの時は丁度、集神しゅうしんと呼ばれる期間だった。字の如く、神々が集う特殊な日。何百年に一度行われるその日ありとあらゆる事情があるにせよ、全神がその場に集結する日。よって、京鏡神もこの集いに抗う事は出来ない。故に自白するべき存在もあるために簾乃神を開放するためには丁度いい日だったということ。

偶然が重なって出来たこの時。神々の心が最も穏やかに最も静寂なこの時期なら簾乃神も京鏡神もその身を洗い落とせるということ。

「そしてこの集神で京鏡神様と簾乃神様がご対面となるわけだ」

「ど、どうなるのかな・・・」

「さあね。神々の心などオレなんかにはわからんよ」

薪はどこか冷たくそう言った。

「特別なルートって何？」

「気になるのか？」

「当たり前じゃない。そんな、神々のことをそんなに簡単に知ることはなんて普通出来ないでしょう」

「・・・そうだなあ」

薪は少しだけ考えたそぶりを見せてから小さく笑って簾乃神自ら教

えてくれたと白状した。当時の薪はそんな細かな神々の事情などわからない年頃だった。だから、名を言えば開放できるのならそうすると簾乃神に言い寄った。しかし、簾乃神はそうして、自分の身の上と状況を薪に話すことでそれを避けた。

集神でもない日に神々の前に京鏡神を出せばきつとただではすまなかったはず。

「たった一人、愛した神を傷つけられなかったのだろうか」
「うん……」

穂琥は一度薪の言葉に同意してから薪の顔を凝視した。それに不機嫌そうになんだと応えた薪。

「えっと。ごめん。もう一回言つて。薪とは思えない失言、じゃない……言葉を聞いた気がしたの……！」

真剣な穂琥の表情に負けて薪はこわこわもう一度同じ事を言う。

「え、いや、だから……。たった一人……。愛した神を傷つけたく……」

「え?!」

「なんだよ!」

穂琥の反応に流石に怒る薪。穂琥の耳に飛び込んできた薪とはとても思えない単語。薪が何を間違つても『愛した』なんて事を言うとはとても思えない!

「簾乃神様が言っていたことだけど……」

「え?! そうなの!? ああ、なるほど……!」

妙に納得した穂琥を薪は軽蔑のまなざしを送る。一人で勝手に納得している穂琥を放って置いて薪は持っている紙に視線を落とす。そこに羅列した文字とはいえない形のもの。これが神の世界での文字。伝えたい相手にのみその文字の解読を許す特殊な文字。それを読もうと目で追うと勝手に頭の中にそれが言葉となつて浮かんでくる。

―其の力見事なり。以後悪しき様に使わぬ様に願う。ぬしらを今後、出来うる限りで補佐しよう

紙の最後に書かれていた文。崇高たる神にここまで言わせることなど普通ではありえない。神とは敬いときに畏れ称える存在。願うならば此方から護つて欲しいと願い出るしかない。それでもそれを聞きとめてくれるかは神々のお心のみが知れること。にもかかわらず神自ら護ることを約束してきている。薪はそれがどこか畏ろしく思えた。

拍子抜けする穂琥の顔を見てため息をつく。そしてそんな穂琥に軽く制裁を加えて明日また修行をするから早く寝るようにと促した。

第二十話 密かな不安

絶えず頭の中で回る神の言葉。薪はそれを頭から無理やり振り払って軽くした打ちした。別に神に舌打ちしたわけではなく自分の弱さにだ。

「運命を導く神と崇められていた・・・っけな」

簾乃神のことを思いながら薪はそんな風に考えた。そんな風にぼうつとしていたから薪は見事に目の前の岩に気づかず激突する。

「いつて・・・え・・・。くそ・・・。」

神の予言とは大いに当たるものだ。それを直感と本能で感じ取って薪はため息をつく。

―災いが近づいている。あの娘に嫌な感覚を覚えた。ぬしらに幸運を薪は再び舌打ちをする。

翌日、薪はいつまでも寝ている穂琥をたたき起こして（おそらく部屋からは穂琥の絶叫が聞こえたことだろう）薪はさっさと部屋を出て行く。

寝ぼけながら降りてきた穂琥に早く顔を洗って来いと命じる。それに呑気の呼応する穂琥の背を見て薪は小さく息をつく。決して呆れているわけではなく。不安で不安で押しつぶされそうで。決してあつてはならないこと。

—まさか穂琥を失うことになったら・・・

薪はそんなよからぬ考えを頭から無理やり遠ざける。無い。ありえない。穂琥は絶対に護る。おのずと身体が震える。

洗面所から戻ってきて席について飯ぐと要求したが薪の返答が無いために薪を見ると薪が小さく震えているように見えて穂琥は目を疑った。薪が？不安を覚えた穂琥が薪に安否を尋ねようとしたがそんな不安、薪の一言で簡単に吹っ飛んだ。

「飯がまずくなるからもう少しまともな顔しているよ」
「んだところあああ！！！」

第二十一話 感じる疲労と目にする疲労

修行を再開させたわけだが、やはり認可の門を潜ってきただけあって今までの苦労はなんだったのかと疑問にすら思えるくらい楽々と進んでいった。そんな折に、薪と『眼』の話をするようになった。

「開眼って他にも色々な種類があるんでしょう？」

「そうだな」

「薪は何が使えるの？」

「ん？まあ、色々？」

「なにそれ」

まるで何かを誤魔化すようなその言い方に穂琥は口を尖らせる。薪が得意としてよく使うのは紅眼だったと記憶している。穂琥はそれを薪に言うともあ、そうだと返答をもらった。しかしどこか薪の応えに渋りを感じたので追求すると薪は諦めたようにため息をついた。

「いや、まあ。もう一個、得意なものはあるんだけどあまり使いたくないんだよ」

「え？得意なのに使いたくないって？」

「かなり危険なものでね。冷静でないときに使うとまずいんだ」

薪が出来る開眼の数はいくつかあるのを知っている。その中で最も使いやすく強いものがあると薪は話す。

「まあ、教えてやってもいいけど。絶対に口外するなよ？いくらお前でも口外したら本気でお前を消しにかかるからな」

滅多にない薪のこの手の脅しに穂琥は驚いて小刻みに何度も首を縦

に振った。

「オレの最高峰の力だと、自分では思っている」

薪のその口調はまるでこれから先、それを使うみたいに聞こえて穂琥は何だか嫌な気がした。

薪がその『眼』の説明を終えると穂琥は驚いて最初声も出なかった。

「な、何それ？！反則でしょ、そんな力・・・！チートだ！」

「ま、そういうなって。この力も結構レアだけどそれ以上にレアなのがあってオレが知る限りこの開眼に匹敵できる開眼をできたのは過去には母上しかいないと記憶している」

紫火の開眼は二つ。桃眼とそのもう一つ。しかし薪はそんな事はありえないから話はしないといってさっさと修行に戻ってしまった。どこか消化不良な気のする穂琥だったがそうなった薪に何を言っても回答は帰ってこないことを重々承知しているので仕方なく穂琥は修行に移る。

次のステップで穂琥は衝撃を受けた。魂石を体内から強制的に奪取するもの。しかし、これは下手すると簡単に相手を傷つけてしまったために力加減と操作が非常に難しいものだった。いくら認可の門を通ったからといってそう容易に出来るものではなかった。

薪が用意したダミーは全部で20体。傷つけないように相手を痛めないように魂石のみを奪取する方法。桃眼で見極めた道しるべを通してその魂石を真稀によって引き抜く。しかし・・・。

穂琥は5体を完全な戦闘不能にした。これでは再起までにどれほどの時間がかかるかわからないくらい。

「そ、そんな・・・！5体以外、全滅だなんて！！」

残った5体以外を全て完全に破壊してしまった。ちゃんと加減をしたのに。落ち込む穂琥に薪が優しく声を掛ける。

「お前にはちゃんと優しさがある。だから5体『も』残せたんだ」「え？」

薪は少しだけ影を落として過去を振り返る。薪が最初にこのダミーで修行したとき、このダミーの全てを薪は破壊してしまった。

「穂琥の持つ『優しさ』はオレの持つものとは格が違う。大丈夫だって。お前なら出来る。だって母上の子だろう？」

「薪・・・。うん・・・。わかった。頑張る」

「おう」

頭を薪に軽く撫でられて穂琥は少し照れくさそうに笑う。

そうして何とか修行を積み重ねていつてとりあえず使用できる段階まで来たと薪は言ってくれた。

「じゃあ、これで・・・」

「後は最終ステップだけだな」

終わりではないですね。穂琥は少しだけがっかりしながらも最後に何をやるのか薪に尋ねる。

「なあ、戦うつて何が必要だと思う？」

「え？」

唐突な薪の質問に動揺する穂琥。

「えつと・・・力？気持ち・・・？ん？何だろう？」

「まあ、今のお前には一番欠けているものだよ」

「え？何だろう・・・？」

どんなに修行を積んだものでも。どんなに才能があるものでも。身体を動かさぬものに勝利は無い。知識が勝ち抜くことが出来るのは子どもの遊びまでだ。実際に刀を交えることとなればそんな知識よりも何よりも大事なものが必要となるものがある。

「直感」

薪が言う。

「そんな！？私ってそれが一番縁遠いんですけど?!」

「だから一番欠けているって言ったじゃないか」

「う・・・」

直感こそが戦闘で最も大事なスキル。相手がどう動いて次にどうするのか。それを見極めることが勝利への架け橋となる。そしてその直感こそ、つけるには。

「ま、実践しかないわけだ。と、言うことで！」

急激に薪の声が明るくなったので穂琥は背中 of 辺りがぞくつとした。よく言う、嫌な予感だ。こういう直感ならきつと実戦を積んで知っ

ているのかもしれない。

「来い」

穂琥に向って剣を向ける薪に穂琥は己の『嫌な予感』が当たってしまったことにショックを受けた。

「実戦でのみ、直感は何得られるんだよ。そんなわけで今日からはオレが相手してやるから。かかって来い」

「そ・・・そ・・・そんな無茶なああああああ！！」

修行場にしばらく穂琥の絶叫が木霊するのです。

今までの修行って何だったのだろう。子どもの手遊び程度だったのかなあ。だって薪ったら容赦ないんだもん。

そろそろ日が落ちるといふ時間。穂琥がへばって修行は終了。穂琥はすっかりぐったりとしてしまつて部屋に戻るとソファにダイブしてそのまま寝息を立て始める。そんな穂琥を見て薪はため息をついてシャワーを浴びに行くのだった。

穂琥はわかつていないかもしれないけれど、この修行で誰が消耗するって薪に決まっている。穂琥が何度も破壊してしまうダミーを眞稀のみで生成しているのは薪であるし、コツを教えるために桃眼を開眼する訳だし、修行に付き合いつつも自分の修行もしなくてはならぬ薪が疲れないわけも無かつた。

シャワーから上がってきた薪にたたき起こされて穂琥もシャワーを浴びる。まるで何日もこの水に触れていなかったのではないかと思えるくらい気持ちよかった。よほど疲れていたんだと実感する

穂琥はのんびりとシャワーを終えた。

出てきて薪を探しても薪がないので不思議に思ってた。そしてふと、ソファに眼が言った。

「あれ・・・？し、ん？」

薪がソファで枕に顔をうずめて肩を上下に揺らしていた。

――・・・。

少し考える穂琥。そしてこの状況が何であるか、把握したとき一瞬驚いた。

――わっ！？薪、寝てる！？

そんな薪にそつと声を掛けるが薪は起きなかった。声を掛けても、いや、近づいても起きないのは薪とは思えない。もしかしたら失神でもしたのかと不安に思った穂琥はそつと薪の肩を持って仰向けにする。

今までに見たことの無い薪の寝顔。始めてみる寝顔なのでいつもどんな顔をして寝ているかわからないけれど、今回のこの薪は本当に薪とは思えなかった。

――な、なんか・・・可愛いんですけど・・・

そんな事を思いながら穂琥はソファの前に腰を下ろした。そしてやっとその事実気づく。

―あ、そうか……。疲れているのは薪のほうだったんだ……

穂琥を気遣って薪はそんなそぶり一切見せなかった。確かに薪は体力だって気力だってある。それでもこの二日、眞稀を多量に使っていたにもかかわらず疲れたの類の言葉は聞いていない。むしろ、大丈夫か、といった穂琥を労わる言葉だけ。

そのことに今まで一切気づかなかった自分に恥じた。自分だけ辛いと思い込んでいた自分が悔しかった。そんな思いも相重なって穂琥はそつと開眼する。そして薪をそつと包む。

「ん……。？どわぁ！？」

眼を覚ました薪が急に飛び起きたので穂琥は勢いで閉眼した。

「な、何よ！？せつかく癒してあげようと思ったのに！！」

口を尖らせた穂琥だったが、どうにも薪の様子がおかしかった。

「え……。あ……。いや。ゴメン。ありがとう……。でも大丈夫だから……」

「……。？大丈夫？」

「ああ」

短く応えた薪のその言葉に疑問を覚えながらも穂琥は薪の膝に手を置く。

「？」

不思議そうな顔をする薪から視線を外して穂琥は薪の膝に置いた自

分の手を見る。

「ごめんね。気づかなかったの。いつも薪ってば飄々としているから」

「別に良いって」

「よくないもん！」

急に穂琥の荒れた声に薪は驚く。

護られるだけじゃダメなんだ。自分だって護りたい。薪を護ることが出来る力が欲しい。それでもまだまだ全然駄目で薪の足元にも及んでいない。

「だから・・・え？」

言おうとした穂琥が言葉を切ったのは薪が頭に手を置いてきたからだ。穂琥を見るその瞳はなんと温かいのだろう。

「気にするなつて。穂琥。オレを護りたいって気持ちは素直に嬉しい。同情とかそういうのではなく、本当に。でもな。穂琥が護ることのできるものはそんなものじゃないんだよ」

「え？」

「よく自分で考えてみる。何が護れるか、何を護るべきなのか」

「うん・・・」

今の穂琥にこの時言った薪の言葉を理解する事は出来なかった。自分の目の前で精一杯の穂琥には。薪の言ったその言葉の意味を知ったとき、きつと穂琥は自分の力を完全に使えるときだろう。そしてこの時から既に穂琥の中に眠るその力に気づいていた薪に素直な驚きを覚えることだろう。

第二十二話 心の悲痛と叫び

実戦訓練を始めて数日。薪から告げられた言葉に穂琥は震えていた。夢であつて欲しいとどれだけ願ったことか。夢だと願うほどそれは果てしなく現実。薪、もう少し待つてよ。いくらなんでも早すぎるよ。

突然告げられたこと。昨晚、疲労していた薪を治した。完全に回復させる事は出来なかった。薪の持っている疲労は予想以上に酷い。そして今朝、そんな薪の顔を見て余計にそう思った。それなのに。

「明日、奴らの本拠地に行く」

あまりに突然言われたその報告に穂琥は愕然とした。つまりは争いが起こるということ。まだ完全に回復できていない薪と、覚悟も何も出来ていない穂琥が。一体何が出来るというのだろう。生半可な気持ちで望めばそれは死を意味することとなる。しかしそれでも薪はもう明日にはという。一体どうして。

震える穂琥の心は痛いほどよくわかる。それでももう動かなければならない理由が出来てしまった。まず、大本の理由として主と呼ばれていたやつの下に麻臨が存在すること。麻臨は使い方を誤れば悲惨な事態しか生まない危険な宝玉。地球はなんと脆いことか。麻臨の力がもし暴発でもすればきつと簡単に壊れてしまう。

だから穂琥の心がどれだけ揺れていようが、もう、手を出さないわけにはいかない。薪は心底思う。連れてくるべきではなかったと。そしてその思いを強くさせているのがあの簾乃神の言った言葉。

薪の家には眞匏祗の世界とつながるゲートが存在する。そのゲートで穂琥を返そうと思った。しかし、事もあるうか、ゲートが閉じて開かない。穂琥を返すことも出来ない状況になってしまっていた。そのことに薪は絶望した。

穂琥が震える心なら薪はおそらく不安の心。果てしない、今までにかんじたことの無い不安が薪を襲っている。万が一にも、穂琥が手元から離れるようなことがあったら。

――いいや、そんな事考えていたら駄目だ。話にならない

薪はその悪い考えを何度も無理やり頭から遠ざける。穂琥を失うことなど……。

第二十三話 命の意味するもの

支度をしている薪の背に声を掛ける。薪は振り向かずそのまま
てきとくに返事をする。

「どうして命ってあるの？」

穂琥のした突然の質問に流石に薪は振り向いた。

「え？」

薪の返して来た言葉を穂琥はそつと胸に抱く。

命とは掛け替えの無いものだ、大切なものだ知っている。そのつもりだ。それなら何故我々の命とは簡単に費えてしまうのだろう。どうしてこうもあっさりと消え去ってしまうのだろう。生きていて命を持っている。持っているときはそれは思った以上に重く、いつまでもそこにありそうな錯覚を得る。しかし、亡くしてしまう時は一瞬にも満たない。この世に生を受け燃ゆる炎を灯して。それでもその炎は消えるときはふっと一瞬にして姿を消してしまう。残るのはその煙だけ。そこに炎があったという形だけ。

「どうして生きている意味があるの？ どうして命って大切ななの？」

「そんな事、オレが知るわけないだろう」

薪は顔を前に戻して以外にもあっさりとそう応えた。穂琥はその回答にどこかがっかりしながら薪の背を見た。

「ただ・・・」

薪はそのまま言葉を続けた。

「だから命は大切なんじゃないのか？簡単に壊れるものほど大事にするじゃないか。消えてしまっから楽しいんじゃないか」

薪の言ったことの意味はなんとなくわかる。それでも命とは脆すぎる。どうしてこんなにも大切にしなければならぬのだろう。それがわからない。

「オレが思うに、命そのものに意味は無い、ってことかな」

予想外の薪の発言に穂琥は目を見開いた。あれ程までに命を大切にしていた薪が言うような言葉には思えなかった。

「命に意味があるのではなくてその命が生む夢や愛に意味があるんじゃないかね」

穂琥はその言葉を聞いてはっとする。

「私はあなたを愛します、って台詞とかみたいになさ。別に恋愛どうこうだけじゃなくて家族や友、それらに向ける愛情とか。それが大切なんじゃないかな。だからその夢や愛を受け継いでこうして生物は繁栄していくんだろう？」

命は呆気ない。それは確かに変わらない事実。でもその命が強固で永遠であつたなら一体生物がこの世にいる意味は何になる。その者が朽ちてしまっからそれが育んだ愛や夢、希望が朽ちることなくこの世界を包み込んでくれるのではないだろうか。

薪は昔、その手で夢も希望も愛も自分のその手で消してしまった。だから失いたくない。もう二度と。

「でも・・・それでも・・・死んでしまうのは辛いよ?」

薪はそつと振り返つて穂琥の目を凝視する。今までに見たこと無いくらい深い瞳の色に穂琥の心は震える。

この世に生まれ出た以上、必ず皆平等に命が尽きる。しかし生まれたからには愛を育み、希望を与え、与えられ。夢を抱いてそれを語る。それには命が必要で器が必要。それらを壊してしまうことがあつてはならない禁忌であるのだろう。

「意味が無いといったら悪い言い方だけど、つまりは大切なのは『心』って言いたいだけ」

薪の目の奥が震えているように穂琥には感じた。薪もどこかで怖いのかもしれない。いや、そもそも薪がこの戦いを怖くないとは一言も言っていない。もしかしたら『失う怖さ』を知っている薪のほうがかこれから行われる争いを恐れているのかもしれない。

「怖いから・・・失われる命なんてあつていいのかな・・・って・・・そうだな。悪いな。ごめん」

薪が小さく謝る。それに驚いて穂琥は聞き返す。すると薪は視線を落として申し訳無さそうな顔をする。そうした薪から聞いたのは穂琥を眞匏祗の世界へ返したいということ。それでもそれが出来ないという事実。

「悪い。本当に。そもそも連れてくるべきじゃ無かつたよな・・・」

本当にごめ．．え?!」

謝りかけた薪が驚いて言葉を切ったのは後ろから穂琥が抱きついたからだ。そして耳元で震える穂琥の声が聞こえる。小さく何度も謝る、か弱い声が。

「ごめん。私のほうこそ。争いが嫌いなんで薪が一番わかってることだったよね。ごめんね．．．。こんなに急にやるって言ったのにも理由があるんでしよう?」

「．．．麻臨を、奴らが所有しているらしい、って言う噂をね」

「．．．うん。そうだね。早く取り戻さないかね」

穂琥の言葉に少しだけ温かみが戻る。不安が少しだけ消えていく。そんな穂琥の声を聞いて薪はより一層の不安を高める。

「オレは．．．」

どうしたらいいのだろう? そんな事、穂琥に言うわけにもいかない。それでも誰かにこの慥夸という重圧な責任を擦り付けたいと思ったことが過去にどれほどあっただろうか。それでも今、こうして穂琥を前にして自分が慥夸でよかったと時折思う。慥夸ならこの世界を変える力を有している。いつかこんな苦しい思いをしないですむ世界を作りたい。生きることの苦しまぬ世界を。

「ねえ。薪にとっての夢や希望って何?」

「オレの．．．?」

「そう」

少し明るく穂琥の声が薪の声に被さる。薪はいまだに背中にくっついていて我が妹の顔を見る。そして小さくため息をついた。

「言うまでもあるか？」

「え？」

「オレの夢と希望？そんなの、お前に決まっているじゃないか」

薪のその声は自身に満ちている。迷いなんてものがあるわけもない。それが嬉しくてたまらない。穂琥はさらにぐつと薪に抱きつく。そして嬉しさを一心に籠めて薪へ言葉を送る。

「私と同じだ！私も薪が夢と希望、生きる糧だもん」

その言葉に薪がどんな顔をしたのか穂琥には見えなかった。それでも心から感じる眞稀の感じに柔らかいものを感じていた。

「なあ、穂琥」

「何？」

薪が少し声を低くして名前を呼んできたので少し驚いた。

「お前、明日、ここに残れ」

「え？」

薪はただひたすら穂琥を失うことを恐れている。だから、この家に残って戦闘が終わるのをここで待っていると。そんな薪の言葉を聞いて穂琥は胸の奥がひどく熱く感じた。

「今、決心付いた」

「え？」

穂琥が薪からさっと離れて嬉しそうに言った。薪は首をそちらに向

けて穂琥を見る。

「戦鬪で私に薪を護ることなんて絶対に出来ない」

「だから・・・」

「出来ないけど私は薪の心を護る！だから明日は連れて行って」

穂琥はふふつと嬉しそうに笑った。それがどこか薪の心を痛めた。それと同時に薪の心に何か暖かいものを落とした。

「馬鹿だよな・・・」

「何それ！せつかく私が・・・」

「いや、お前じゃない」

「え？」

薪は自らを卑下して笑う。要らない心配をしたと笑っている。薪は小さくいつもより少し弱い声で一言ぱつりと言った。それが穂琥には聞き間違えではないかと思うくらい意外な言葉だった。

第二十四話 脆いからこそその明かせぬ心

―怖かった

薪が漏らした一言に穂琥はただぼうつとたっていることしか出来なかった。

失う怖さは痛いほど味わった。だからもう二度と何も失いたくはない。だからがむしゃらになって必死になって何もかもを護ろうとする。それが例え敵であつたとしても。

穂琥にとつての全て。穂琥にとつての勇者。穂琥にとつての主人公。絶対的な存在。誰にも負けることもなくていつでも平然としていられる、そんな存在だと思っていた。でも違うのだ。彼もまた、一つの生物。全てのものに喜びを覚え万物に恐怖する。それは誰もが平等に等しく存在する。

一度でも死という恐怖に駆られてしまった薪にその恐怖の闇から逃れることは出来ないのだと。それが痛感した。

ずっと何も語ってくれなかった薪がそうやって穂琥に語ってくれたことは素直に嬉しかった。しかし、『穂琥』という存在がここまです薪の心をつぶしてしまっていたことを知らなかった。穂琥は薪に依存している。自分でもそれは自覚しているつもりだった。でも、それはまた薪も同じだったのかもしれないと心のどこかで思った。互いにたつた一つしか無い血の繋がり。大切にしたいと思うのは当然の心なのか。

薪を取り巻く死の恐怖。薪自身、己の命が費えることになんら恐怖は抱いていない。ただ、それを目の当たりにする羽目になる他者において薪は死の重みを実感する。

―命を懸けてお前を護る

よくある名台詞のシーン。この言葉を薪はひどく羨んでいた。命一つかけただけで護ることが出来るというのなら好きなだけかけてやる。でも、そんな単純なものではない。今、ここで命をかけて敵と刺し違えたとしても、次の敵の襲撃に護ることが出来ないではないか。この世の中に完全な平和など存在しないことを薪は知っている。そして何より。薪の命はすなわち穂琥の命。薪が命を懸ければ穂琥も同様に掛ける羽目になる。それではだめなのだ。ならないのだ。

薪に寝るようにと告げられてベッドの上でさまざまのことを考えていた。薪に見捨てられてしまう日が来るのではないかと内心恐怖に駆られていた。でもそれはどこかで薪も同じだったようであまりと苦しみと同時に穂琥を襲った。

薪が語った衝撃的な言葉に今でも穂琥は信じられない気持ちが胸にあふれていた。

薪も同じ。穂琥と同じ。最近、桃眼を開眼して穂琥にはぐんと力がついた。そしてそれは同時に自立を意味する。力を必要としなくなった穂琥が薪の元から離れるのではないか、そんなことを時折思ったことが薪にもあったらしい。まさか、薪にそんな弱く思う心があったなんて驚きだった。いや、違う。弱いなんて言葉は間違えているのかもしれない。そういう気持ちをきつと弱いとは言わないのかもしれない。

穂琥は薪をずっと見ていく。今までずっとそうして薪の背中を見てきた。だから今までもこれから、ずっと。

薪は部屋に戻って後悔に苛まれていた。こんな決戦前に穂琥にこんなことを言っただうする。同情でも買いたかったのか。薪はただ頭を抱えていた。こんなくだらないことを言っただ穂琥を傷つけたかもしれない。不安にさせたかもしれない。どれだけ自分が脆く愚かで未熟であるのか、思い知らされた気分だった。あんなことを今の穂琥に言っただよかったのだろうか。

そんなこと、誰にも答えがわかるはずも無い。言っただほうも、言われたほうも。どちらも。そして天を崇める神々も、きつとわかるような答えではなかったのだろうか。

第二十五話 決戦

ふつと目が覚める。それでもまだ頭はぼんやりとしていて完全に覚醒はしていない。そんな状態で、ふと隣に気配を感じた。誰の気配だろう……。そんなことを考えている間にだんだんと覚醒してきた意識の中でその隣の気配が先ほどから身動きしていないことに気がついた。

穂琥はゆつくりと体を起こすと、そこには薪がいた。ベッドに向いて床に座って諸手を組み、その諸手で出来た穴に顔をうずめている。

「薪……」

穂琥はそつと小さな声で呼びかける。薪はわずかに声に反応して身動きする。すっぽりと入っていた顔が少し腕の中から出てきて薪の表情が見えたとき、穂琥は一瞬ドキツとした。そして心がどこか痛いと感じているような気がしながらそつと薪の顔に手を伸ばす。

「ああ……。薪も怖いんだよね」

そつと薪のほほに伝っていた水滴を指で拭う。

「ん……」

触れたことで覚醒した薪が頭を起こした。

「あ……おはよう」

珍しく寝ぼけているような雰囲気では穂琥は穂琥に挨拶する。それに穂琥も答えた。

完全に準備を整えた薪と穂琥。外に出ると外はまだ朝靄がかかっており、本来なら人々がまだ夢の中でうつらうつらとしている時間だろう。朝の空気が漂い、どこか肌を刺激する寒気に穂琥はぶるつと身震いをした。

「ねえ」

朝の空気を切りながらずっと抱いていた疑問を薪へぶつける。

「薪は・・・戦うの、怖い？」

「当たり前だろう。でもやらなきゃいけないから。そうでなくては滅んでしまう」

薪の声が静かな道に木霊して吸い込まれていくようだった。その木霊が完全に朝靄の向こうに飲み込まれてから薪は穂琥にたずねる。

「聞きたいことは何だ？」

薪に言われてドキツとする。薪はわかっている。穂琥が本当に聞きたかったことはそれではないということ。穂琥は少しだけためらってそつと薪にたずねる。

はて、薪は自分の力をどう思っているのだろうか？自分の力に恐怖したことは無いだろうか？

穂琥の質問に薪は少しだけ視線を落としてから穂琥に視線を戻して言い放つ。

「怖い？そんな風に思ったことは無いな。オレは別にこの今有している力を才能で持っていたものではない。そらまあ、多少の才はあったかも知れないけどな、慥誇だし」

薪は最後を少し早口で言った。

薪の持つているこの力は確かに巧伎や紫火の血を受け継いで強大なものかもしれないけれど結局のところほとんどの力を薪は努力のみで手に入れている。普通では考えられないくらい血のにじむ努力の元。その努力の中には巧伎による強制も入っているのだが。

そして今ある力に自惚れることは無い。そうやって努力で手に入れたのなら自惚れてもおかしくないかもしれないけれど薪にそれは無い。それはなぜか。簡単な話だ。

「限界を超える」

「え？」

「オレはまだまだ強くなる。まだ護りたいものだってろくに護れてなどいない。だからもっと強く」

薪の声に張りを感じた。己に打ち勝つこと。それが薪の目標であつて力の上限。

「ただね」

薪が妙に言葉のトーンを落としたので気になってその薪の言葉に耳を傾ける。

「唯一つ。怖い力がある」

今までの話とは裏腹のその言葉に穂琥は妙に嫌な予感がした。

薪が怖いといった力は以前、話してくれた開眼のことだった。これだけはコントロールを失ったときの恐怖を覚えるという。

「さすがになあ。あれはオレでもきついからな。己の力に恐怖するって言うのはつまり制限が出来なくなるからだろう？オレはその開眼だけ、コントロールを失う可能性があるから怖いんだよ」

薪は少し悔しそうに言った。

「何で急にこんなこと聞いたんだよ？」

薪がたずねてきた。話に区切りがついたからだろう。いつか聞かれるかと思っていた穂琥としては回答に少し困った。答えるつもりはあまり無かった。そんな穂琥の様子を悟ってか薪はそれ以上の追求はせずにその質問を打ち切った。

移動をするために薪につかまる。

これから起こる悲劇。穂琥の心が悲鳴を上げる。そして何より薪の心が限界を超える。押さえ込んでいた我慢の鎖が音を立てて砕け散る。鎖で縛られていたものが巨大な音を立てて外に湧き上がってくる。そんな薪を穂琥は目の当たりにする。経験したことの無い驚きと恐怖。そして悲しみが穂琥を襲うのだった。

第二十六話 争いを避ける理由

移動した先は荒野だった。人に見つかってしまつてはひとたまりも無い。ゆえに眞稀でその全貌を隠しているのだ。開け方を疑問に思つた穂琥だったが、薪は向こうが招いている以上、勝手に開いてくれると言つ。

薪の言つたとおり、何も無い空間が勝手に歪んで誓茄が中から出てくるのが見えた。

「会いたかつたわ！中々外に出してくれなくてね」

誓茄は薪を見て嬉しそうに笑つた。薪は主とやらに会わせてほしいというと誓茄は少し悔しそうに笑つた。

「あら、もう主の話？せつかちね」

「早く用を済ませろ」

中からさらに圭が出てきて誓茄を不機嫌にさせた。わかっていると誓茄は機嫌悪そうに答えると戦闘態勢に入る。

「用？」

「以前言つただろう？その娘を預けてほしいと」

圭が冷たく言い放つ。薪が額に力を入れて渡すわけが無いと答える。

「ええ、大切なのはわかるわ。でも奪うの！」

誓茄が刀を取り出して薪に飛び掛る。薪は一気に刀を二本出して一

本で誓茄をはじき、気配なく近づいていた圭をもう一本で弾き飛ばす。

「鼓斗、斬れ！」

吹っ飛びながら圭がそう叫んだ。ふつと後ろに眞匏祇の気配。鼓斗が刀を振り上げているのだった。後ろを取られたのもかわらず薪は軽々と鼓斗をはじき返した。空中に飛ばされた鼓斗はふつと回転して地面に着地した。

「へえ。いい刀だな」

「ああ、舞姫と散姫だ。どちらも美しい『姫』だろう？」

薪の言葉に鼓斗はのどを鳴らすように笑った。

「確かにいい『姫君』だなあ」

「でもさすがに空。いきなり序盤で己の所有する刀を全て見せてしまうなんて」

薪の持つ刀を見て圭が言い放った。それに無言で返す薪だったが、誓茄が高く笑った。

「あら？そうかしら？彼は強いわよあ？二本だけなんてあり得ないわ」

眞匏祇は己で有する刀の数には限りがある。別に一祇が有している刀に限りがあるわけではない。ただ、手荷物としてもてる刀に限りがあるというだけのこと。簡単に言えば人間が筆箱に入れて持ち歩ける文具の数に限りがあるように眞匏祇にも一度に持てる刀に限りがあると言つこと。

本来なら大体1本から2本。多ければ3本持つことも可能だが。慇懃ともなれば話は別だ。慇懃くらいになればたやすく6本は所有できる。しかし、それがばれてしまつては慇懃とばらすことになる。それは出来ない。

ゆえに、露見できる刀は3本まで。その場に合わせて刀を選ぶ必要がある。そして今一気に二本出したのは相手の数が多いからだ。そして何より今出した『姫』の刀は薪の意思とは関係なく相手を迎撃できる特殊な刀。無論、薪の真意にそぐわない行為はしない。それがために突っ込んできた誓茄、圭、鼓斗に怪我の類が無いのだ。

穂琥を奪うまで主は顔を出さないらしい。全く腹の立つ相手だ。穂琥に恐れを感じているのだろうか。だとすれば大したものだ。穂琥の底知れぬ力を感知したことになる。だとしたらなおのこと、穂琥を奪わせるわけには行かない。

目の前に刀を構える薪。そしてそれ見ている穂琥の心に闇が陰る。争いを嫌った薪。その理由。無論、傷つけて失いたくないということは知っている。しかし、そういうことではない、そういう問題でもないということを穂琥は思い知った。

以前、台所で指を切ったことがあった。眞菟祇のクセに包丁ごときで指をざっくりと切るなど何事だと怒られたが、そう言いつつも治療をしてくれた（本来なら自分で治せるがわがままを言つて薪に治させたというのが妥当）薪を見て穂琥は首をかしげたことがあった。このとき初めて薪の療蔚の技を正面から見たのだが、薪の目が明らかに泳いでいるような気がしたのだ。

治してくれた後は傷口も何もなく、怪我をした痕跡が全くなくな

っていたので気分が上々だった。しかし、やはり気になるのは薪の反応。慣れるはずの無い療蔚の技はやはり堪えるのだろうか。

「ねえ・・・まさかとは思うけど・・・」

穂琥が途切れながらに薪にたずねる。

「血、怖い？」

穂琥の放った言葉に薪は不機嫌そうに目をそらした。あ、凶星だ、と思った穂琥だったが小さく不機嫌そうに怖いと薪が言ったので穂琥はぎよっとした。

「当たり前だろう。トラウマだ、馬鹿。餓鬼のときにどれだけ血を浴びたと思ってんだよ」

穂琥はそれを聞いてぞっとした。そうだった。わずか三歳という幼い薪の苦痛の出来事。慇懃を潰そうと企んだ眞匏祇の眼に捕まりやりたくも無い殺害を何千何万と犯してしまった薪にそういった類の恐怖心があってもおかしくは無かった。

それでも過去に幾度も薪は先決を浴びる羽目になっている。その全て、何事も無いかのように振舞っている。以前、穂琥の初めての実戦に出たときもそうだった。

「ばーか。怖いからに決まっているだろう」

「え？」

「はつきり言うけどね。この世の中で起きること全てを含んで何が怖いってそりゃあ穂琥よ。お前を失うことだ。それに勝るものは無い。だから血を見る羽目になってもお前だけは護るんだよ。わかる

か？」

「は、はい・・・」

「つつても、血が怖いのは事実です。認めます」

そんな会話をしたのを思い出す。そう、薪は血液恐怖症だ。おそらく穂琥が目の前にいたからあの程度の震えで済んだのだろうが、もし、気を抜いてもいいようなら昏倒していてもおかしくないくらいの恐怖を『血』から感じるようだった。

血が怖い。それはすなわち命を削ること。だから怖いのだ。そしてあのときの惨劇を脳裏に思い浮かべる羽目になるのがさらに一層恐怖なのだろう。

だから怪我をしたら治す。そう決めていた。でもやっぱり薪はすごい。これだけ刀を振るっているのに未だに誰も傷ついていない。

「ねえ。馬鹿にしているの？」

圭が薪に尋ねる。鼓斗のほうも斬らないとはどういうことだと尋ねてくる。如何に敵といえど殺したくは無いと薪が答えると誓茄が笑い声を立てた。

「その心がけ、立派だわぁ！尊敬する」

「偽善事だろう」

鼓斗が誓茄の言葉にかぶせるように言う。誓茄は少しだけ不機嫌そうに鼻を鳴らした。

圭が刀を振るってくる。薪はそれをはじきながら再び襲ってきた鼓斗と誓茄の刀も受け流す。その華麗さに見惚れるものがある。誓

茄が固執して薪と戦いといった意味がようやく理解でき始めた圭と鼓斗だった。

穂琥はただ見ていることしか出来なくてなんともどかしい気分になった。結局、自分には何も出来ないのかもしれないと思った時、途方も無い悲しみが込み上げて来るようだった。そんな折、ふっと風が吹いてそれが急に突風と化した。その勢いに押されてよろめいた。よろめいた足の先に地面は無かった。大きく裂かれた地面に溝が出来ている。穂琥は流れるように底に落ちて行ってしまった。

「穂琥!!」

薪が叫んで穂琥を助けに行こうとすると目の前を鼓斗に邪魔される。

「あのまま我が主の下へ。邪魔はさせない」

「邪魔しているのはどっちだ!」

薪は勢いよく刀を振って鼓斗を飛ばす。しかしもう遅く、裂けた地面はどこにも無かった。

「手合わせ、願う」

鼓斗が低くうなるようにそう言った。薪は仕方なく刀を構える。

―穂琥・・・無事でいてくれ・・・すぐ・・・すぐに行くから・・・!

薪の刀を握る手に自ずと力が入る。誓茄と圭はすでに主の下へ戻ったらしくこの場にはいなかった。薪は鼓斗を強く睨む。そして小さくため息を吐いた。

「わかった。ならオレも少しは本気を出そう」

「替装、するのか？」

「ああ」

薪はふつと瞼を閉じて眞稀を込める。すつと小さな風が起こり薪の服装が変わる。

もとより戦うつつもりは無い。今はただ、穂琥を探すことだけしか考えていない。ならばここはこいつと刀を交える必要は無い。散姫をしまうと舞姫に集中する。そしてその集中して溜めた眞稀を勢いよく爆発するように放出する。放たれた眞稀は地面をえぐり大きな爆発を引き起こした。

「くっ・・・!!」

鼓斗のうめき声。鼓斗は眞稀を高く上げ、辺りを覆っている土ぼこりを振り払った。そこに薪の姿は無かった。

「逃がしたか・・・」

口惜しそつに鼓斗は表情をゆがめた。

穂琥。無事でいてくれ。ただひたすらに切にそう思って走る薪。

第二十七話 暗黒の世界の紛い物

どの位走ったか自覚が無い。穂琥の眞稀を探してこうして駆けているというのに穂琥の眞稀を見つけることが出来なかった。桃眼を使えば見つけることが出来るかも知れないけれど、今、それを使って力を消耗するわけには行かない。なんたって薪は戦鎖。普通の開眼よりも桃眼を開眼するほど疲れるものは無い。

「穂琥・・・」

ひたすら薪は走る。己の感覚を信じて。

薪が走っている時、穂琥は闇に埋もれていた。

「ここは・・・どこだろう?」

真っ暗で何も無い。光の一筋も無い闇が全てを包む場所。そこをひたすら歩きながらなぜ自分がこんなところにいるのかわからなくて記憶を思い起こす。地面が割れて落ちて。気がついたらここにいた。記憶をたどっても意味は無かった。

暗闇に溶けた身体が冷えて浸食されていく感覚を覚える。その恐怖が穂琥を震えさせる。

―薪・・・助けて・・・

穂琥は蹲って眼を強く閉じるのだった。

ふつと暖かさを感じて眼を開ける。そこには見慣れた明るい風景。

「え・・・？城？」

そこは穂琥が生まれた場所。眞匏祗の世界。呆氣にとられていると薪の呼ぶ声がして振り向く。

「なにぼけつとしているんだよ」

「あれ？私、地球に・・・」

「はは。もう終わって帰ってきたんだ。お前がやったんだぜ？オレも驚いたよ」

「え？」

薪は明るく話す。その笑顔がまぶしいくらいに。

「何だ、覚えていないのか？」

「・・・う、うん・・・」

薪は困ったように笑った。

暗闇にとらわれた穂琥を何とか助けようとした薪ではあったが力及ばず救出することが出来なかった。そんな時、膨大な力を発して穂琥は闇から生還した。そしてそのまま敵を叩き、鎮圧に成功した。無論、麻臨の奪還にも成功した。

「私が・・・？」

「そうだよ。すごかったよ」

全く記憶に無いけれど、無意識下でそれらを成し遂げたのならあるいは。

「そこでな、穂琥。お前はもう自分だけの力で生きていける」

「え？」

「だからもうオレの力なんて必要ないんだよ。自信持て？」

薪は相変わらぬ笑顔でそういう。穂琥の心がざわついた。

「だからここから出て行け。お前だけで十分生きていけるから」

薪の言った言葉に穂琥は愕然とした。いつまでも一緒にいてくれると言ってくれたのに。離れることなんてあり得ないって……。薪はさっと踵を返して歩き去ってしまう。

ふっと気がつく。辺りは急に暗くなり闇に飲まれた。一体どういうことだ？ 考えて穂琥は辺りを見回す。そしてまた急に光が現れて城にいる。

「これ・・・誰かの術？！」

穂琥はこれでやっと気づいた。自分は誰かの術に落ちてしまっているのだと。

穂琥は地面に膝をついて耳を塞いで必死で頭を振っていた。何度も同じように薪に拒否される映像。見捨てられておいていかれる。いくらそれが紛い物であってもそれが穂琥に堪えないわけがない。震えてもうやめてほしくて。涙がこぼれる。そんな時。明るくなくて暗闇の中。薪がこちらに走ってくる。

「穂琥！」

「薪！！助けて！！」

必死で手を伸ばす穂琥の手前で薪は足を止める。それから鋭く突き刺すような冷たい眼を穂琥に向ける。

「弱いなあ。こんな簡単な術にも引つかかるなんて。やっぱりお前、才能ないよ」

穂琥は目の前が暗くのを感じた。

―ああ、この薪も偽者だ。敵の作り出した幻術だ。穂琥はひたすら耳を塞いで否定をし続けた。

「邪魔なんだよ」

「消えてしまえばいいんだ」

「所詮はその程度だろう？」

次々と木霊する薪の声に穂琥は涙が止まらなくボロボロとこぼれた。悲しみと恐怖。心が崩壊に向かう。くつと力を込めて刀を取り出す。そして目の前の幻術に刀で切りかかる。それは影となってすっと消えた。あちこちにいる薪の偽者を切る。

「何するんだよ！」

「待てよ！オレは本物だ！」

「邪魔なんだよ！」

「気づけよ！幻覚じゃないんだ！」

「弱いくせに！」

偽者だってわかっているんだ。だからもうやめて。それ以上薪の言葉汚さないで。

穂琥はただむやみに刀を振るった。

第二十八話 心の重さ

穂琥・・・お前はどこにいるんだ・・・!?

ひたすら走り続ける薪。途中途中で眞匏祇に出会ったがその全てを突き飛ばして今走っている。ただひたすらに。ただ下に階段を駆け下りていく。さすがの薪でも息が上がってきた頃、薪はあまりの衝撃に足を止めた。

「ほ、穂琥・・・?!」

今感じた馬鹿に大きい眞稀。確実に今のは穂琥のもの。やっと感じるこの出来た穂琥の存在だが今の眞稀からして薪に安心感と安堵感を与えてはくれなかった。

階段を下りると広いロビーのようなところに出る。そこに穂琥の眞稀を感じたから。暗がりでも周囲は見づらいが確実にこちらに歩いてくる影がある。

「ほ・・・く・・・?」

確実に穂琥の姿をその眼に捉えたとき、薪は絶句した。

哀れな我が妹の姿。目に生氣はなく、刀を地面に引きずってこちらに歩いてくる。そのまとう空気は紛れもなく殺気。薪はピリッとしたその感覚に冷や汗をかく。穂琥がこんなに大きな殺気を放つなど今までにないし、これからもないと思っていた。一体何が。

「くそ・・・術中、ってことか」

穂琥に向けて刀が振るえる訳のない薪は握っていた舞姫を少し下げる。

「ようこそ、我が城へ」

聞きなれない声でしたのでそちらを睨む。おそらくこの声の主こそ『主』と呼ばれていた男だろう。うつすらと浮かび上がる影。それに薪は殺気を込めて睨む。

「我の名をお伝えしなかった事を深くお詫びいたします。我は李湖南^なと申します」

「お前・・・以前に会ったよな？」

「さすが、スウエラ様！いえ、シン＝フォア＝エンド様、とお呼びしますか」

影の口元がにやりと釣りあがったのが見えた。のどを鳴らすように笑う。

「穂琥に何をした」

「何、少しいじっただけです。簡単ですね？心に迷いや不安があるとそれを少しつつくだけ簡単に壊れてしまふ。いや、実に脆い」

「穂琥を返せ・・・！」

薪の言葉に李湖南はただ笑うだけ。

「ただの手ごまに過ぎませんよ。でも貴方は違う。配下、いえ、仲間になつてはいただけませんか？そうして頂ければ穂琥様も無事にお返ししましょう」

「承諾すると思っているのか？」

「でしょうね。穂琥様を無事に返すという保証もないですしね。良いでしょう。ではまあ、死合いしてもらいましょうかね」

李湖南はただ笑う。薪はふっと殺気の間受を得る。そして下げていた舞姫が勝手に振りあがる。

高い金属音。どこまでも洗練とされた美しいその木霊する響き。しかしその響きは死の誘い。刀と刀が激突する命の駆け引きの音。

穂琥がすさまじい勢いで刀を振るってくる。こんなに殺意を抱かせているものは一体何なのか。

「穂琥……！目を覚ませ！穂琥！」

「いやだ……全部嘘だ、何もかも……！これは薪ではないんだ……！！」

ただひたすらに否定を繰り返す穂琥の目にもはや正確にものを推し量る力など残っていないそうには見えなかった。

ひたすら防御に徹する薪と攻撃を繰り返す穂琥では分が悪すぎる。圧倒的に不利なその状況に薪はついに右腕を切り裂かれる。飛び散る鮮血がいやに美しく見えたのはなぜだろうか。

全てが幻。だからその全てを壊すんだ。何もかもなくなってそうしてやっと会えた薪がきつと本物だ。だから今は目の前に現れるものは全て斬る。何を言われても。

一体どうしたら正気に戻すことが出来るのかわからない。李湖南を叩けば何とかなるだろうか。いや、穂琥の目からそういう気配は感じない。最早これは暗示の類。穂琥自信に何とか正気に戻って

もらわない限りきつと無意味。故に薪は今ひたすら穂琥の刀をよけることしか出来ない。穂琥の刀に迷いはない。いつもこのくらいなら自信だつて持てるだろうにと皮肉な笑いを浮かべる薪。

どれだけ斬られた事か。ひとまず慙夸紋だけは斬られないようにと必死によける。あそこにかすればそれだけで致命傷になる。それが巧伎の残した薪への呪い。そうやって庇っているものが多すぎる薪に迷いのない穂琥の刀は簡単に切り裂いてくる。

薪の身体はすでに傷だらけだった。もう早く動くことはきつと出来ない。今、無理に治療してもきつと意味はない。とにかく穂琥を正気に戻すことが最優先。

穂琥にかかっている暗示のようなものが何であるのか、それはわからないけれどおそらく目の前の薪を薪ではないものだと認識させられていることが原因だろう。ならば自分が本物の『薪』であるということさえ穂琥にわからせることが出来ればきつとどうにかなるかもしれない。そう思って薪は思考を始める。いかにして穂琥の意識を覚醒させるか。

「何・・・!？」

突然李湖南が薪と穂琥の間に割って入り薪に刀を振るった。そのあまりの速さに薪は驚いたが別に李湖南が早いわけではない。穂琥によるダメージで薪が遅くなっているだけだった。

「甘いですね。前慙夸とは大違い、ですね。これも大切な妹君を護るため、ですか？」

李湖南の腹の立つ笑いに薪は苛立ちを覚える。李湖南は急に屈むと

すごい勢いで突っ込んできた。

気味の悪い感触が右の脇腹に走る。命を掠めるような気持ちの悪い感覚。李湖南の刀が薪の脇腹を突き刺す。そして勢いよく引き抜く。少しだけふらついた薪は何とか体制を整える。あと少し。あと少し上であつたなら魂石に当たっていた。薪は貫かれた場所に手を当てて肩で息をする。

李湖南が穂琥に笑いかける。しかし穂琥の目にきつと李湖南は移っていない。ただ恐怖した穂琥の目に映るのは『紛い物の薪』だけ。

「くそ……。お前、穂琥に何をしたんだ……。！」

薪の声を聞いて李湖南は面倒くさそうに笑ってため息を吐いた。

「先ほども言いましたでしょう。心の隙間を少しついただけ……。それ以上ごまかすな！何をした！」

薪の怒号に李湖南から笑みが消えた。

「ふう。如何に慇懃といえどやはり子供は子供、かな？良いでしょう。お教えしましょう。この娘にとつての恐怖。それは貴方を失うこと。見捨てられること。だからその苦痛に浸っていたただいたまで。何度も貴方に見捨てられる幻覚をお見せしたままですよ」

李湖南の言葉に薪は手が震えてくるのを感じた。穂琥に、なんてまねをしてくれたのだと、怒りで震える。

今まで挑発していた慇懃の子供から感じられるオーラが今までと異質になったのを李湖南は感じた。俯いている薪。静かにとても静

かに。それでも苛烈な凄まじい怒りの気配を纏っている。眞稀が膨張して薪を取り巻く風となる。

「何でしょうね・・・？」

李湖南は首をかしげる。そして刀を構えている穂琥にそつと耳打ちする。

―さあ、目の前の『薪』を倒しなさい。そうしたらその悪夢から開放されるのですよ

ふつと聞こえてきたその声を信じていいのか悪いのか。わからなくって穂琥は泣く。それでも幻覚が消えてくれる可能性があるのなら、刀を振るおうではないか。

穂琥の振り上げた刀が視界に入る。そしてこちらに走ってくる穂琥の姿も目に映る。そして薪は俯いていた顔を上げて一瞬だけその後ろにいる李湖南を睨む。それからすぐに穂琥へ視線を移す。こちらに突っ込んでくる哀れな妹の姿。薪は持っていた舞姫を地面に落とす。そしてその諸手を広げる。

気色の悪い感覚。身体を貫く刀の感覚。それでもそんなことはどうでもいい。薪は広げた腕の中に穂琥が飛び込んでくるのを待つてそつと後から包み込む。

「そんなに臆するな。オレはどこにも行かない。大丈夫。お前が何をしようとも、どんなことになるうとも。オレはずっとお前のそばにいるから」

薪の声が部屋に響いた。まるでその時だけ時間が止まったようなま

つたりと流れが遅い時間だった。

「し．．．ん．．．？」

「ああ、そうだよ。もう大丈夫。助けに来たから」

生気のなかった穂琥の目に生気が宿る。そして強張っている手から力が抜ける。それと同時に薪に刺さっていた刀が光の束になって消える。薪が強く抱いている感覚がする穂琥。やっと本物の薪に会えたのだらうか。

「はっ！？し、薪！？」

やっと感覚が覚醒してわかった。自分が薪に一体何をしたのか。それに気づいて穂琥は抱きつく薪から離れて傷を見ようとしたが薪が離してくれなかった。

「し、薪．．．？私．．．あの．．．傷を．．．．．」

「悪かった」

「え？」

「オレがお前を不安にさせた。もっとちゃんと。こんなことなんとも思わなくらいちゃんとしていればよかったよな。もう二度とそんな不安はさせないから。二度と」

薪の声がひどく弱い。耳元でしゃべっているから聞こえるものの普通にしていたらその声はきくと聞こえなかったものだろう。そして薪はそつと穂琥から離れるとそのまま李湖南の方へ歩いていく。そんな薪の目を見たとき、穂琥はぞつとした。表現の出来ない恐怖。薪の目はいつもと違う『漆黑』の瞳をしていた。

「こ、黒眼．．．！」

第二十九話 黒き目の強大たる力

薪が以前、紅眼よりも使いやすいつた力。薪の有している最高峰の力。ただ、その使い方を誤ってはならない危険な力でもある。

黒眼、と穂琥がもらしたことで李湖南も少しあせりを見せた。その焦る意味もよくわかる。恐ろしいまでのその纏う気配に完全に吞まれてしまっている。呼吸さえも忘れさせる圧倒的な力。その力の前に穂琥は心底恐怖した。今まで出会ってきたものの中でもここまですまじい殺気と眞稀を感じたことがない。それを放っているのが薪であるということが恐ろしくてたまらない。

伏せがちの薪の目が完全に上を向いて李湖南を捕らえたとき、恐らく李湖南は終わる。生死は関係なく。とにかくこの李湖南という核は完全に壊れる。それだけにとどまればいいのだが。穂琥は薪にそんなことをさせたくなかった。恐らく自分が原因。あんな小もない術に掛かって薪を怒らせたことが原因だろう。だから今の薪を止められるのは穂琥だけかもしれない。穂琥は必死に考える。どうすれば薪を止められるだろうか。

考えるまでもなかった。もうすでに遅かったのだ。何とかしなくてはと思つた直後に、李湖南の耳に耐えない絶叫が迸った。その声に穂琥は身体の奥から震えが来た。そして耳を塞ぎたくなった。

黒眼の能力。穂琥がチートだ、反則だと意味がここにてわかると思ふ。この『眼』は他の眼とは異なりただ『合わせるだけ』で相手を押しつぶせる最強の、そして最厄の力。視線がぶつかった瞬間に相手へ苦痛を与える。己の眞稀を相手へ強制的に流し込み、相手の眞稀の流れをめちやくちやにする。それは生きたまま身を切られる

ことよりも苦痛のこと。人間で言う全身の血液が一気に逆流を始めるということ。あるいは血管のかに多量の水が浸入することに等しいかも知れない。

一層死んでしまったほうが楽かと思えるくらい苦痛が全身を駆け巡る。とめどなく荒れ狂う薪の眞稀が全身を確実に崩壊していく。

「薪！やめてえ！！」

穂琥の悲痛の声が薪の耳に届く。はつとして薪は閉眼する。しかし薪の眼からは無茶な開眼による涙がとめどなく溢れていた。意識が狂う。薪は閉眼したは良いがどこを見て良いのかわからずぼけた視界が広がるだけだった。そうして意識が少しだけ遠くなる。これが黒眼のデメリットかもしれない。己の眞稀を相手へ強制的に流し込むということは己の眞稀がどんどん減っていくということ。力を失うということ。無論、時間が経てば眞稀など回復するが冷静さを失って完全に怒りに任せて押し込めばその量を回復するのにはずいぶんな時間が掛かってしまうことだろう。

穂琥は倒れた薪を抱えて崩れ落ちる。

「馬鹿！薪の馬鹿！馬鹿馬鹿馬鹿！！」

薪の頭の上で涙をボロボロこぼしながら穂琥が叫んだ。桃眼を開いて薪を治さなければ。開いている眼からは疲労による涙が溢れ出ている。しかしその眼は焦点が合っておらず穂琥の不安をあおった。

物音がしたのはいざ、薪を治そうとしたときだった。あわてて振り向くとふらふらとしながら立ち上がってくる李湖南の姿だった。

「そんな・・・!？」

「ふふ・・・さすが、としかいえませんね・・・ぐふつ・・・」

李湖南は吐血をしながら笑っていた。恐らく壊しきる前に穂琥が薪を止めたので李湖南のほうも重症になるまでもなかったのだろう。それがよかったようなよくないような。穂琥は複雑な心境に駆られていた。

「薪様の治療はさせませんよ・・・」

弱い声で李湖南はそういった。穂琥はその言葉にもう攻撃をする。確か、李湖南は薪を仲間に入れたと思っていたはず。それならば今は治すことを最優先にするべきだと。

「いや・・・今の、状態のほうが・・・洗脳しやすい。治すのはそれからだ・・・。もし、それで・・・。失せてしまうよう、なら。いりません」

李湖南は途切れ途切れにそういう。穂琥の眼にぐつと力がこもる。

一体自分は何のために薪に付き合ってもらって修行をしたのだろう。これじゃ意味がないじゃないか。結局薪を護ることなんて出来ていないじゃないか。護られるばかりで。傷つけるばかりで。

こんなことをするためにここについてきたわけじゃない。何も出来ない自分が惨めでしょうがない。悔しくて仕方がない。

眼にくつとちからを入れる。さあ、開眼だ。こんな情も徳もない馬鹿には付き合っただけならいい。早く、薪を助けなければならぬのだから。

李湖南が飛ばしてきた眞稀。穂琥はそれを触れずに微動だにせずに飛散させた。

「何!？」

突然の穂琥の眞稀の向上に李湖南も言葉を詰まらせた。

「私はもう、嫌なの」

薪を傷つけて苦しい思いをさせて。辛い事は全て薪に押し付けることが。ゆっくりと立ち上がった穂琥の瞳は柔らかく閉じられたままだった。

「黒眼を受けた貴方を助けようと思った。幾ら敵でもそんなことは薪の意思に反する。でも。それももうやめる」

「ほう?ではどうするかね?」

李湖南は笑う。少しだけ汗ばんでいることからまだ身体の中に薪の眞稀が残っているのかもしれない。それでも今はどうでもいい。

薪は傷つけることを極度に恐れた。敵でも味方でもどちらでもそんなこと弱い穂琥には言えない。過去の過ちのない穂琥には理解できない。薪がどんなにそれを嫌だといっても薪をこんな風に傷つけて苦しめているような奴を野放しになんて絶対にしたくないし、簡単な刑罰で終わりになんてしたくない。だから、薪の代わりに自分が鬼になる。どんなことも咎める鬼になる。

「私は貴方を許さない」

穂琥の強い言葉。李湖南は一瞬だけすくんだが、指をぱちんと鳴らすとその周りに眞飽祇が集結した。

「許さないからなんですか？ 我の周りには信頼しゆる壁がありますよ？」

「信頼？ 果たして誰のことを言っているのかしら。笑わせないでよ。己を護るための『手駒の盾』でしょう。そんな安い壁で私の怒りを防げると思わないでよ。言ったでしょう。私は貴方を絶対に許さない」

穂琥の苛烈な力が当たりに迸る。

薪がいなければ何も出来ない。それくらいわかっている。でも逆に。薪がそこにいてくれれば。薪が後ろで見守ってくれていれば。何だって出来る気がする。

「何を世迷言を。そもそも傷つけたのはあなたでしょう？ 穂琥様」
「ええ。そうよ。だから私は私を一番許さない。だから本当ならここで死んで詫びたいくらい。でもそれをしてはならない理由がある。それにそんなことをしたら薪が嘆くわ。私は生きてこの罪を償う。薪と同じように」

穂琥のその覚悟の眼を見て李湖南は怯んだ。

こんな下らない争いをさせたこと。穂琥に刀を向けさせたこと。そして何より、黒眼を開眼させたこと。この三つ。これを咎として今から本気で李湖南を叩く。李湖南が今、ひどくにくい。それでも今このやられた三つ分以上は決して叩けない。

― 遣られた分はやり返せ。その代わり遣られてない分は決してやる

な。

それが薪の意思。薪の想いなら。それを否定するような行為はしたくない。だからこの散発に全てを載せて全てを込めて終わりにする。

――絶対に許さない

穂琥の眼がゆっくりと開く。この長い時で溜めた眞稀が『眼』へと力を変える。その開いた眼を見て李湖南は言葉を失っていた。見たこともないその『眼』に恐怖心を煽られていた。

このとき。ぐったりとしていた手がわずかに動いたのを誰も知らない。

「さあ、お仕置きの間だよ」

穂琥の手がゆっくりと上がる。眼からその穂琥の手へと眞稀が流れこむ。その力の大きさは計り知れないものだろう。

「大歳たいさい！」

穂琥が声を上げた瞬間、穂琥の突き出した手から眞稀が放出される。李湖南は中を舞った。周りを固めていた眞匏祇たちはひどく驚いた顔を青ざめさせて今出来た出来事を理解しようとしていた。

「太白たいはく！」

有無を言わず二言目が穂琥から発せられる。それに伴って李湖南は落ちかけていた身体がさらに上へと吹っ飛ぶ。そしてむなしくも地面に叩きつけられる。

「ぐ……!!」こ、こんなこと……たったの二発でこれほどまで……いや、だが二発でこれ。後一発でできるかな？」

ふざけた笑いが李湖南の顔に浮かぶ。しかし今の穂琥にその笑みは見えない。笑っていいばい。好きなだけ余裕をかましていいばい。知らないのだ。次に撃つ穂琥の込める眞稀の量を。

「黒眼を開眼させた罪は重いわよ」

穂琥の重たい言葉に李湖南は笑みを消す。鮮烈だが鋭い碇を含めた穂琥の眞稀は周りにいる眞匏祗たちの膝を折らせた。李湖南だけはかるうじてその場に立っていた。しかし、それだけ。立っていることで精一杯だった。

「本当はあなたを殺してやりた。でも薪は生きているもの。命はみな平等。だからあなたを殺すわけにはいかないの」

穂琥は感情のあまりこもっていない表情で李湖南に向かって最後の眞稀を放つ。

「太陰!!」

放たれた眞稀に李湖南は宙を舞った。どさりと地面に叩きつけられた李湖南は起き上がってこなかった。穂琥はそつと手を下ろして目を細める。本当だったらもう一発打ち込んでやりたい。でも、だめだ。これ以上遣ってしまったら本当に殺してしまうかもしれない。

「ひやはっ……ひやははははは!!」

穂琥は驚きで固まつた。そして勢いよく振り向く。すると寝そべっている状態で李湖南が狂つたように笑つていた。穂琥はその笑い方にだんだん怒りがわいてきた。

「何よ！」

「ひやははは！我は生きている！何度でもお前らを追い込んでやる！何度でも苦しめてやる！ひやははははは！」

まだなの？こいつはまだ懲りていないのか？

穂璫の中にけたり狂う怒りの炎が穂璫の頭をおかしくさせた。もう、こんな奴、この世から消えてしまえばいい。そんな風に思った。そしてぐつと手に力を込めて眼から眞稀を送る。四発目の攻撃。

「歳け・」

言い切る前に言葉が切れる。驚いたからだ。後ろからそつと包むようにして穂琥の手に血が通っていないのではないかと思えるくらい冷たいでも、どこか温もりを感じる手がかぶさる。そしてあげていた手をそのまま下ろされる。

「もう止せ」

「し・・・ん・・・?」

後ろから抱きかかえるように穂琥の攻撃を止めた薪。

「これ以上はだめだ。そんな勢いのを当ててはだめだ。オレなんかのために穂琥がそこまでする必要はない」

聞き取れないくらい小さな声で薪は言う。途切れ途切れ息が荒いこ

とを見ると恐らく経っているのもやつとなのではないかと思えるほどだった。

穂琥の手を下ろすと変わりに薪が手を上げて未だに気味悪く笑っている李湖南に向けて、一瞬眞稀を放つ。その瞬間、李湖南は静かになった。

「この程度の眞稀で気を失うんだ。もういい・・・」

眞稀を放った手をそのまま穂琥を抱く。穂琥は冷たい薪の体温が怖かった。このまま消えてしまうのではないかと思えるくらい冷たかった。いつも暖かい薪のぬくもりが。

「うん。わかった。もう帰ろう」

「ああ」

薪と穂琥は周りのものに背を向けて帰路の道に行く。それと同時に李湖南の力を失ったこの建物が今にも崩れ去ることを理解した李湖南の哀れな部下たちも急いでここから脱出することを選んだようだった。

「どうしよう・・・」

穂琥は小さな声で言う。隣で担いでいる薪はすでに意識を手放してしまっている。先ほど意識を取り戻したことが奇跡なほどだった。建物はすでに崩落を始め出口を見つけることが出来ない。穂琥に移動術は使えない。使えるようになっておけばと後悔したところで今は何も出来ない。穂琥は急いで走った。上を目指して。

第三十話 護り護られ交差する想い

何度も繰り返す地鳴りと崩落音。階段は崩れ落ち、薪を抱えて上に行くだけの力が穂琥には残っていなかった。先ほどの開眼が桃眼であるはずがない。そして穂琥の提唱した言葉は三つ。残り五つ。つまり全部で八つ。この八つの提唱を一つ一つ言っていくことに眞稀が倍増していく。しかしそれは同時に使用者にも負担をかけることとなる。

出口を探して走っている穂琥の耳にもものすごい爆発音が聞こえた。地震が起きたような足元のぐらつき。そして嫌な予感がする前に穂琥の足元は壊れて崩れ落ちた。極度の疲労のせいで落ちている間に意識が薄らいだ。

地面との接触感を得る。あまりの疲労のせいか、痛みを感じなかった。

―ああ、もうさすがにだめだな。このまま瓦礫に埋もれてしまうんだ・・・

うつすらとあいていた眼を完全に閉じて。身体力を抜いた。瓦礫が落ちてきて全身にその痛みが走るのを待つ。

いつまで経ってもその痛みがこない。それどころかどこか暖かい眞稀を感じる。慣れ親しんだ落ち着きのある眞稀を。穂琥はそっと眼を開ける。

「薪・・・？」

「よっ」

胡坐をかいて座り地面に手をついている薪の姿が眼に入った。辺りを見回せば薪の作った結界でドームが出来ており瓦礫が落ちてくることはなかった。

「薪！良いよ！もう・・・！私が遣るから・・・！」

「何言ってるの。お前じゃ無理だって。繊細な技だし。特に今の穂琥の眞稀じゃ出来ないよ」

薪の優しい声が穂琥に耳に届く。先ほどとは違つてはつきりと聞こえる声。

「ありがとう」

薪の声。はつとして薪を見ると薪は地面から手を離して眞稀を解除する。すると瓦礫は再び開いた空間に捻じ込もうと振ってくる。そしてそれらを粉碎して何とか形成を保ったところで薪は一息ついた。

「さて。何があつたかわからないんだ・・・。お前、わかるか？」

「えと・・・」

穂琥は出来る限り正確に物事を伝えようと思った。それがひどく難しいことだと知つて。李湖南が憎い。だからどうしても平等な言葉を言うことが出来ない。でも薪はそれすらも汲み取って話を聞いてくれていた。

とにかく言えることは言った。ただ、無意識だったので李湖南に放つた時に言つた言葉までは思い出せなかった。薪はそれを眼を伏せて聞いていた。

「当てようか」

「え？」

「大歳たいさい、太白たいはく、太陰たいおん。そうだろう？」

「え・・・あ・・・うん！そうだ！」

「まあ、オレも少しだけ覚醒していたからなんとなく聞こえた気がしたし、お前の『眼』から感じる気配がそれだからきつと間違いない」

「え？」

薪はこんな状況だというのにどこか嬉しそうに微笑んだ。それに穂琥は首をかしげると薪は過去に黒眼に匹敵する力を紫火が有していたと話したことを語った。それが今回穂琥の使った力。

「名前を白眼はくがんという」

薪はそつと微笑んで自分の目を押さえてどこか切なくどこか嬉しそうに言う。

「母上の血だ。穂琥はそれを強く受け継いだ・・・。よかった、母上の力を継いでくれて。父上ではなく」

薪の最後の言葉は皮肉に満ちている。それは逆に薪自身をあらわす。穂琥の正反対、つまり父の血を濃く引いているのが薪であるから。穂琥はそんな薪の心を感じ取って小さく頷いた。

白眼の力。八つの提唱を経て相手へダメージを与える強き力。最初の三つは先ほどの三つとして残りの五つ。歳刑さいけい、歳破さいは、歳殺さいさつ、黄幡ばん、豹尾ひょうび。もっとも、これらを紫火が使ったことなどほとんどなく、歳破までを提唱されたものなど存在しない。それほどまでに絶大な力なのだ。

「オレが思うにこの数ある眼の中で最強の力だと思うよ」

薪が本当に嬉しそうに語るその姿を見て穂琥はどこか胸を撫で下ろすことが出来たような気がした。

「さて。ここを出ないとな」

「どうやって出よう？こんな瓦礫まみれじゃ・・・」

「あと少しでオレも回復できるからそれまで待ってて。そうしたら上に移動術で上るから」

眼を閉じて回復にいそむ薪の姿を見てやっと考える時間を得る。いや、本来ならこんな考える時間などほしくはないのだが。

果たして自分は役に立てたのだろうか？邪魔しかしていないのではないだろうか？薪をここまで追い込んだのは他でもない自分だ。眞稀が互いに切れてしまっている今、治療するわけにも行かずましてや寝るわけでもなく薪はただ目の前に座って眼を伏せてじっとしているだけ。そんな薪の身体には生々しい傷で覆われている。血は固まっているようだ。薪の気持ち的には・・・。

「何変な顔してんだよ」

突然声を掛けられて顔を上げる。薪が眼を開けて一直線に穂琥を見ていた。そんな真っ直ぐな眼を薪に向けられて穂琥は眼を反らして逃げる。

「気にすることはねえよ」

まるで穂琥の心を見透かしたように薪が言う。今度は穂琥が薪を見

て薪が眼をずらした。

「穂琥は十分遣ってくれたよ。そんなくらい顔する必要はないよ」

「でも・・・薪の身体・・・」

「まだ頭はくらくらするけどもう少ししたら替装してなんとかするよ」

穂琥は薪の腹に眼をやる。血で染みて真っ赤になっている。

「そら、痛かったけどな。李湖南の奴、思いっきり刺してくるからさ」

「そうじゃなくて・・・」

「は？オレは李湖南にしか刺されてねえもん」

「え？！」

「オレの体内には李湖南の眞稀しか残ってねえし。ということは李湖南にしか刺されていないって事だろう」

眞匏祇が眞稀を込めて相手を刺した場合その刀に乗せられて相手の体内に勝手に眞稀が流れ込む。それは本当に微弱なもので少しの間が経てば消えてしまうもの。

「だからオレは李湖南にしか刺されていない。お前がそこまで気にする必要はないということ。わかるか？」

「う、うん・・・」

未だに落ち込み気味の穂琥を見て薪はため息を吐く。仕方ない。こ
うなったら昔の傷口を開くしかない。

「おい」

落ち込む穂琥にこちらに意識を集中させる。そして慥夸紋があるところを穂琥に見せる。慥夸紋ということは無論、毅邏の呪印もそこにある。

「はて？オレは三歳のときに誰を殺した？」

「違う！あれは薪じゃなくて・・・」

「それ、今のお前に否定できる権利ねえぞ」

「う・・・」

確かにそうだ。きつと状況は少し違っけどきつと意味合いは同じなのだろう。

「な？気にするな」

「・・・うん。わかった。ありがとう」

穂琥の顔に少しだけ浮いた笑み。少しは落ち着けたようでよかったと肩を落とす薪。

「私ね・・・思ったの」

「ん？」

薪を護りたい。それは今でも変わることはないし、これから変わることはないと持っている。でもさっきまでの穂琥の心はひどく醜く歪んでいた。護ってほしい。護りたい。ずっと薪の後ろにいたい。散々護ると言っていたくせにいざとなったらそんな臆病で。心のどこか奥できつと薪が助けてくれるとか思っている自分がいる。いざとなったら護って言うずるい言葉が。護ってもらえるっていう甘えた考えだけが浮かんでくる。

「サイテーだよね」

自嘲する笑いを浮かべる穂琥。薪は動きにくいであろう身体を無理に動かして穂琥の前に来ると穂琥の頭にて置いた。

「ずるくない。甘えてなどいないよ」

優しい薪の言葉。こういう言葉を期待してしまう自分がすでに醜い。

「オレだってそう思うことはあるさ。そういう感情は当たり前なんだよ」

「薪も・・・？」

予想外の言葉に穂琥は震えた。

「おうよ。穂琥が白眼開眼したのはすごい嬉しい。オレだってさつき、黒眼で暴走して穂琥に護ってもらったんだぜ？」

感情なんて生きていればさまざま存在する。憎んだっていい。殺してやりたいって思ったっていい。ただ、それを自分の中で認めて肯定して遣ればいい。そうして自分の中にもそういう感情はちゃんと存在するんだということを認識した上でちゃんと前を向いて歩いていけばいい。そうすることで傷ついた誰かを庇い護ることが出来る。護ってもらう安堵感を知っているから護ることが出来る。それを知らないものに本当に護ることなどは出来ないのだ。

「ただ、一つだけ。今回の件で気に入らないことがある」

薪にしては妙な言い回しだと思って涙眼を薪に向ける。そこにあるのはどこまでも深くどこまでも優しい空色の瞳。

「オレの変わりに鬼になる。そんなこと、思っちゃあ、いかんよ」
「あ……」

「気持ちわかるんだ。でもやっぱりだめだよ。お前はお前。穂琥という存在なんだ。だからそれを壊すようなことはしないでくれよ」
「……うん」

「穂琥はオレを支えてくれているんだ。しっかりね。だからオレは真っ直ぐ立ってられる。だから悩むな。そういうことで悩まれるとオレも辛い。な？」

「うん」

もう涙でちゃんとした答えすら出来なかった。穂琥の泣いている背をそっと包むように薪が包む。どこまでも暖かいそのぬくもりで。

さつと替装する。血まみれだった服装が一気に新品になる。

「さて。そろそろ上に出よう」

「平気？」

「ああ」

薪に掴まって移動術で外に出る。外は何にも変化がなくて驚いた。もともと先までいた場所は眞稀で作られた特殊な空間。薪と穂琥が修行をしていた場所と同じようなもの。だからあそこの空間で如何に眞稀を放ったところで外に影響は出ないということだ。

「ふう……」

薪はその場に座り込んでしまった。如何に薪とはいえ、こんな短時間で回復できるわけもない。穂琥は焦って駆け寄ったが薪は困ったような表情で大丈夫と答える。

薪はさらにもう一度替装する。今度は眞匏祇の格好ではなく人間の格好。故に特徴的な髪も目も。普通の茶色身がかった黒に変わった。穂琥も同じように替装して人の格好になると薪に肩を貸しながら自宅へ目指して歩き始めるのだった。

薪の家に着くまではよかった。しかしその後が大変だった。

「薪?!ちよつと?!」

玄関に入つてすぐ、薪は何か切れたように倒れこんで意識を失つたしまった。穂琥はそんな薪を必死で駆けて布団まで運んだ。

「もう!気を失うにしてももう少し余裕を持つて……余裕を……」

穂琥は苦情の言葉を途中で切る。薪が昏倒することなどあり得ないのだ。それが今こうして昏倒したということは本当に限界だったのだ。玄関に入るまでは意地でも意識を手放さないように。それこそ余裕なんてなくて。

「眼、覚ましてよ……」

不安げな声だけを残して穂琥は部屋を後にした。負担を掛けないように。

穂琥は薪を刺した。どんな理由であれそれは変わる事のない事実。それを物語っているのが己の身体。替装して誤魔化していたが実際穂琥は血まみれだ。薪みたいに替装するだけで身体の汚れを払えるほど器用ではない。それを落とすべく風呂に湯をはりに行く。

鏡を見て絶句する穂琥。薪をどれだけ切り裂いてしまったのかよ

くわかった。今の髪は茶色がかったさらつとした髪をしているがそれが血で黒っぽく固まり髪を何束にもまとめていた。

シャワーでとりあえず媚びれ付いた黒い塊を落とす。案外血液とは固まると落ちにくいものだった。何とかしてそのへばり付いたものを落として綺麗にすると湯船につかる。以前と異なり今回はあまり怪我がなかったけれどそれでもあちこち怪我をしてお湯が沁みる。

しばらく悶絶して何とか沁みるのを我慢できる程度まで来るとやっとゆつたりとお湯につかる。そうしてふつと考える薪のこと。きつと眼を覚ます。今は疲労で倒れてしまっているだけだ。きつとそうだ。

「私って役に立っているのかなあ・・・」

【奴がそう言ったのならそうなのだろう】

ふつと聞こえた声に穂琥は驚いた。穂琥の身体の動きとは別に水面が微かに揺れを見せる。そして僅かな波紋を作って降り立った一つの影。水面に触れることなくその水面の上に立つ黒い影。穂琥はそれの登場に驚いて顔を不自然に上げる。

そこには威圧感を眼に灯した綺邑の姿があった。

「き、綺邑・・・さん・・・?! どうしてここに・・・?」

「少し用が有ったからだ」

「え?! 薪を治しに・・・」

「戯け。何故私があんな奴を治さねばならぬ」

威嚇に近いその言葉に穂琥は萎縮した。綺邑は本当に言葉の一つ一つが痛いくらいに強い。綺邑は確かに薪に対する扱いが随分とひどい。どれだけ嫌いなのかと突っ込みたくなる。

「聞きたい事が有る」

綺邑が突然尋ねてきたので穂琥は少し身構えた。

「ゆっえい邑頼のことだ。瞑、と名乗っていたか。奴は貴様等の戦いに居たか？」

綺邑の鋭い声が風呂場で木霊する。その強さに負けそうになりながらはたと穂琥は思考がとまった。そういえば。

「居なかった・・・」

綺邑はそれを聞いてふっと目を伏せた。

「邑頼が李湖南程度の餓鬼の元に居るのに飽きたのだろうな。いや、意味を達成したのかもしれないが。奴の事など詳しくも知らんし知りたくも無いがな」

綺邑はそっぽを向いて冷たくそう言った。

「まあ、その確認をしに來ただけだ。帰る」

そう言つて綺邑はふっと水面を揺らした。

「あ、待つて!!」

穂琥の声に綺邑は答えるように姿を消さなかった。その代わりに何か用かという鋭い目つきを向けられてそれに耐える穂琥の心は折れそうだった。薪の眼光より強いその眼に穂琥は必死になって耐えた。

「あ……り……。ありがとう……」
「……は？」

綺邑にしては珍しい疑問系の返しだったが穂琥はとにかくその綺邑の目つきが怖かった。鋭くて。

飲まれるな……呑まれ……呑まれてはだめだ！！いけない！
しっかり意思を持つのだ！

そんなことを自分に言い聞かせる穂琥だった。あまりに綺邑が凝視してくるのでだんだん萎縮していく自分が少し惨めに思えた。

「開眼、一つ。増えたのか」

綺邑にそう言われて驚く。しかし薪も認める力の持ち主なのだからその位わかってもおかしいことではないか。穂琥はそつと頷く。そして綺邑は白眼であることまで言い当てた。穂琥はそれを肯定する。

「開眼しろ」

突然綺邑にそれを言われて穂琥は身を引いた。

「そんな……」
「嫌だと言っならそれは構わん。強制するつもりは無いが。ただ今の儘使うのであればお前、命落とすぞ」

綺邑のその脅しに穂琥は肩をびくつと震わせた。力が増大する白眼。使い方を誤れば眞稀の消費のしすぎで死に至る。そういうことだ。

「眼を閉じる」

綺邑にそう言われて穂琥は仕方なく眼を閉じた。すると眼に熱いものが乗った。

「其の儘開眼しろ」

綺邑に言われた通り白眼を開眼する。そうして開眼してる途中に穂琥は関係の無いことが頭をよぎった。

―ああ、今眼に乗っているの、綺邑さんの手だ

ふっとそれが取れる。そして閉眼するように言われて穂琥は言われるままに閉眼する。そして綺邑は今から24時間、決して開眼するなと忠告した。無論、桃眼も。そうすれば普通よりかは自由に扱うことが出来ると言う。それに穂琥は礼を述べる。この死神、綺邑に對しては以前、尋常ではない嫉妬を抱いていた。しかしそれが今では随分となくなってきたことに薄々気づき始めていた。

しかし今はそんなことどうでもいい。ただなんとなく穂琥は無意識に綺邑へ言ってしまった。

「綺邑さん、手、あつたんだ？」

これにはさすがの綺邑も返す言葉が無かった。

「貴様、馬鹿か？」

薪よりも強烈な一言に穂琥はしり込みする。なんたって今まで全身をすっぱりと覆った服装で戦うときや薪への攻撃時も手は一切使っていない。全て足だけで攻撃をしている。だからてつきり手がないのかと穂琥としては思ったのだった。

綺邑は完全に貶すような目つきで穂琥を見下ろし、姿を消した。さすがに今の質問はまずかったと思い直す穂琥だった。

ふっと、消える寸前。綺邑は肩越しに穂琥を見た。どうやら若干自分の言動に落ち込んでいる様子だった。そんな穂琥を眼にして。そんな穂琥にへんな質問をされて。

—私の見当は違えたか、見込みを違えたか？

そんな疑問を浮かべたのだった。

第三十二話 その眼が開くまで

風呂を出たのはそれから随分経ってからだった。完全に寝入ってしまった穂琥。そんな風呂場で起きた不可解な出来事。

すっかり寝てしまったのでかなり長い風呂となってしまったにもかかわらず身体が冷えることなくお湯は温かだった。そんなことに疑問を持ちつつもう一つ。こっち疑問はすぐに解消されたのだが、全身の怪我が傷跡なしに治っている。

「治してくれたんだ……。どうせなら薪を治してくれればよかったのに」

口を尖らせながら穂琥はそう思う。それでも感謝の気持ちは忘れていないつもりだ。

翌日。やっと出来たゆとりの日。散々疲労した身体を休ませてやろうと穂琥はその日を墮落に使った。

ただ何もしない日が今までにあっただろうか。薪と出会う前にもこんな『何もしない日』などなかった。そして思うのだ。

「ありえない！最悪だ！こんな墮落した日常を薪は認めない！」

そんな風に下らない考えをしていたとき、声が聞こえる。

【お前、毎度この様な生活を送っているのか？】

聞こえてきた綺邑の声に穂琥は肩を震わす。一つ聞き忘れたことが

有ったと綺邑の声がする。それに答えようとして声を出して、自分の発している声が綺邑に届いていないことがわかる。いつも薪が出していたあの独特の響きのあるしゃべり方。恐らく眞稀を使っているのだろうが、穂琥にその方法はわからない。そうやって試行錯誤していると呆れた表情で綺邑が顕現してくれた。

「あ、すみません・・・」

「ふん。お前、認可の門に触れずに開けたとは本当か？」

穂琥は意外なその質問に軽い動揺を混ぜて肯定した。何故それを知っているのかたずねると綺邑は簾堵乃槽耀から聞いたと答えた。

「神を呼び捨て?!」

穂琥の突拍子もない声に綺邑は眼を軽く細めた。

「違えぬわ」

穂琥はその言葉を聞いて少し考える。そして彼女もまた、死神。神の末端に座するものであることを思い起こす。

「あの・・・」

「ん？」

穂琥は自分の身体の傷を治してくれたことをたずねる。薪の傷は治さないと豪語しているのに何故穂琥の傷は癒してくれるのだろうか。

「知ってどうする」

穂琥自身に綺邑からそんな買われるような事はしていないと思える。

薪のほうに余程だ。嫌われていてもおかしくないのは穂琥のほうだ。

「別に」

綺邑は短く答える。用件を聞き終わった綺邑はその場を後にしようとする。それを穂琥は再び止める。それに鋭く睨まれて押し負けそうになるが穂琥は必死でそれに耐える。

「お仕事の、ほうは・・・？」

少し身を引きながら綺邑にたずねる。少し不可解な表情をしながら今は空いていると答えた綺邑。

「何故？」

「いや・・・あれほど前に出ることを嫌がっていたのに私の前には随分出てきてくれるんだなあって思って。あっ！いや！別に、嫌とか悪いとかそういうんじゃないよ！？」

突然弁解を始めた穂琥に綺邑はただ冷たく視線を送る。

「何も言っていないが。用はそれだけか？」

「あ・・・」

まだ何かあるのかと言いたげな眼で見られて穂琥は胸が痛む。そして死に物狂いで言葉を出す。

「あ、明日も・・・来てください・・・」

穂琥のその言葉に綺邑はしばらく沈黙した。

「ふん」

綺邑はそのまま姿を消してしまった。その態度に穂琥は申し訳ない気持ちになった。やはり悪いことを言っただろうか。迷惑だっただろうか。小さく深いため息をついて穂琥は布団にもぐった。

第三十三話 敬意を払う存在

翌朝。眼が覚めたのは6時少し前だった。それに感動した穂琥は自分を自分で褒めていた。歡喜に満ちた穂琥はすぐに硬直するのだった。

昨晚。綺邑にけしかけた事を思い出して沈む穂琥だった。返事もしないで帰ってしまったし。

「あれ・・・？」

ふと思い出す穂琥。過去に薪がなんかそれに関することを言っていたような・・・。

あまりにがさつな綺邑の態度を薪はなんと普通にも普通に反応している。それがあまりにもありえなくて尋ねた。綺邑は全く以って返事をしていないのにどうして勝手な判断が出来るのか。しかし薪はそれを否定した。返事をしていないということはそれが肯定。綺邑の是であるということ。もし綺邑の中で否定すべき事柄であるのなら問答無用で却下の言葉を振り下ろす。

ということとはだ。昨晚綺邑は否定もせずにもその場からいなくなつた。ならば来てくれるということなのだろうか。

ふつと気配を感じる。どこか刺激的で攻撃的。それでもどこか柔らかく神聖な。そんな気配。そちらに眼をやるとふわっと降り立つ綺邑の姿が眼に入る。毎度思ふのだがこの彼女の登場、顕現するときの姿はどこか美しい。

「き、来てくれたんですか?!」

「来いと言ったのはお前の方だろう」

冷たくあしらわれるので萎縮する。

「あ、あの・・・も、もしよろしければ・・・その・・・お・・・」

綺邑の視線に負けて言いたいことを口々にいえない穂琥。そんな穂琥に綺邑は呼びかける。それに過敏に反応する穂琥は背筋を伸ばして綺邑の言葉に耳を傾ける。

「何故、私に敬意を払う？」

「え・・・？」

綺邑の突如のその質問に穂琥は少し固まる。

幾らなんでも穂琥程度の眞匏祗が死神である綺邑を呼び捨てにしているものか疑問でもある。薪は別だが。慥誇だし・・・。なんとなく、というのが正直の本音だった。

「ふうん」

綺邑はそういうと目線をはずした。以外にも綺邑が『ふうん』などと間延びした声を出すとは思ってもいなかったことなので少し聞き入ってしまった穂琥だった。

「私なんか呼び捨てとかタメ語とかヤじゃないですか？」
「別に」

綺邑は否定に関しては即断即決のような気がした穂琥だった。

「敬意など己が本気で払いたかった者にのみ払えば良い」

綺邑の回答。それもそうだけれど、その場の雰囲気や相手の感じでもそれらは変動するのではないだろうか。それよりも綺邑のような存在にもそんな敬意を払うようなものがあつたのだろうか。神である簾乃神を簾堵乃槽耀とのみ言っていたことだし。それにしても敬意を払うべき相手のことをよく理解しているような気がした。

「過去に一度、居たな」

綺邑はさもどうでもよさそうに答えた。しかし綺邑の言葉の言い回しが気になった。居た、ということは少なくとも過去形。今は居ないということだろう。

「どうでもいいな、そんな事。何故私を呼んだ」

綺邑に鋭く言われて穂琥は言葉に詰まって眉を寄せる。

第三十四話 願いを受け止める

痛い。これを痛いといわないでなんと呼ぶ。

自分のして欲しい事を言った穂琥に凄まじい眼光を放った綺邑。
ただ穂琥はその眼に慣れていないだけだということをそろそろ理解したほうが良い頃合だ。

「い、いや！本当に！別にいいんです！駄目なら！」

「お前さ。私は未だ何も言っていない」

綺邑のその言葉に穂琥は呆然とする。そして穂琥の願い出に対して構わないと答えた。それが意外すぎて嘘ではないかと疑った。しかし綺邑は嘘は言わないと答える。

「え？じゃあ・・・いいの？」

「二度も言わぬ」

綺邑のその返答に穂琥は嬉しくて堪らなくなった。その姿を見て綺邑が未だ子供かため息をついたことを穂琥が知る由もない。

二つ目の願いでは即断即決、却下。このお方は本当に否定は早い。なるほど、と思う穂琥。確かに否定さえされなければ別に問題は無いのだとやっと理解し始める穂琥だった。

「顕現してください〜〜！！」

「断る。何度も同じ事を言わせるな」

「してください〜〜！！」

「・・・」

さすがにこの沈黙が肯定だとは幾らなんでも思わない。ただひたすら綺邑に頼み込むがさすがに綺邑も否定することも面倒になったらしくただ睨むだけになってきた。

沈んだ気持ちを少しでも晴らしたい。不安を少しでも忘れたい。綺邑に願い出たのは一緒に外を散歩してほしいということ。無論、それに関しては肯定をもらった。しかし、その後の顕現した状態では断られた。当然といえば当然のことだ。眞匏祇ですら知らない死神の存在を人間如きにさらすなど。ありえる話ではないことくらいわかっているのだが。

薪の影響か、粘り強い穂琥は起きてから3時間という時間をただひたすら綺邑への願い出の言葉で埋めた。その意気込みと折れぬ心にさすがの綺邑も呆れた。

「はあ、仕方ない」

「本当!？」

「その代わり条件だ。お前の眞稀を遣せ」

綺邑から言われた条件。それ自体は別に穂琥としては構わない。ただ、その意味は？

「私はこの世界で身を置く事には無理を生じさせる。人型を取ると言うことは随分と浪費する事なんだよ」

力をわざわざ行使しなければ人型を取ることは出来ない。しかし、たかが『散歩』のためだけにその力を行使しようとは思わない、思っわけがない。そこでそれを願い出てきた穂琥自身が、その眞稀を以って綺邑に力を渡し人型を形成する、ということ。

「全然構いません！幾らでももらってください！！」

死神相手に『幾らでも』とはよく言えたものだ。無知ゆえか、それとも個性か。どちらにしろ中々面白く興味をそそられる。綺邑は穂琥から眞稀を受け取る。

穂琥の渡した眞稀は綺邑の胸元で小さく玉になっていった。そして圧縮されていきそれは美しい宝玉のような形に収まった。見るものが見れば尋常ではない力の塊。のどから手が出るほどほしくなるような巨大なエネルギーの塊。しかし、それがどれだけすごいものかは穂琥にはわからないし、恐らく綺邑がそれを持っている間はただのガラス玉にしか見えないだろう。

それを完全に珠にすると綺邑の容姿が少し変化する。普段、地面よりも少し上を浮いている綺邑がずっと地面に足を付く。そして着地するとローブを脱ぎ去った。服装はすでに人のもの。普段長く覆っている右の前髪も短くなって両目とも見える。美しい色をしているたその橙の髪も僅かに橙色を帯びている程度の茶色になり、赤く光る瞳も黒く変化する。それを目の当たりにして穂琥は思っただ。

—綺麗過ぎる・・・てか、格好いい・・・

普段、目元しか見えない綺邑の顔がここまで露になったのを見たのは初めてで以外にも整った美しい顔立ちだった。並の男なら惚れてしまってもおかしくはないかもしれない。女である穂琥ですら魅了されたくらいだから。

「準備はしたぞ」

その容姿にまた似合う低めの落ち着いた声。穂琥はなんだか妙な気分になった。そしてその言葉をやっと脳へ伝達するとはっとしたように意識を取り戻す。

「あ、ありがとう・・・ございます。えと、まずご飯食べていいですか？起きてから何も食べていないので・・・」

綺邑はそれを聞いてベッドに腰を下ろして足を組んだ。

「なら私は此処で待っている。元来、私達は食物は摂取しない」「了解です」

第三十五話 街を歩く

食事を済ませてから綺邑を強制連行して外へ飛び出す。あまりにも嬉しくはしゃいでいた。そして外に出てからやっと自分のしている行為に気づいて綺邑の手を離す。

「わ、ごめんなさい！私ったら！！」

そう言いつつもはしゃいでいる穂琥。果たして綺邑を相手にこの様に出来るものが他に居るのだろうか。

「行きたいところがあるんです！」

穂琥は嬉しそうにたったかと前を歩いていく。そんな穂琥を身ながらあまりなれない『歩く』という行為に面倒を感じながらも穂琥が何故敬意を払い続けるのか疑問に思っていた。

大きいデパートが最近出来て、そこには巨大な本屋があるらしい。穂琥はそこで本を見たいと綺邑を引っ張る。その本屋には確かにこれはすごいと思える量の本がずらりと並んでいる。穂琥が楽しみにその本に眼を通してしていると名前を呼ばれて顔を上げた。

「穂琥ちゃん！」

「獅場君！」

クラスメイトの獅場。軽い挨拶を済ませて綺邑の存在に気づいて首をかしげる。

「おろ？その人は・・・？」

獅場に尋ねられ、答えないわけにも行かないかと悩む穂琥。とりあえず名前を伝える。その代わり警戒しながら。もし綺邑がそれを却下しにきたらすぐに止められるように。しかし綺邑は止めに入ることもなくただ黙って穂琥と獅場のやり取りを見ていた。

「で？何？どういう関係なん？」

「え……つと……」

「……えゝ、薪とかと関係あんの？」

強いていうなれば薪から繋がった関係ですが。それを言おうとして綺邑が口を開く。

「知るか、あんな腐れ外道」

「わっほ……」

随分な言動に獅場が驚いた顔をしていた。ただやはりその佇まいは美しく格好がいい。故に獅場も少し見とれているような風ではあった。

「そついえば、獅場君はどうして此处に？」

「参考書を買いに、籐下と。穂琥ちゃん見かけたから買っている籐下放置してこつちに来た」

「えゝ、ひどいねゝ」

笑いながらレジのほうを見ると籐下がビニール袋を提げてこちらに歩いてきた。そして穂琥に気づき挨拶をした後、薪が居ないことに気づき少し意外そうな顔をした。

「え……薪は？」

「あゝ、今居ないの」
「そう・・・」

穂琥は薪が保護する。それを知っているからだろう。そして籐下も綺邑に気づき目を丸くする。みんなそうなのかもしれない。

「これから何するの？暇なら食事しない？奢るよゝ、籐下が」
「オレかよ！」

獅場の冗談に籐下が突っ込む。穂琥はそれを笑っている。

「あ、でも、綺邑さん・・・」
「別に。お前が構わぬと言うのなら私は良いが」

綺邑の発した言葉。獅場も籐下も聞き惚れる。普通ではありえないだろう、その言葉回しに格好良さを覚える。

昼食の場をどうするか考えて歩いている最中、穂琥は気が気ではなかった。綺邑は食事をしないといった。一体どうしたものか。

そんな穂琥の心配をよそに綺邑は周囲に合わせて食物を口に運んでくれた。ただ、最初の一言に穂琥はドキッとす。

「人界の食は不味いな」

いやいや、そんな事言わないでね。籐下と獅場には聞こえていないようだったので安心する穂琥だった。

食事も終わってさて、これからどうしようかと話していると綺邑が急に鋭い目つきになったので三人は驚いた。ひどく警戒した表情

に穂琥ははつとした。これは薪が眞匏祇の襲撃を受ける前の表情と似ている。ということは綺邑も感知したということだろうか。

「来る」

綺邑は短くそうつ。やはりそうなのだ。穂琥は慌てて二人に用事が出来たと誤魔化して綺邑とともに全速力でこの場を離れる。きつと籐下ならこのことを理解してくれるはず。それを願って。

走っている最中にもっと早く走れないのかと叱責を受けて謝る穂琥。人間ベースの綺邑に遅いといわれるとは思ってもいなかかった。

急停止したので穂琥は転びそうになった。人気のない場所で綺邑は平然とした顔をして立っている。

目の前に降り立った眞匏祇。当然だが綺邑からは眞稀を感じないために僅かに躊躇したようだった。さすがに命を狙ってくる眞匏祇といえど、人間にまで手を出すつもりはないみたいだった。

「お前・・・人間か？」

「そう見えるか？」

眞匏祇からの質問に余裕で答える綺邑。その回答でどうやら人間ではないと判断したらしい相手は怪訝な表情を見せた。人間にそう尋ねてこの様な解答はまずありえない。すれば、眞匏祇のはずだが、人間並みに何も感じない。それを疑問に思ったようだった。

「眞匏祇・・・か？最近噂になっている眞匏祇が居るが」

その言葉で綺邑の表情が変わる。これは不機嫌、という部類だ。

「あんな餓鬼と同じにするな。胸糞悪い」

怒気を孕んだその言葉に乗せられているのはただの怒りだけではなく言葉の力も加算する。言葉の力、といっても別に暴言とかそういった部類ではなく綺邑の持つ眞飽祇とは異なった特殊な力にてその言葉で相手を威嚇し怯ませる力。

「私は奴ほど甘くないぞ。覚悟しろ」

綺邑は右手を軽く振った。それだけで相手は簡単に吹っ飛んだ。そして地面に叩きつけられる前にその姿を消した。跡形もなく。

「え?! 何・・・?! 殺してないよね・・・?!」

「有る訳無いだろう。自ら仕事を増やす様な真似、するか」

面倒くさそうに綺邑がそういったので安心して肩を落とす。そして先ほど置いてきてしまった二人の様子を見に行かねばと穂琥が言うと、綺邑はそれを止めた。どうやら籐下のほうが何らかの理解をしてくれたらしく、もう他の場所に移動しているらしい。さすが、これだけ離れてもそうやって人の存在を感知して位置まで特定できるとは、『神』に属する存在は違うなと穂琥は思った。

後もその『神』に属している綺邑をまるで友人ごとく振り回す穂琥にそつとため息をつく。穂琥としては薪と違って文句の一つも無く付いてきてくれる綺邑に気をよくしていた。

第三十六話 思い出の場所

夕方。太陽が沈みそうなとき。とある公園に足を踏み入れた。思い出の場所。見せたいものがあつて綺邑を引つ張つてきた。果たして穂琥の思つたとおりのことを感じてくれるかは知らない。死神である綺邑が人間や眞菟祇と同じような感性を持っているかは理解など出来ないから。それでも自分たちはこういうものの心を動かされるんだということを知ってもらいたかった。

「こつちですよ！早く、早く！」

まるで子供のようににはしゃぐ穂琥にほとんど表情など無く付いていく綺邑。はたから見たら一体どんな風に移るのやら。

公園の隅に人の背よりも高く植物が生えそろっているところがある。大抵はそこを素通りするのだが、穂琥はその草を掻き分けて中に入っていく。その行動に肩を落とす綺邑。諦めて付いていくしかない。

「早く！間に合つたよ！！」

「間に合つた？」

「うん、夕日！」

草の中から穂琥の嬉しそうな声が聞こえるので仕方なく草を掻き分けて中に入る。本来、死神の姿であるのならばこんな草を掻き分けるまでも無く通ることが出来るのだが、あいにく今は人の型のため、通るのに苦労を強いられる。

草を抜けると空間が開けた。人が2、3人居座れそうな空間で崖

になっており、ふちには手すりがある。その手すりに手を付いて穂琥が嬉しそうに夕日を指す。

「ほら！沈みかけの夕日が、下の街を照らしているの！紅くて綺麗でしょう？」

綺邑がそれにどう感じるかは知らない。それでもあえて同意を求めようと綺邑へ言葉を投げかけてみた。するとそれを見た綺邑は少しだけ眼を細めた。

「ほう」

綺邑はそれだけ言うとなれきり言葉を発しなかった。でも表情は満足でもなさそうだったので穂琥はほっとする。

「ここ、思い出の場所なんですよ」

穂琥は夕日に照らされながら嬉しくなつて綺邑に話す。

穂琥は過去の記憶を馳せる。まだ地球に居たとき。眞匏祇の地へ行く前。いや、その眞匏祇の地へ行こうとしていたとき。薪がここへ連れて来た。街が一望できるこの場所へ。次、いつ地球にこられるかわからないからよく見ておけば、ということらしくつれてきてもらった場所だった。ここは人の立ち入りが全く無く気兼ねすることが無かった。

「そこでね、刀をもらったんです。薪が愛用していた舞姫とかは流石に無理ですけど、風雲っていう刀です」

穂琥はさつと前に手を前に出してそれを出す。煌く刀身に夕日が反

射してなんとも美しく光を放った。

「大した刀だな」

「わかります？へへ……。そうなんです。薪としては己を身を守るためにつて渡してくれたんですけど、私にとって薪からの初めてのもらい物で嬉しくて……」

ただそれだけ。薪の中で身を守るため以外の深い意味は無い。それでもなんとなく嬉しくて堪らなかった。自分で調達しろとかではなく、薪からもらえたことが。それは自分でも馬鹿らしいと思う。でも。

「別に良いんじゃないか。信じる者から譲り受けた物とは大抵そういう物だろう」

予想外の綺邑の同意にさらに穂琥は嬉しくなる。へへっと笑う穂琥。そろそろ太陽が街の向こうに消えてしまいそうだった。

「そろそろ帰るぞ、穂琥」

「うん！」

元気に返事をする穂琥。それからとはと硬直する。綺邑に何かと聞かれてなんでもないと言つて歩を進める。

どうやらここは穂琥にとって本当に特別な場所のようだった。綺邑が初めて穂琥の名を呼んだ。小もないことだろうか。いいや、きっとそれはとても素敵なこと。

「何故こうしたかった？この程度、お前だけでも良いだろうに」
「それは……」

穂琥は少しだけ口ごもる。そしてちらりと横目で綺邑を見る。美しくも格好良いその姿に見惚れる。そしてそつと自分の思いを口にする。

穂琥には姉が居ない。当然のことだが。でも同性の姉妹とはほしいと思う穂琥だった。それを実感したのは綺邑との接触ではあるのだが。薪ですら頭の上がらない綺邑がどこか姉のような気分になって、それが嬉しくて。世話をしてくれるし頼み語とも聞いてくれるし。素敵な姉のような存在。

「あーそうだ！お願い！」

穂琥が綺邑に尋ねたこと。綺邑はそれをしばらく考えた後、若干渋々といった風に承諾した。それが嬉しくて元気よくありがとうと叫ぶ。

第三十七話 その眼が開く

家に帰って薪の眠る部屋にそつと入る。すでに家に着いているために綺邑は人型を止めて本来の姿に戻っていた。

「眼・・・覚ますよね？」

そつと尋ねた穂琥の目は薪を見るでもなくぼんやりとしていた。

「だろうな」

「死なないよね？」

「だろうな」

綺邑からの無機質なその返答に少しだけむつとした。

「どうしてそんな風に言い切れるの？だってわからないじゃない？」

「お前、私を誰だと思っている？」

「あ・・・」

「私は死神だ。死者の行方を左右する者だ。私が死なないと言ったなら死なない」

綺邑の言葉の説得力に負けて穂琥は押し黙った。そうだ。彼女は死神なのだ。ならば大丈夫なのかもしれない。それでも不安が完全に消えるわけも無かった。

その夜、穂琥は綺邑に一つをお願いをした。その願いに綺邑は唸る様な声を発して何も答えずに消えてしまった。あれは決して肯定の沈黙ではない。悩んだ末の沈黙だ。否定するわけでも肯定するわけでもない。だから聞き入れてくれたかそうではないのか穂琥には

わからなかった。

穂琥が就寝した後、綺邑は薪の眠っている部屋にずっと顕現した。薄暗い部屋。

そんな薪を軽く睨んで綺邑はため息をつく。いつまでも寝ている薪に苛立つ綺邑。向かいの部屋で眠っている少女の不安を考えているのかと。

―致し方ない。これ以上世話をするのも面倒だ

綺邑はふっと薪に近づき思いがけない行動に出た。

今まで動かなかった薪の身体が僅かに動いたのはそのときだった。

「ん・・・」

少し苦しそうに声を漏らして薪が眼を開ける。そしてぼやける視界に移ったその姿を見てその名を呼ぶ。

「き、ゆ・・・？」

「ふん」

ぼけている頭が次第にはつきりする。そして目の前に居るのが本当に綺邑であることに気づいて驚いて飛び起きた、と同時に全身に痛みが走りぬけ薪は倒れるように枕に頭を戻した。

「貴様、死にたいのか」

「いや、そんなわけないでしょ。何で・・・。魂石に感じるこれは・・・眞稀じゃねえな。お前か」

綺邑はそれに返事をしない。薪は少し意外そうな表情を浮かべながらも綺邑に礼の言葉を述べる。不機嫌そうに鼻を鳴らして綺邑は穂琥の居るであろう方向を見てくいと顔を動かす。

「穂琥・・・」

「行つてやれば」

冷たいその言葉に苦笑いをしながら薪はゆつくりと立ち上がってふらふらした足取りで穂琥いる部屋をノックする。

「はい」

間の抜けた声、否。安心できる暖かい声。扉を開けて視線がぶつかる。そして穂琥の眼は見る見るうちに大きく見開かれ叫びながら飛び込んできた。

「薪――！馬鹿――！」

飛びつかれ、力が入らず後ろに倒れる。

「いつて」

「いてて・・・ご、ごめん！でもよかった――！」

心底安心したような顔でそういう。そんな穂琥の顔を見て薪もどこか落ち着き安心する。薪の部屋から呆れた顔で綺邑が出てくる。

「あ」

「あゝ、なんかよくわからんけど助けてもらつた」

「そっか！じゃあ私のお願ひ聞いてくれたんだ！」

妙に嬉しそうな声を上げて綺邑に笑いかける穂琥。それを見て薪は首をかしげる。お願いが何だと聞いても穂琥は内緒だと言つてにか笑う。

はあとため息をつく綺邑。それを聞き取った薪が驚いた表情を見せた。どうやら綺邑がため息など珍しいなんてものではないらしい。

「それと居るとしたくなる」

「だろう」

「わっ！それどういう意味よ！」

綺邑と薪の会話に穂琥が割り込む。そのままの意味だと返す薪に穂琥はまたもや馬鹿の連呼で薪を叩く。

「で？綺邑よ。こいつの世話をしてくれたって？」

落ち着いてから薪がそういった。綺邑は黙した。それは恐らく是の沈黙。その意外な行動もさることながら綺邑を前にしても穂琥がむくれなくなったことの進化にも驚く。果たして綺邑に丸め込まれたのか穂琥が認めたのか。知ったことではないが女とは難しい生き物だと思ふのだった。

「オレ、男でよかったなあ」

「何考えているの？」

穂琥に突っ込まれる。

「下らない事だろう」

綺邑に凶星を突かれる。薪は苦笑いして綺邑の言葉を肯定する。

「でも、本当に面倒見てくれてすごく優しかったよ？」

「綺邑が？」

「うん」

嬉しそうに笑う穂琥に薪はひとまずよかったと肩を落とす。それにしても綺邑が穂琥に甘いのは一体なぜか少し気になるころではあるが。そもそも果たして穂琥に甘いのか、薪に厳しいのか。知らないことだが。

「それにしても薪とは違ってお姉ちゃんは文句も言わずに散歩に付き合ってくれるんだから！」

「あ、そうですか。・・・え？」

聞きなれない単語が穂琥の言葉の中に有ったような気がして薪は穂琥を二度見する。

「おね・・・?!」

「うん！」

「はぁ・・・」

薪の驚きの言葉に穂琥が答え、綺邑が再び野ため息を漏らす。一瞬の静寂した空気に穂琥は疑問を覚え首を傾げたがどこか何かを理解したらしい薪がにやりと笑う。

「はっはぁ〜ん。なあるほどね〜」

妙に間延びしたその言葉に綺邑の眼光が鋭く光る。それを見た穂琥

は今まで穂琥に向けていたものは睨むや威嚇するといった類のものではないことを悟る。その強さと来たら穂琥なら心が折れてしまいそうなくらいだった。しかしそれをもっともしていない薪の根性も中々大したものかもしれない。

「お前にそんな感情があるとはなあゝ」

楽しそうに笑っていた薪の顔が急に焦った表情になったので穂琥は綺邑を見ると確実に戦闘態勢だった。

「つと、逃げます」

薪はそそくさとその場から離れる。離れた瞬間、綺邑の踵落しがそこに入る。薪が逃げていなければ直撃だっただろう。

「貴様っ」

「わっ！？ごめん！マジ悪かった！！」

薪は綺邑の攻撃を必死になってよける。ここで穂琥が思うのは薪とこんなキヤラだったかということ。比較的この光景は見慣れ始めている。つまり薪が綺邑を挑発、というのか。とにかくそういった類の発言をすることから勃発するのだが、つまりは薪の言動に問題があるわけだ。薪は学習というものはしないのだろうか。不思議だ。

「止めろって！本当に！こんな激しい運動量じゃまた夢の中だって！！」

「知るか、落ちろ」

綺邑の言葉に若干本気を感じて焦る薪。必死で逃げている最中、ふつと綺邑の動きが止まった。

「ん？どうした？汗が出てるぜ？」

「ふん」

綺邑は暑さからフードを取った。ふわっと肩までの橙の髪が揺れる。茶色も綺麗だったがやはりこの色のほうが綺邑には美しく似合う。

「相変わらず澄ましてんな」

「黙れ」

綺邑は薪を一瞥してから帰ると告げて消えた。

第三十八話 見分けた開眼の差

薪もすっかりよくなって通常通り、とまでは行かないまでも元氣を取り戻した。朝になって起きてくると部屋で軽いストレッチをしている薪が居たので穂琥はなんとも安堵した気持ちになった。

「おう、おはよう」

「おはよう」

軽い挨拶を済ませる。身体を伸ばしながら薪がこれからの予定を打ち明ける。

「よし。だいぶ身体もよくなったし。麻臨探しに行くぞ」

「・・・・・・？」

「ほくちやああん？」

「ももも、申し訳ございません！」

穂琥を「ちゃん」付けで呼ぶときは少なからず穂琥が失態をしたときだ。なので無意識に謝る穂琥。

理解していない穂琥をそのままにして強制的に薪は移動術で移動を開始。その間、誘拐だの拉致だの叫んでいたので落とすぞと怒りの叱責を入れて黙らせる。そうして着いた先は薪が気を失うほどの争いをしたあの場所。

「やっぱり麻臨はここにはなさそうだな」

そもそも、こんな争いを始めるきっかけは麻臨だ。気を失いそうなほど危険な状態ではあったがその麻臨の気配があれば気が吹っ飛ば

うが回収に向かっていた。それでもそれをしなかったということは麻臨の気配はここには無かったということ。眞稀的にかなり限界に近かったために、もしかしたら見落としたかと思っただけ確認のためにここに来たがやはり気配は無かった。

ならどうするかといえば考えるまでも無く李湖南を探し出すほか無い。寸前まで追い詰めてしまったがそろそろ意識くらいはあってもいい頃合だろう。

ふつと薪が穂琥を見て動かなくなった。穂琥はそれに少し驚いてそれからなんとなく焦る。急に薪が鼻の先が当たりそうなくらいに近寄ってきたからだ。幾ら兄妹でもこの距離に顔があるのは気が引ける。

「ちよつと・・・？何・・・？」

「なに？」

いや、それはこっちのせりふだ。穂琥はそんな事を口走る。瞬きもしない薪の眼が見ているのは穂琥の『眼』。

「開眼、しやすいだろう・・・？」

「え？あ、うん。帰ってきたその日にお姉ちゃんが使いやすいようにしてくれたんだ」

綺邑は一体どこまでこの穂琥を気に入ったのだろうか。薪はその意外なことに正直驚きを隠せないでいた。

「それで？どうやって李湖南を探すの？幾ら薪でも難しいでしょう？」

「お前がやるんだ」

「え?!」

驚く穂琥を無視して薪は穂琥に開眼するよつに命ずる。無論、桃眼ではなく白眼のほうを。言われるままに開眼すると薪はまたまじまじと穂琥の眼を見る。

「ん。母上のはまた違うな、雰囲気が。雑な感じがするな」

「え・・・」

「雑で大胆でコントロールがまいち出来ていない感があつて」

「何それ!それって・・・」

「でもすごく強大で繊細なところがあつてどこか美しい」

薪の言葉に偽りは無い。むしろ今の薪は穂琥の白眼に見入っていて自分が声を出していることすらほとんど無意識の状態にも思える。なんだかそれが薪の褒め言葉ととっていいのか悩むところだった。ただ、今それを素直に薪からの褒め言葉だと受け止めると赤面して頭がおかしくなりそうだったので頭を空にする。そこでふっと気づく。

「李湖南の眞稀だ・・・!」

「お、見つけたか」

穂琥から離れて腰に手を当てる薪。まるでそれを穂琥が言うのを待っていたかのような雰囲気だった。

白眼は『相手を離さない』もの。故に一度でも攻撃を加えれば遠距離にいようがその位置を把握し、その把握できた時点で攻撃可能の技。故に黒眼よりも反則に近い技だ。そして何より。この白眼と黒眼を両方持ったとしたらそれは最早反則の領域を超える。

「薪は持っていないの？」

「おう。持ってねえ。でも過去にいたらしいけどな」

「え！？」

「歴代の慇懃の中で。詳しくはオレも知らん」

薪でもわからない事が眞匏祗の歴史の中であるのが少し意外だった
穂琥は面を食らった気分になった。

「おし。行くぞ」

薪は穂琥の腕をつかんで即座に走り出した。その速さは目玉が飛び
出るくらいだった。

「ちょお！？病み上がりがそんなかつ飛ばしてどうするのぉ！！」

「うるせえ。今逃がすよりはましだって」

薪はさらにスピードを上げる。薪は実際、自分自身のみで走ったら
一体どの位早くなるのだろう。穂琥はこの速さにむしろ呆れを感じ
ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5247y/>

眞匏祗'

2011年12月2日18時47分発行